
俺が事故って起きたら紅の鉄槌少女（ヴィータ）になっていた【ネタ】

恋町小路

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺が事故って起きたら紅の鉄槌少女ヴィータになっていた【ネタ】

【Nコード】

N3668Y

【作者名】

恋町小路

【あらすじ】

事故って神様に協力することになって、起きたらようじょ（ヴィータ）になっていた！

原作ヴィータはどうなっているのか？

このお話は植物状態になった主人公（オリ主）が自分の体を取り戻そうと奮起するお話となっています。

元の体に戻るため幻想入りして神様はじめました！（東方無関係）。基本性能ヴィータ+神様レベルアップで強くなっていく予定。

いろいろ突っ込みどころ満載であることを明記しておきます。

「話『事故つたら神様に会って協力することになった』」

序章

秋が過ぎ去り、十一月の末ともなると寒気が流れ込んで、海辺の街も迫る年末のための準備に追われているようだった。

市内の中心部ほどではないが、休日のこの時間ともなれば駅前是人通りで活気付いて、冬の装いの男女達が交差点を行きかっている。ネオンが切り替わり、駅から吐き出された人々と駅に向かう人々が入り混じり、色とりどりのコンストラクトをランダムに生み出していた。

空気は冷たいがそれほど寒くもなく、天気予報では雨にご注意と言っていたが、まだ雨の降る気配は空からは覗えなかった。

その路上の様子を一人の青年が眺めていた。

身長は一七五程度と均整の取れた体つきで、何かスポーツをやっているのではないかと思わせた。

精悍な顔つきは日焼けしていて、冬など気にも留めていないというような雰囲気をかもし出している。

厚手の黒いジャケットにお気入りのデニムのジーンズは適度に色あせていて、青年のお気に入りアイテムの一つだった。

いつもなら革ジャンという出で立ちが基本なのだが、今日はデイトである。

身だしなみと気分を変えるために大学を卒業した先輩から借りたのだが、いかんせん着慣れていないので、わずかばかりのアンバランスさを感じなくもない。

野性的な風貌は美男子というには切れ味があり過ぎて、目つきも睨むと怖いのだが、一種の愛嬌を持った口元がそれを緩めるので、彼を知る人間はその風貌に惹き付けられて止まなかった。

とは言っても当の本人はそのことを自覚したことなど一度もなかったのだが。

俺の名前は天道司てんとどうつかひという。

天道に司るという字を使うのだが、実にご大層な名前である。というのもこの名前はもう死んだ俺のばっちゃんがつけた名前で、天道家に相応しい、俺を守ってくれる名前だという。つかさ、つかさと俺を可愛がってくれたばっちゃんは十年も前に亡くなり、過疎化が進む田舎の実家では親父とお袋が二人で暮らしていた。

その俺は今は海鳴市に住むごく普通の大学生である。

大学は二流だが、俺はこの大学に通うために親元を離れ、一人ボロアパートを借りて、大学とバイト先を往復する毎日を送っていた。貧しいながらも充実した大学生活と言えただろう。

四年目に入り、そろそろ就職するか実家に帰って家業を手伝うかの選択を迫られていたが、どっちつかずに曖昧なままにしていた。去年までの俺ならば、迷わずに実家に帰って、家の手伝いでもしようかとのんびりと構えていたことだろう。だがそうもいかないことになった。

好きな女ができたのだ。

もう一度言う、重要なことだ。

『好きな人ができた』

彼女は海鳴の人だった。

実家に帰れば二度と会えないかもしれない。

離れ離れになる、それは考えただけでも苦しくて、老いた父母がいる実家に帰る、という選択肢を無視し続けていた。

我儂だという自覚はあった、あったが、恋と将来を諦めるにはまだ自分は若すぎたのだ。

だから俺は就職を目標に企業のパンフなどを集めながら将来性のある就職先を吟味していた。

いくつかの目処はつけたものの、自信等はまったくなかった。

バイトの経験はあるものの、社会人としての心構えというものはまだ強く自覚したこともなかったからだ。

そして今の俺がもつとも関心があるものは彼女のことだった。

告白はまだしていないかったが、ある確信はあった。

彼女は俺のことを好いていてくれているのではないのかという、少しばかり自分に都合のいい妄想。

妄想でもいい、彼女が笑ってくれている。

そんな未来を想像して心が弾むのを抑えられそうにない。

現実に意識を呼び戻す携帯のメール着信音。

ついこのあいだ登録したばかりの着信音だった。

好きな人の曲であり、司も最近CDを買って聴くようになった。

高校の頃は女の趣味に合わせて何かをする、というのを恥と考えていたこともあった。

人間変われば変わるもので、恋というスパイスが司の目を見開かせたといつていい。

待ち合わせをしている駅前の広場の植え込みに腰を預けて時計を見上げる。

広場の中央にはシンボルのように時計台が備え付けられている。
時間は朝の九時。

司同様、待ち合わせをする男女の姿もちらほら見える。
寒かろうが暑かろうが恋をする人間に季節など関係ないのだ。

大事な話がしたいから、俺は彼女を日曜日にデートに誘った。
彼女がそれをデートと思うてくれれば、それが俺の心を加速させる。

想いを告げる決心になる。
ドキドキしながら携帯のメールを開いていた。

『ゴメンなさい！ ちょっと遅れそうです。駅にいるから三分発の
に乗って行きます』

なあんだ、遅刻か、と俺はドキドキさせたことをどんな風に言っ
てやろうか、と頭の中でシミュレートするが、俺は女の子と気の利
いた話をしたことがないのである。

一息吐いて胸の高鳴りを押さえて短いメールを打つ。

『了解』

と短くそれだけを返信する。

素っ気無いが、残念なくらいに絵文字を使いこなせないアナログ
人間である。

友人同士のメールのやり取りもいつもこんな感じなのだが、問題
があったことは一度もない。

待った？ いや全然待ってない、なんてありふれた台詞のカード

さえ今日は切れそうもなかった。

まあいいか、と俺は青よりも灰色の雲が多い空を見上げていた。雲の隙間から日差しが差し込んでいて、雨の心配はしなくてもいいように思えた。

俺は彼女が出てくるであろう改札口をじつと眺める。

電車がつくとその度に改札口から人が吐き出されてくる。

電車でここまで一二分、と時計を確認しながら、植え込みのレンガに腰掛けて彼女を待つ。

後一分……、一〇分……、九分。

刻々と待ちきれない時間は切なさとなって過ぎていく。

改札口に行こう、と待ちきれなくなつて、立ち上がった次の瞬間、世界を悲鳴にも似た叫びが切り裂いていた。

それはほんの刹那の瞬きもする間もない時間でしかなかった。

急ブレーキの音が鳴り響く。

その音に俺が振り向くと目の前に銀色の光を見ていた。

身体は咄嗟のことに身動き一つ取れず、信じられないような衝撃が全身を打っていた。

轢かれた。

それを自覚する前に司の意識は一瞬にして刈り取られていた。

暗転

淡い光が見えた。

それは司を包み込んで、柔らかい羽毛のように包んでいる。無意識の呼吸を吐き出し胸が上下する。

かすかに眉を動かすと、司は浅いまどろみから目覚めていた。

目の前は真っ白な世界そのもので、地平線と思わしき果てに淡い濃淡のあるグラデーションが広がっていた。

「へい、ユー？」

いきなり頭の中に響いた軽い挨拶に、俺は眩暈を覚えて、思わず額に手を当てていた。

ここはどこだ？ 俺は何でこんなところで寝ていたんだ？ 今の声なんだ？

あたり一面が真っ白で、浮遊感による肉体の不安定さにパニックに陥りそうになる。

空中に身体が浮かんでいたのである。

そして声をかけたと思わしき人物の姿は周囲を見回してもまったく見当たらない。

落ち着け、なにがあつた、なにが起こつた？ 事故？ そうだ俺は車に轢かれたはずじゃないのか？

目が覚めるなら病院のベッドの上とか、それが相場だろ。

「もしもーし？」

「……あんだ、誰だよ、おっさん」

俺に話しかける声だけの存在に、一応、声的にそうであるつといて呼びかけをする。

「ふ、わしか、わしはな神様よ」
「……………」

紙、ならぬ神と聴いたのだと自覚するが、気軽に挨拶する神に心当たりはなかった。

親戚に神様なんていないしな、とどうでもいいくらいありえない思考をしていた。

「すみません、ドツキリなら帰るわ……………」

こんなふわふわした空間でどう帰るのかなんてわかりもしないのだが、とりあえず意地悪な意味を込めて言ってみる。

「ちょ、帰るってどこによ？ お前さん、何があったか覚えておるかの？ 車にさあドカーンとぶつかって危うくひき肉になる寸前だったのよ？」

俺は思い切りため息をついて見せると、否定を込めて頭を振った。今どきその手のジョークはないだろう……………。

俺ここにいるし、性質の悪い夢に違いない、と思いたい。

実際のところ、事故に遭ったのは確実なんだが、この頭の中の存在を容認しがたかったので否定することにした。

「ふう、夢か……………」

「いや夢じゃないから、君ね、マジで車に轢かれました。ちなみに植物人間確定な」

「おい……………」

衝撃的な事実だな。

嫌なこと言いやがる。

少しばかり白けた気分に戻る。

いくらなんでもそれはないわ。

「今日デートなんで、それはちょっと遠慮します」

「いやいや、確かに君事故ってるからデートはできないし、これ見てみ」

と神様と名乗った男が言うと、空間に駅前が映し出される。

どういう仕掛けかはわからないが、ハイビジョンより鮮明に現場を映し出していた。

事故現場

その一角に悲惨な事故現場が映し出されていた。

多くの見物人が取り巻いて、それを眺めながらひそひそと囁きあっている。

赤い光を回転させた救急車がやってくるのが見えて、現場を保存するために集まった警官数人とパトカーの姿が見えた。

対応が早い。

日本の警察は起こった事件に対処する能力だけは世界一である。

起こる事件に対しては積極的に介入することがない、というマイナスも含んでいたが。

(ひき逃げだつてよ)

(誰だよ、轢かれたの。男?)

(若いにーちゃんだな、すっげー血だな。こりゃ死んだか)

(ひき逃げした車、見たか?)

(見た見た、白のセダン。プレートも見たのいるかもな)

(そりゃよ、すぐ捕まるな。つまんねえの)

嘘、だろ……?

轢かれたのつてもしかして、やっぱり俺なのか?

画面がアップされて現場を横から眺める視点になる。

「轢かれたのはお前さんじゃよ、天道司」

「う、そ、だ……」

力のない否定の声が口から漏れる。

非現実なほどの圧倒的な現実の光景が目の前にある。

「本当だしさ、諦めなよ」

「ふざけんなよ」

吐き出した言葉に力はない。

身体の震えを自覚しながらそれは止まらない。

「おやおや……。ありゃ、お前さんの彼女かね?」

神と名乗る男のその言葉に、俺は映像を再び凝視していた。

彼女がいた。

人ごみをかき分け、徐々に前に、事故の跡地に足を踏み入れていた。

彼女を見る位置で俯瞰視点になる。

彼女が足を踏み入れたのは血まみれの現場だった。

頭の中が真っ白になる。

や……める……、よせ……、俺はここにいるんだ、見るな、見るんじゃない。

その声をかけるが彼女は気がつく様子もない。

伸ばしかけの肩まである彼女の髪が揺れて、その艶やかさに目が奪われる。

とてもきれいだっただ。

そのアーモンドのくつきりした瞳が揺らいで、警官達と救急車を呆然と見つめていた。

小さく可愛らしい彼女の口元が動いて呟いた。

テンドウ センパイ？

警官隊が数人、人の視線を遮るように立ち、タンカーを担ぎ上げた救急隊員の姿を隠す。

後部の扉を開け放たれた救急車にシートをかぶせられた俺の肉体が運び込まれていく。

タンカーから血痕がアスファルトに落ちて、新たな赤い染みを作り出す。

彼女になんて現実を見せてやがるんだ！

「ヤメロ、ヤメロ、ヤメテクレー！！」

俺は目を閉じ、耳をふさぎ、ただ叫んでいた。

もう何も見たくなかった。

ただ警官の無機質な声がパトカーの無線で一つの事実を伝えてい

た。

「事故の被害者の身元判明。海鳴市××在住……、名前天道司。海鳴大学所属四年つと。まだ若いのにな、轢き逃げなんてな……」

警官が現場を苦い顔をして振り返って、感情の滲み出た顔を隠すように帽子のつばを下ろす。

彼女は動かない、いや動けないでいた。

今、私はナニを聞いたのだろうか？

ヒガイシャ テンドウツカサ ウミナリダイガクシヨゾク……

嘘、だってさっきメールして、昨日だって電話でお喋りしましたよね？

「先輩……、どこ、ですか？ 隠れてるのかな……。やだ、先輩、どこにいるの？」

ふらふらと歩みだして、警官に押し留められていた。

救急車が走り去った路上の向こうの虚空、さっきまではかろうじて晴れていた空は厚い黒い雲に覆われ始めていた。

映像・フェードアウト

「現実と理解したかのう？ 天道司」

「ああ……、わかったぜ、クソヤロウ」

白い世界を振り返ると、頭の中の存在などではなく、神と名乗った、白髪で顎にも白いひげを蓄えた白衣の着流しの着物姿の老人が立っていた。

手には曲がりくねった杖を持ち、かもし出す雰囲気は神というより仙人といった風情だった。

「クソヤロウ、かね。神に失礼な男だ。こつ見えても海鳴の神なんじゃぞ？」

海鳴の神？ 俺は胡散臭いという目で目の前のおっさんをジト目するが気にする様子もない。

「その神様が事故った俺に何の用だよ？」

「早い話がのう、わしもここの神様やるのちつとばかり飽きていてな。少しばかり見込みがありそうなのがこないかと張っておったんよ」

「はいー？」

見込みって何だ？

「というわけで神様やらんか？ はじめは見習いじゃがな」

「というわけとか、わけわかんねえよ！ 何も説明してないし」

「お前さんなあ、血筋に神性が混じっておるようだな。海鳴でも滅多にみんな気質でな、死に掛けたのを幸い、魂を召喚したのよ。まあ神といってもピンからキリだがよ」

何のことやら、何を言ってるんだかもわからねえ。

シンセイ、って何だ？

「まだ俺は死んでねえみたいだ。神様は他で探しな」

「お前さん、事故のせいで元の身体には戻れんぞ。意識不明のまま朽ちるのを待つつもりか？ このまま放置なら持つて数年で命は尽きよつ」

「植物状態ってことか……、なあ神様の力で戻せないのか？ 海鳴の神様だろう？」

「ふふん、戻せなくもない」

「本当に！？ 戻せ、今すぐ戻しやがれ！」

俺は得意気に言った神様をとっ捕まえて、襟元を構わずに締め上げていた。

しかし次の瞬間には、気がつく俺の身体は宙を舞って放り投げられていた。

叩きつけられる間に受身を取る体勢になるが、ポフンっと真つ白な地面に沈み込んで弾んでいた。

「神に乱暴するでない。ご利益がなくなるぞい？ 話を訊く気になつたかの？」

目の前にごつい杖を突きつけられ、俺は頭を上下に振っていた。

俺はこう見えても合気道三段だが、まったくなす術もなく投げられるなんて、素人相手には考えられないくらいだ。

だからわかる、得体の知れない力で投げられたのだと。

頷いたのは目の前の神に初めて沸いた恐れと本能の働きからだつた。

「わしにはお前さんを元の身体に返すだけの力はある、あるが、世

上の穢れというものが神の力を妨げるのよ」

「穢れって？」

「邪念やよこしまなもの、穢れそのものでできた妖魔がそれにあたる。それが力を妨げるのだ。邪魔するのはお前さんに溜まり積もった悪しきものの穢れよ。覚えがないかの？ ごく最近や昔にお前さんの身の回りでよからぬことや事故が起きなかったかの？」

「えっと、何でだ、何でそんなことまで……」

身に覚えはあった。

それは最近どころではなく、ずっと昔から俺の周りでは不思議なことが起こっていた。

誰にも話したことがないし、話せば気味が悪い子として見られたからだ。

唯一、ばつちゃんだけが俺に起こることの意味を理解しているようになところがあった。

魔よけの印や護符を孫のランドセルに括り付けたりもした。

神の言葉が蘇った思い出を霧散させる。

「お前さんの神性がそれらを引きつけるのだ。今のお前さんの肉体は邪念をもった穢れで雁字搦めになった要石のようだ。わしが介入してなければ早晩にでも弱ったお前さんを取り込んでしまうことだろうよ」

「何でだ、何で神様は俺に構うんだ？」

「みすみす未来ある若者の将来を不意にするのは憚びなくてな。それにお前さんに海鳴の神を押し付けて、わしもそろそろ隠居したいのが本音よ。なんじゃ、嫌そうな顔をするな」

えー、それが本音？

「見も知らず会ったばかりなのにすぐくすぐりうずうしい神様だ。」

「ねーから、俺はごく真つ当に人間やりてーよ。故郷だつてあるしな。このまま実家に帰りたくらいだわ」

「まあ、なる気があるうとなかるうと、お前さんが意識を取り戻すには穢れを祓わねばならんのよ。それができるのは神性を持つ者自身の力が必要よ。穢れを祓えば祓うほど神の力は増していく。それをお前さんにやってもらおうと思っくんじゃ。お前さん自身の手で立つて貰わねばならん」

「……なるほどな、等価交換つてやつか。あんたが力を手に入れるために俺に働けと？」

つまりはそういうことなのか。

神様も俺が協力しないと力を発揮できない。

植物人間になって死ぬのを待てと言われて待つのはいいない。

これは当然の選択なんだ、と自分に言い聞かせていた。

「イグザクトリー、じゃ。お前さんが願う力の形をまとつて現界してもらふことになる」

「はいい？」

「今のお前さんは魂だけ、仮初の身体が必要になる。安心しろ、ベースは人間型になる。持つ力もお前さんに近い力を持ったものになるだろう。わしのここで溜め込んだ情報ソースを元に構成するから問題はない」

「も、問題？ あるだろ、絶対！」

「気にするな、多少の外見の違いはあるが、お前さんの神性に期待しようではないか。新たな因果の種をまいてアマツカミどもを慌てさせてやるわ」

「おっさん、話訊けつてばよ！！ つて何か私怨っばい！？」

俺の抗議は一切無視して、神のヤローが俺の額に杖を押し付けていた。

「後で指示はちゃんと出すから心配するな。現界したら海鳴神社まで来るのだぞ。さあ、行け！ 天道司。己が運命を切り開くがいい！」

「のわああああ」

突如開いたブラックホールのような穴に司が吸い込まれて消えていく。

「ふう……、行ったのう。思わぬ拾い物じゃった。事故が起きたのは無印の原作が始まるちょっと前じゃのう。介入するもよし、しなくてもよし。なんにせよよい暇つぶしじゃ。いったい誰になるのかのう？ マテリアル娘とかならないかのう」

神様は好好爺とした顔つきで笑うのだった。

この神様、リリなのファンであった。

「二話『起きたらようじょ（ヴィータ）になっていた』

一章

古ぼけ色褪せた木造建築二階建てのアパート。

壁に塗られたペンキの塗料はところどころが剥がれ落ち、地肌といえる灰色の部分が露出していた。

微妙に異なる色が重なっていて、過去に何度か塗りなおしてきた証拠となっていた。

外面だけは保っているものの、築四十年という年代もののこの建物の中身は、まさにボロアパートと呼ぶのに相応しいだろう。

二階へ続く階段は鉄製であちこち錆が浮き、一部は「危険」と書かれた紙がビニール袋に入れられて段に巻きつけられている。

トイレはあるものの風呂はなく、近くの最寄の銭湯まで歩いて五分ほどで、月三万五千円の家賃だった。

風呂の代わりに薄い敷居で仕切られた露天シャワーが何故かあるが、冬になると配管が凍結して水一滴も出なくなるのが難点だった。

棟続きにいくつかの建物と隣り合っていて、アパートの入居者の半分以上が水商売関係者で占められていた。

周辺の建物の店舗はカラオケ居酒屋や小料理屋、酒店、パブなどが立ち並び、地元の労働者の憩いの癒し場となっている。

怪しげな外国人やヤクザのような男達も女のところに入出入りしていたから、間違ってもお子様が立ち入っていい場所ではなかった。

そのアパートの一角の隅っこに天道司の借りている部屋があった。

目を開くと薄暗い見慣れた天井だった。

ぼんやりとそれを眺めて、俺は自分の部屋にすることを再確認し

ていた。

布団の中で頭にマイ枕を敷いて寝ていた。

アパートの「寮山白」である。

天井の独特な染みは入居した頃からあるもので、今ではすっかり馴染みとなっていた。

2Kのそれほど広くもない部屋には俺だけしか知らない収納スペースが多々あったりして、暮らしやすいようにコーディネートされている。

六畳の畳部屋の布団は万年布団で、実に寝慣れた寝心地となっていた。

人が来ると足の踏み場もないのだが、自分だけのルートを知っている俺には何の問題もないわけだが、さすがに女の子を部屋に入れたことはまだない。

その部屋でいつもどおり目覚めたんだが……

妙なことに気がつく。

寝ぼけて目を覚ますと何もかもがおかしかった。

まずおかしいことというのは素っ裸でいたことだ。

おかげでスースーして、寝返りを打ちながら毛布を引き寄せる。

何かがおかしい。

毛布を持っているのは手である、がサイズが違う上に男の手ではなかった。

その小さな手を見て、ようやくなにがおかしいのかに気がついた。その体に触れてみる。

ほっそりした、なでらかな曲線の肩だった。

次に胸に手を当てる。

厚くない薄い胸はつるぺただが男のものとは少し違う。

その胸は成長段階をまだ迎えていないが、可愛い桜色の二つ

の小さな乳首に俺の頭は急速に覚醒していく。

何だこれは……

俺は混乱していた。

何が何だかわからない。

直接見るのが怖くて考えたくもないのだが、アレの感覚がないことには気がついてた。

朝の目覚めで男にはつきもののアレの膨張感は若い司にとっては毎朝処理に困る代物であった。

ときおりは処理していたものの、そうした後は少し空しい気分になるのだった。

おそろおそろ股間に手をやると、やはりついてるべきものがついていなかった。

ないばかりではない。

幼いスリット状のその秘部の窪みを指先で確認して愕然とする。

これは夢か、夢であってくれ、と恐る恐る顔を上げて、その先にある鏡を眺めていた。

赤い長い髪を乱した少女の顔が見つめ返してくる。

布団の上で寝そべって鏡を見つめている。

手を動かせば、鏡の中に少女は同じように手を動かした。

くつきり整った顔立ちに、大きな瞳、どう見ても日本人ではない赤い髪の色。

外見の年齢は小学生の中頃くらいだろうか、女の子の外見年齢など司にはわかりようがない。

えーと、幼女が俺の部屋にいて、この幼女が俺、なのか？

鏡を見ると、俺の表情に合わせて、鏡の中の少女も表情を変える。

どこことなく情けない顔をしていた。
完全に一致した動きだった。
布団を頭からかぶって、しばらく現実逃避に眼を瞑っていた。
毛布は暖かく裸身を包み込んで、このまま寝れるなら逃避に任せ
て寝てしまいたかった。

そして思い出す。

俺は事故に遭って、嘘か本当か海鳴の神様に会った。

あれは現実だとしたら、俺の肉体はどうなったのだろうか？
そもそも今のこの体はいったい誰なのだろうか？

救急車で運ばれた、ということは俺の体は病院にあるはずで、植
物状態にあるという。

不味い、非常に不味い。

元の体に戻るには神様に協力しなければ元に戻れないと提示され
ていた。

そのために手を貸すにしてもこの体で何ができるのだろうか？

思考すると、途端に腹が減ってきた。

今は何時だろうか、と照明をつけるのは不味いと判断して、目覚
まし時計を手繰り寄せる。

目覚まし時計は予想通り定位置にあって、秒針は昼を過ぎたくら
いだった。

空腹を感じながら布団から這い出て立ち上がった。

細身の少女の裸身が窓から差し込むわずかな光で暗がりには浮き彫

りになる。

歳相応の体形には色気はないものの、女特有の曲線は最低限描いていて、それは柔らかい肉体を連想させ、その妄想を頭を振るようにして追い払った。

何か着る物は……

暗さに目が慣れてきたので押入れを漁るが、この幼女体型に合う服などありそうもない。

身の丈が一七五センチある成人男性の服を着るには身長が足りなさ過ぎた。

俺、背が高すぎるだろ。

適当に出した大きなシャツとズボンを摘み上げて身体に当てる。

どうも一三〇にも届いていない気がする。

シャツだけで太ももに届くのだが、素っ裸でいるのもつらいとそれを着てみることにした。

鏡で見ると白いシャツから伸びた生脚素足が映えて、股下でヒラヒラ揺れるシャツがどことなくエロかった。

ある意味破壊力のある姿絵だった。

これは駄目だ、ヤバイ、ロリコン禁止！

すかさず脱ぎ捨てるが、身体が冷えるのは不味いとでかいトレーナを取り出してかぶった。

構図は先程と同じだが、エロさはだいぶ薄い。

しかし素っ裸で出歩くのも問題があるわけで、このままでは表にも出られない。

とりあえず服は後回しにして、冷蔵庫を開いていた。

パンと牛乳しかねえ、とため息をつくが、ないよりはましだ。

ちっこいぶんだけ小食で済むかも知れねえ。

布団の上に座り込んで、食パンを齧り牛乳で胃袋に流し込み、ようやく一息をついていた。

玄関から新聞を取り出すが朝刊で、今日の事故は明日以降取り上げられるとわかっていてもそれを広げて眺めていた。

新聞を読むのは朝の日課で、今日はデートだと朝刊を読む暇がなかったのだ。

気になるような事件はない。

新聞を雑誌置き場に放り投げて、押入れから短パンと長袖のシャツを取り出すと、サイズの差に愕然としながらベルトを締めていた。ワンサイズどころの騒ぎではない。

短パンの膝下まで突き抜けている。

上着は革ジャンを選ぶ。

外見的なアンバランスさには眼を瞑るしかない。

靴は履けるサイズのものがなかった。

ブカブカを通り越してスカスカだがスニーカーを履くことにする。夏用のサンダルなら辛うじて脱げないが、さすがに今は冬であるから目立つだろう。

どっちにしろ目立つことこの上ないわけで、一応TPO的にスニーカーだろうという結論に達した。

帽子をかぶって最後の仕上げをするが、帽子もぶかぶかで赤い髪が胸元に零れ落ちる。

どうにかまとめられないものかと苦闘するが、まとめ用のゴムさえ使ったことがない俺は背中に流して諦めた。

鏡の前に立ち、やはりどうしようもないアンバランスさに笑ってしまふ。

帽子を目深にかぶり、ポケットに手を突っ込むと、まるで家出し

た浮浪少女に見えなくもない。

しかし何だ、これで出かけるのか、と一抹の不安がよぎる。

まず、この部屋にいることを大家、及び周囲の住人に知られることは不味い。

天道司は今頃病院である。

連絡が行っているだろうが、両親がこっちに来る可能性もある。

鉢合わせすれば面倒なことになるし、今のこの俺の身を明かすものすらない。

そして誰かが訪ねてくる可能性が高いのだ。

植物状態で長期入院ともなれば、この部屋自体が引き払われる可能性もある。

もしそうなればいるところなくなる。

大学に頼りになる奴もいるが、それは天道司が作り上げた人間関係である。

得体の知れない少女の言い分を真実と信じられる根拠がない。

何よりも植物状態で生きている俺が存在するという時点で信じがたいはずだ。

そこまで考えて、俺は色々と言っている事実につっぱー深いため息を吐き出していた。

そっぴや、海鳴神社に来てって言ったな。

場所どこだっけ？

海鳴市のマップを広げて位置を確認する。

バイクなら近いんだが、この体のサイズでは乗れるはずもない。

いや、それよりもだ。

俺がどこの病院に入れられたのかを確かめる必要があった。

電話帳を取り出して、病院を確認する。

天道司が入院しているかを聞き出すための台詞をシミュレートし

て、一軒一軒ずつ確認していく。

四件目でヒットした。

海鳴市中央総合病院。

そこに緊急入院していた。

いぶかしむ電話の向こう側を無視して電話を切る。

さて、どちらから先に行こうか……

慎重にドアから表を窺い、誰もいないのを確認して外に出る。

アパートの階段を下りると、駐車場で作業をしている大家さんの後姿が見えて、俺は足早にすぐ後ろを通り過ぎていた。

大家さんは気がついた様子もなく車をいじっていた。

アパートの出入りに置いてある、自分のバイクを見てきちんとカバーがかかっているのを確認し、一安心してそのまま敷地を出た。何せ購入してまだ半年の司が大事にしているバイクだった。

今月はツーリングに行く予定だったが、その約束は果たせそうになかった。

そして駅に向かう。

どのみちどちらに行くにしても駅を素通りすることはできなかった。

それにどうしても確認したいことがあった。

異様に体が軽い。

実際に体も縮んで背も低く体重も軽い、という意味ではなく、基礎的な身体能力が向上しているのが理解できた。

体の重さを感じさせないバランスの取れた肉体である。

とはいっても、今の俺にはだからどうした、程度のことであり、深く考えている余裕などなかった。

歩きながら手持ちの金のなさを認識して不安に駆られる。

キャッシュ・カードは司自身が財布に入れていて、引き落とすにはそれが必要だったからだ。

さしあたっては部屋に残してある、バイトで貯めたへそくりがあるものの、ツーリング用に貯めていた金であったので少し気が引けていたが、金がなければ何もできないとそれを持ち出していた。

客観的に見れば窃盗である。

しかし今はそんなことにこだわってはいられない。

今の俺の頭の中を占めるのは、あの事故の現場、俺が轢かれた駅前広場のことだった。

事故に遭う瞬間のことは、あの悲鳴にも似た急ブレーキの音があっても頭の中に思い出すことができた。

轢かれた後の記憶は、あの神様と会う時間のものしか残っていないかった。

だからどうしても疑ってしまうのだ。

本当に俺は車に轢かれて生死の縁をさ迷っているのだろうか？

確認するのも怖い、何もしないでいるのはもっと怖かった。

自分の知らないところで自分が死んでしまう。

もしそうになったら、今の自分はいたい何者なのだろうか？

自然、足取りは速くなる。

駅が見えてくる。

駅前広場に入ると、植え込みのレンガの壁が一部崩壊した現場に到着していた。

すでに野次馬や警官達の姿はなく、現場保存のために残された黄色いテープが張られているのみだった。

ガードレールも一部変形し、どす黒く変色した血がこびりついている。

ここで俺は轢かれたのか……

アスファルトに残された血痕の跡、一際血の海であったそこは赤黒く染まったままだった。

俺の血が流れて、ずたぼろになった俺がそこに横たわっていたのだ。

気分が悪かった。

不意に寒気を感じて、体を抱きすくめ座り込んでいた。

気持ちが悪い。

誰が俺を轢いたのだ？

胸の内に芽生えた何かがドロドロと糸を引いて、それに飲み込まれそうだった。

しばらく経って、ようやく落ち着いてくる。

胸のざわめきを深呼吸をしてどうにかなだめると、血の気の通い始めた顔をピシヤリ、と軽く叩いた。

こんなところに座り込んで目立ってる場合ではない。

立ち上がるが、足取りが安定していなかった。

まるで酔ってしまっただかのような、肉体と精神が切り離されたかのような乖離した感覚に包まれていた。

俺は病院行きのバス停のベンチに腰かけてバスを待った。
まず病院に行き、俺の存在を確認しなければならぬ。
時間に余裕があれば神社に行くつもりでいた。
いや、できれば今日中にアクセスしなければならなかった。

思考に沈む俺の前にバスが停車する。

ブロロ、とエンジン音を響かせてバスが動き出す。

真紅の髪を持つ少女が乗り込むと、病院行きのバスが走り出して
いた。

バスの中から眺める空の風景は灰色に変わっていた。

三話『病院で 現実と俺』

病院

しんと静まり返った廊下。

肉体を浸食するひんやりとした空気に司は身体をブルリ、と震わせていた。

見上げた治療室の扉のその向こう側では手術が行われていた。

時刻は一六時二〇分を差している。

手術中のランプが点いたそれから目をそらす。

立ったまま、どうしたらいいのかもわからずに、控え室の前をうろろろしていた。

部屋の中は暖房が効いているが、じっとしていると嫌な汗をかきそつで廊下に出ていた。

司が病院に到着してから三時間、合計してすでに六時間、手術を開始してからそれだけの時間が経過していた。

長すぎる。

大丈夫だ、死にはしない。

気休めにもならない心の呟きだった。

例え無事に手術が終わったとしても、植物人間が確定しているなど知りたくもない事実だった。

そうであつて欲しくないことを祈りながら、であるなら今の自分はいったい何者なのだろうか？ 今の天道司という肉体には何者の意思が宿るのだろうか？

そう思考して、嫌な考えだと、額に拳を押し当てて眼を瞑ってい

た。

かなりの重体であったことは司も神様が見せた映像を通して見ていたが、どれほどのものかまでは確認できていなかった。

アスファルトの窪みに溜まった血、ガードレールにこびりついた赤を鮮明に思いだす。

もし意識が戻ったとしても、五体満足に完治するという保証などどこにもないのだ。

リハビリというものがどれだけ苦しいのか、高校二年のときにバイクの事故で足を骨折して入院したことのある司は思い知っていた。あのときでさえ、不自由な足一本満足に動かすどころか、足とそれを動かそうとする全身の神経の不一致に苦しんだのだ。

骨がついた後が一番苦しかった。

奪われたものは二度と元には戻らない。

足が完治するまで二ヶ月かかったが、今の自分の肉体はいつたいどんな状況なのか、それを尋ねるには今の姿は目立ちすぎて、ナス・ステーションに足を運ぶのは控えていた。

交通事故というものは常に不条理で、信じられないタイミングで襲い掛かってくる。

巻き込まれるのは本人だけではない。

家族全体が事故がもたらしたものと戦わねばならないのだ。

通路脇のソファに腰を下ろす。

書類を抱えた看護婦がお大事に、と俺に声をかけて頭を下げてください過ぎていった。

赤毛の少女を手術中の患者の縁者だと思ったのだろう。

何時間もそこにいて離れないのならば誰であってもそう判断することだった。

ただ見た目は外国人の少女だ。

いったいどんな関係なのか、声をかけた看護婦の目には好奇心が浮かぶのを見ていた。

時間の経過と共に焦燥感が司の表情を堅く、無表情なものへと変えていた。

時計はチクタクとただ時刻を刻んでいく。

寒い……

足元から冷えてくる感覚にもよおしてきて、耐え切れなくなつて、恥ずかしいながらもトイレに駆け込んでいた。

一瞬迷つたが、中身はともかく、女の子の外見で男子トイレに入ることなどできないから、当然入つたのは女子トイレだった。

多少の違いはあるがトイレはトイレだ。

清潔なトイレの個室に籠つてお腹をさする。

やはり冷えていた。

半ば素足を晒しているし、革ジャン以外の暖かい衣類がないのが原因だろう。

しかし脱ぐのか……

司を戸惑わせたのは男と女の肉体上の異なる一部分についてである。

部位は同じなれど、立つて済ませたりできない仕組みであることは理解していたから、ズボンを下ろして、下半身は極力見ないようにして便器に座り込む。

興味があるない以前に、それが自分の器官であるという点が非常にナイーブな問題を司に与えていたのである。

腹に込めていた力を解放すると、生理現象に則つた排泄感覚が襲い、体を震わせて行為を終えていた。

下着は何も考えずにトランクスなどを履いてきてしまったのもよ

くなかったのかもしれない。

男のときはなんでもなかった行為に過ぎないのだが、肉体に合わせた服を着るのも体調管理の一環になりそうだった。

そんなことを考えながら鏡に映る俺　赤い髪の少女の顔を見つめていた。

女になる願望を持った男もいる。

そういう趣向と願望を持つことを否定はしない。

外見上は少なくとも男よりは綺麗だし、可愛い部分も多い。

女関係の中身は差し控えるが、綺麗な女の子になればお洒落も気を使うようになるだろうし、変身願望を持つ男は世間のストレスからも解放されるのだ。

性同一性障害という症状は男の体で女の心、もしくはその反対を差している言葉で、今の俺の状態はそれに該当しなくもない。

ただそういう女になりたいという変身願望を天道司本人は持つていなかったし、できるならば男らしく生きたいという本能に生きていた。

このままこの身体に慣れてしまったら一体どうなるのか？

心まで女という生き物に成り果ててしまうのだろうか？

じゃあ男としての天道司のアイデンティティはどうなるんだろうか？

元の身体に戻る可能性はある。

神様になんてどうなるのかさっぱりわからない。

そんなことを考えながら俺はトイレから出ていた。

ふと空気の変化を肌で感じ取っていた。

控え室の雰囲気が一変している。

人の声とざわめき音が聞こえてくる。

緊急治療室の近くには家族のための控え室があり、声はそこから漏れてきていた。

知った男の声と、ここにはいないはずの両親の声だった。立ち止まり、思わず革ジャンごと自分の腕を掴んでいた。

親父……、お袋？

しばらく電話越しでしか聞いてこなかった肉親の声だ。

それを聞き間違えようはずもない。

控え室の近くに寄って、半ば開け放した扉から俺が死角となる位置で中を覗き込んだ。

気配は三人ほどで、一番最初に飛び込んできた背中俺のよく知る人物だった。

先輩だ。

彼は俺の大学の先輩に当たる人ですでに卒業し、この海鳴にある企業に就職し、司も最近はよく相談に乗ってもらっていたし、個人的な恋愛に関することまで相談できる信頼できる人だった。

仲井先輩、とその名を呟く。

先輩がおそらく両親をここまで連れてきたのだろう。

その向こう側にお袋の顔がちらりと見えて、何か言ったのか、親父が笑った。

変わらない。

お袋は息子がこんなことになってるのに冗談が言えるのだ。

俺は両親が四〇手前になってから生まれた子どもだった。

二人は俺が海鳴の大学で一人暮らしすると宣言したときも、親父は頑張り、と一言言って、体には気をつける、とかなり素っ気無かったが、一人息子が自立することを受け入れてくれた。

二人とももう六〇過ぎで孫がいても不思議ではない歳だ。

司がコウノトリとお嫁さん同時に連れてこないかねえ、とお袋は冗談交じりによく言っていた。

結婚とか子どもとか、まだ遊びたい盛りが強い俺には気が早いと思うことでそういうことから逃げてきたが、親父ももう歳だったから、最近では電話すると、親父もいつ戻る？ と訊いてくるようになった。

後数年、卒業して何年かは社会に出て勉強したいと逃げていた。好きな人のこともあって、そういった現実から目をそむけ続けた。きた。

すべてが言い訳だ。

離れているのを幸いになんと言いつづけてきて、また逃げるように今度は事故に遭った。

なんて好き勝手な息子だろうか。

「どうかしたのかい？ お嬢さん」

「え、いや……」

目の前に親父が立っていた。

白髪が混じった黒髪にセーターとストラックス姿で、スラリと様子見のいい姿勢で見知らぬ赤毛少女の姿を見下ろしていたが、口元には警戒心を抱かせない柔らかい微笑みがある笑顔を浮かべていた。遺伝だろうか、天道司もまたそのように笑うのだ。

「その、すみません……」

「あれ、君は？」

お袋が廊下に佇む赤毛の少女に気がついて顔を向けていた。
同時に振り返った仲井先輩が俺を見て、いぶかしむように声をかけてくる。

それに答えずに、俺はくるりと親父達に背を向けて駆け出していた。

そのまま階段のある方へ行き、飛び降りるように駆け降りて行く。誰もすれ違わず、追ってくる様子はなかった。

自動扉にぶつかる寸前で表に飛び出していた。

病院から逃げるように駆けて、駆けて、敷地から道路に出ると膝に手を突いて、荒く乱れた息を吐き出していた。

熱の籠った白い息が肺から吐き出されて、周囲との温度差を明確に浮き彫りにする。

くそ……、俺はどうしたらいいんだ。

空はどんよりと曇り灰色の分厚い雲が重たげに漂っていた。

見上げた空から、ポツリポツリと雨粒が降ってきて、その一滴が冷たく頬を濡らしていた。

行くところ……、風邪引いちまう。

気がつくくと、スニーカーをかたっぽ履いてないことに気がついた。

どうしても病院に戻る気にはなれない。

俺はもうかたっぽになっちゃってしまっただ靴を脱ぐと手に持って歩き出していた。

黒地に縞模様の靴下だけでの徒歩は足の裏が冷たかった。

靴下もだぼだぼ、脱げ落ちそう。

冷たいアスファルトと冷たい雨に心まで冷えてしまいそうだった。

生きている証が欲しかった。

四話『鯛焼きと小さな神様と俺』

重く落ちるような灰色の雲から雨粒が激しく振り落ちる。

水滴が絶え間なく石畳を打ち付け、階段から下へ流れ落ちていく。ピチャリ、ピチャリ、と水の流れを弾いて、少女の剥き出しになった小さな素足が段を上がっていく。

身体の芯まで染み透るような冷たい雨だった。

革ジャンを羽織った赤い髪の少女が境内に姿を現したとき、周囲に人の姿はほとんど見られず、煙るような視界にその目を細める。何度目かわからぬまぶたの水を払う。

その手も冷え切っていてすでに感覚はほとんどない。胸の奥でうだるような気配が逆に身体を浸食していくような感覚に手を胸に当てる。

肩先に容赦なく雨が当たって弾ける。

雨粒のラッシュは一滴一滴が重くて、その場で座り込みそうになる。

足元を大量の水が流れ落ちていくさまを荒い息を吐いて眺め、何とか力を振り絞って立ち上がっていた。

風邪を引いたかもしれない

海鳴神社の敷地内には玉砂利が敷き詰められ、少女は目的の場所であることを確認する。

渡り石を無視して、少女は真っ直ぐに本尊のある建物の方へ歩いていく。

足の裏に小さな石の感覚を踏みしめながら目的の乾いた場所に辿り着くと、本尊の屋根の下に入り、踏み込んだ先から石床に水滴が

落ちて、黒い染みの点が斑上に無数に広がっていく。

濡れた長い髪が額にぺたりと張り付いて、少女はそれを直すこともせず、白い息を吐きながら建物の乾いた場所に座り込んでいた。

もはや立つこともままならず、這うようにして本尊の扉を目指す。

本尊の扉の前で振り向き、周囲を確認するが誰もいないのを見たのみだった。

駄目元で扉に手をかけて、それを開いていた。

不思議なことにその瞬間だけ手の平に熱さを感じたような気がしたが、気に留める余裕はなく、そのまま建物の中に入り込んでいた。暗い部屋と固い床、それでも外気を遮断して雨音さえも遠ざかる。扉を閉め身体を引きずりながら、背を預けられる壁に身を横たえる。

床に水滴が流れるように少女のいる場所まで続いている。

疲労感と寒さによる体調の不良も放り出すように、ただ身体を抱きしめるように身を丸めて目を閉じていた。

すべてが億劫になっていた。

海鳴神社、この場所に間違いなかった。

バスを乗り継いで、山道を歩き、ようやくここに辿りついたものの、すでに気力は尽きかけていた。

幼い肉体にまだ慣れていないことも大きかったが、病院で精神的に追い詰められ、帰るべき場所も見失っていた。

今のアパートに帰ることはできない。

おそらく両親が来る可能性が高く、帰るといふ選択肢がなかったのである。

素足のアンバランスな格好の少女はバスの中で奇異の目で見られたものの、声をかけられるようなことはなかった。

今日が日曜日で助かったということもある。

平日であつたなら少し不味かつたかもしれない。

今の俺が警官に尋問されるのはすごく不味いからだ。

何よりも身元を詮索されるようなことがあると困ったことになる。

今の俺の身元を保証してくれるものは存在しない。

何よりも戸籍というものが適用されないのだ。

むしろそれらの存在は、今の俺にとっては大きな障害として目の前にあつた。

この世に存在しないはずの存在になっているのだ。

寒い。

息を吐きながら手足も温まらず、床に投げ出した身体は冷える一方で、肺炎になってしまふかもしれないと危惧するが、すでもう嫌な兆候が身体を浸食していた。

今できることは何も無い。

何かをする気力すら無い。

できるのは目を閉じてしまふことだけだった。

「神様……、いるのかよ？ いたら、出て来てくれ……」

何とか言葉を吐き出すが、雨音がその声を洗い流していく。

思考すら放棄して襲つてきた眠気にすべてを任せていた。

未明

ピチャリ、ピチャリ、ピチャリ。

境内に溜まった水、そこに大きな波紋が走ってぶくぶくと水が泡だつて水が溢れ出た。

この奇妙な現象を目撃したものはいない。

大きな見えぬ足跡が水を弾いた。

ピチャンっ、とまた足跡が少し前方にできて、見えぬ何者かが神社の本尊に向かって歩いていく。

その体に当たる寸前に水は弾かれて、地面に零れ落ちた。

何者であろうか？

雨の中でそれを知覚する者はなく、周囲の景色に溶け込んでいたから、見る者がいれば本尊の扉が勝手に開き、勝手に閉まったように見えたことだろう。

冷たい風が吹き込んだが少女は目を覚まさない。

グロウ、と息を吐き出したそれは建物の中に足を踏み出す。

水が伝う床の上にピチャピチャ音を立てて新たな水溜りができていた。

じっとそれは少女を眺めているようだったが、水に触れていない部分が乾いたように広がってその部分が露出して現れた。

魚の鱗のような表皮に魚のよう顔をした半裸の男がそこに立っていた。

ぎよろり、と目を動かして手を伸ばすと、少女を濡らしていた水気がすべて消えていた。

屈みこんで、片手に持っていた包みを少女の前に置くと、すでに乾いた少女の赤い髪を慈しむように撫でていた。

それも一瞬のことで、彼はすぐ立ち上がると背を向けて、扉の向こう側に消えた。

カシヤン、コロソ、という鈴音を少女は聞いたような気がして目を覚ます。

あれ……？

体の違和感に疑問を感じて、床に張り付いた頬を引き剥がす。服が乾いていた。

手足は凍るほど冷たかったが、上着や髪、下着に至るまで水気なく完全に乾いているのだ。

乾くほど寝ていたはずもなく、革ジャンのポケットの中の時計を取り出して確認する。

時刻はここに到着して一時間ほどが過ぎているだけだった。

逆に目の前の床から扉に向かってできた水溜りは大きく広がっていて、バケツの水を何杯もぶちまけたような有様になっていた。

奇妙なことはもう一つ。

目の前に置かれた和紙を手にとると、それは柔らかく暖かかった。閉じた包みを解くと、出てきたのは二匹の鯛焼きだった。

おかしらが跳ねた特徴的な形で、割ってみると腹いっぱい餡子が見えて湯気を立てていた。

これはいったい誰が置いたもので、どうして置かれたものかさっぱりわからないまま途方に暮れるが、腹がグーっと鳴っていた。

腹減ったなあ……、と鯛焼きを眺めて、何が何だかわからないがそれを一口齧っていた。

毒が入っている可能性はなくてもないが、ほんわりとした生地とまだ熱い餡子が口の中で咀嚼されて口の中に唾が溢れてくると、もう耐え切れなくなって鯛焼きに齧り付いていた。

昼食と言えばパンと牛乳だけだったから、胃に鯛焼きを入れてホツとしていた。

いったい誰が置いたのか、不法侵入をした少女にする処置ではない。

見つければ間違いなく保護されて警察行きだろう。

だが手の中の鯛焼きは放っておけば冷たくなってしまふ。

背に腹も変えられず、もう一個の鯛焼きも今度はゆっくりとかみ締めて胃袋に収めていた。

すっかり落ち着くが寒さが和らいだわけでもない。

かじかむ手をこすりながら、水溜りを避け、本尊の扉を少し開けて外を覗いた。

するとしばらくして、数十秒なのか一分くらいだったか、変化は奇妙な感覚と共に起こった。

まず、丸い何かが雨煙るの向こう側から歩いてくるのが見えたのだ。

ひよっこりひよこひよここと、傘代わりに大きな葉を頭上に担いでいて、何体かがまとまっていた。

それは丸かった。

他に表現のしようがねえくらい丸い生き物だった。

ようやくはつきり視認できる距離まで近よると、賽銭箱の前で葉っぱを振って水気を払った。

そして本尊の短い階段に飛び乗っていた。

俺の目の前に手のひらサイズの卵みたいなのが、そいつは神主とかが着るような服をまとった生き物だったがそれがいた。

何だこいつ？

多分、ジト目にもなつてたかもしれないが、なんとなくいいかわからない俺は呆然とそれを眺めていた。

イメージ的にお米粒が擬人化されたような、生物とは呼び難い「何か」であつた。

そこには五体の手足が生えたふつくらしたお米粒がいた……もはや形容しがたいのでお米粒でいいだろう。

アニメーションにするなら実にシンプルなデザインであると言える存在だつた。

それらははつきりと俺を見上げていた。

背中に冷や汗に似たものが落ちたような気がした。

「あいやこれは、もしや神様ではございませぬか？」

「何処の神様であらせられるや、お客人が神様とは恐悦至極でござる」

「しゃ、喋つた？」

「お初にお目にかかる。我等は海鳴の神様に仕える五米神。拙者は米ベイチー」

「我輩は米ベイジー」

「それがしは米ベイザン」

「麿は米ベイシー」

「わらわは米ベイユ」

「名前つきとか。ファンシーだな。お宅らも神様なの？」

「その通りにござる。憚りながらも神の列席に身を連ねておりますが、元は米の精でござつた」

「マロらにどうか神様のご尊名を訊かせてマロ」

前に進み出るお米粒。
やばい、笑えてしまう。

「天道司だよ」

「なんと神々しい立派なお名前か。さぞや名のある神様であろう」

ねーよ、神様なんてやったことなんてないし。

神様やらないか、とかは言われたけどな。

正直、名前を名乗られても区別がつかない。

要件を告げることにした。

「そ、そう……、ここの神様、海鳴様？ 呼んでくれるか」

「これは申し訳ない。主からお客人が来ることは知らされておりましたが、かくも美しき神格を持ったお方とは露知らず、我等、いささかはしゃぎすぎたようで」

「お主は話が長いのだ。神様であればご訪問の際には賽銭箱に飛び込んでいただければよいのあるよ」

「さ、賽銭箱つて……」

俺は近くにある朱塗りされた年代物の賽銭箱を見る。

どう見てもただの賽銭箱である。

「そこが入り口となっておりますー」

「マロらが手本を見せようぞ」

「おおそれがいい。ではそれがしが一番手でごぞる」

賽銭箱に飛び乗ったお米粒が気合を入れてか、着物の袖をまくると賽銭箱の中に飛び込んだ。

続いて、マロだかわらわと名乗ったお米粒も飛び込んで賽銭箱の中に消えた。

「ちよ……、サイズの俺は無理じゃ……」

「あいや、心配召されるな。神と呼ばれるほど靈格の高いお方なれば入り口は広き門となります。故にただの人では我等を見ることができませんが、天道司様ほどのお方であればお茶の子さいさい、すすつと神様のお社に辿り着きましょう」

「そ、そうなのか……」

「では我輩もお先にゴメンである！」

と、お米粒がまた一匹賽銭箱に飛び込んだ。
残った最後のお米粒が俺の肩に飛び乗った。

「不慣れでございましょうが、拙者が案内役を務めさせていただきました
す」

「はあ……」

俺は賽銭箱の真上の引き綱と鈴を見ていた。
やるしかないのか？

もはや非常識の世界だが、やらねば神様に会えないのだ。
そう思い込むようにした。

軽い現実逃避である。

「なんか呪文とかいるの？」

「いりませぬ。飛び込めばそこは我等の里、海鳴様のお社ですぞ」
「わかった……」

バカなこととして痛い思いをするかもしれないのだが、眼を瞑ったまま、賽銭箱に手をかけていた。

なるようになれ！

そして俺は跳び箱を飛ぶ要領で箱の上に飛んでいた。

次の瞬間、突き抜けるような感覚と共に、俺はお米粒と一緒に暖かな風が吹きすさぶベージュ色の世界の中に落ちていった。

五話 『幻想世界 IN 俺 神様の世界はスケールがでかった』

二章

「司様、司様！」

「……ん」

「司様、起きてくだされ」

暖かく柔らかいまどろみの中で、意識を現実に引き戻す声が耳元で聞こえて俺は目を覚ました。

ぼんやりとしながら眠気に任せ、また寝入ってしまいそうになりそうだった。

そこは緩やかな傾斜のある草っ原だった。

俺は仰向けになってそこに寝転がっていた。

蝶が鼻先で舞い、俺は下生えの草の緑の匂いをかぐ。

目の前の胸元はお米粒、もといお米の神様がいた。

確か米一とかいう名前だったっけ、とうろ覚えながらその名前を思い出していた。

他のお米粒達の姿は見当たらない。

気持ちのよい風がさわさわ吹いて、草花を揺らす。

花の匂いだろうか？

それが鼻をくすぐって、こそばゆさにくすぐったく感じる。

ふわふわした気分になって思わずあくびを連発していた。

頭上を見上げると、黄色とピンク色の入り混じったような空は雲まで淡い色に染まっていた。

太陽は見えず、地平線の果てまでベージュが続いていた。

「……、どことだ……」

気だるげに体を起こすと、衣擦れの感覚が伝わってきて、その違和感に足元を見とスカートならぬ袴と言うのだろうか、それを履いていた。

何だこの服は？

腕を伸ばせば着物の布が揺れる。

確認のため立ち上がる。

赤い長袴に単の着物、その上に羽織るのは水干というやつだったか、とうろ覚えの知識でその服を眺める。

髪も乾いていて、乱れ髪ではなく、櫛を通したかのようにきれいに整えられ、白いリボンでゆったりと幅を持たせて結わえられていた。

目の前にいるお米粒も狩衣に服装を変えて烏帽子までかぶっている。

いきなり平安時代になったな！

時代劇でも滅多に見ない服装に俺は戸惑いを隠せない。

普通の和服さえ着たことがないのだ。

大学の資料室にある絵を見たことはあるが、着物の詳しい名称までは覚えていなかった。

「主様のところにご案内する前にお召し物を用意させていただきました
ました」

「あん？」

立烏帽子を差し出すお米粒。

まだ何となくぼうっとしたままの頭でそれを受け取り、ただ何となく長い帽子を眺めていた。

普通にかぶりやいいのか？

頭の上に長い帽子をかぶせて、慣れない手つきで紐を探る。

「ずれとりますぞ」

米一が飛び上がると帽子を蹴っ飛ばして、司の頭の上の帽子の位置を変える。

「サンキユ」

「どういたしまして」

丁寧に答える米一。

まったく神様らしくない姿だが、スタンダードな神様の姿というものをよく知らないのもそのことは言わないでおいた。

思い浮かんだのは何故か奈良の大仏で、あれって仏様で神様とは違うのかしらん？ とかどうでもいいことを考えていた。

女の子ならこういうときどういう反応を示すのだろうか？

かわいい？

わかんねえな。

かわいいかも知れないが、姿が女になったからといって男の感性までが急激に変わるわけではない。

多少は肉体に影響されるのかもしれないが、今のところ俺は俺でしかない。

ついてるはずのものがない、という事態だけがやたら深刻である。

「他のはどこ行ったんだ？」

お米粒の仲間がどこに行ったのか気になって訊いた。

「先にお社様のところへご報告に行っておりますぞ」

「お社様？」

「あそこに見えまするのがご本尊、お社様でございます」

米一が指差す先に透明な水をたたえた湖畔が見えて、赤い大きな鳥居が水面に突き出すようにそびえたつていた。

それも一つや二つではなく、湖畔の向こうに見える、水の上の建物まで続いていた。

赤い屋根の離宮、そう表現するのが相応しいだろうか、寝殿造りの建物が水面にその姿を映して二重に存在するかのようだった。

どこかの文化遺産みたいだな、と俺は感心してそれを眺めていた。ただし、その規模は実物よりかなりでかい。

建築様式的に平安時代の寝殿造りであることは理解できる。

それを湖畔の上に建てている、というのは現代人の俺からするとかなりぶっ飛んでいた。

水っ気で腐らねえのか？ とか、湿気やばくねえ？ とか、無粋な思考をしてしまう。

まるで幻想の世界の中に迷い込んだようだった。

「ここ……、本当に寶銭箱の中なのか？」

「左様にございます」

「海鳴の神様って何者だよ……」

司のその言葉に米一は胸を張ってにっこり笑う。

「我が主様はこの地の守り神でございます。古の時代より、拙者が生まれる前からこの地を治めております。海鳴で千年以上も神様をやっておられます」

「げ…、そうなのかいやべえな」

「何か？」

「何でもねえ……」

その神様にずいぶん無礼な口も訊いたし突っかかりたりしたんだが、やっちまったものはどうしようもない。

気にしない振り、でどうにかなるといいかなあ……、と現実逃避をしながらお社のある方角を眺めた。

「あ……」

声を上げたのは空の色を映した鏡のよう場水面から一斉に白い鳥の群れが飛び立ったからだ。

悠然と三角上に群れを成し、揃って羽ばたく様は遠目にも美しくった。

「行きましょう。船を待たせとりますからな」

「船？」

鳥達が飛び去った方角を眺めいたが、あの建物まで行くのか、と今更ながらに俺は気後れしていた。

なるようになるさ、と米一に向き直る。

「司様」

「おう……」

その声に促され、俺は足袋を履いた足でなれない服の袖を揺らしながら、湖畔の側の船着場で手を振る米一のところまで降りていく。着ているものがキレイなので、汚さないように歩くのが難しかった。

これってセットでいくらくらいの衣装なんだろう？

レンタルじゃないだろうなあ、と思考して、神様の世界でレンタル屋に通うシユールなお米粒を想像しておかしくなる。

「この者が船頭のミズハシでございます」

舟の上の船頭を米一が指差すと、背中を向けていたその男が横顔を向けて、こっちに向かつて頭を下げた。

着ている服は灰色がかった粗末な着物で、素足をさらし、胸元の濃い体毛をさらしていた。

どこか青みがかかった肌だが、よく見るとそれは鱗のようにも見えた。

異様に手足が長く、身長は軽く2メートルを超え、その背を異様に曲げてせむしであるかのようにだった。

頭髮は白く、頭の両側はそり上げていてモヒカンのようだが、それほど派手な色合いでもないせい、体格の割りに凶悪さは感じない。

大きな目は魚のような目でぎょろりとねめつけて、見つめられると背筋がぞくりとした。

咽喉元が動いて、グロロという音を発した。

奇異な外見の男だった。

人間、と言っているのかわからない風貌の男だった。

まるで妖怪だ、と俺はその男にそんな感想を抱いていた。

「ミズハシ、主様の大事なお客様だぞ。丁重にやってくれ」

米一にミズハシがゆっくり肯いて、もやい綱を外していく。

ギシリ。

おっかなびっくりで足袋を履いた足を促されるまま慣れぬ舟に乗り込むと揺れて、すぐにしゃがみ込んでしまった。

そのせいでまた揺れる。

わずかな揺れさえも今の自分には怖く感じていた。

内心冷や汗ものである。

天道司はこの程度で動揺する人間じゃなかったはずだ。

落ち着け、俺。

船上から見える水面は近くて、この舟で大丈夫なのかと余計に不安になってしまう。

その不安そうな赤髪の少女の横顔を水面が映しだして、揺れた小さな波紋がかき消した。

そのとき不意に視線を感じて振り向くと、ぎよろりとした目のミズハシと顔を合わせていた。

「ど、どうも……」

「……………」

俺が頭を下げると、ミズハシは応えずグロロと特有の唸り声を発し、櫂を水につけて漕ぎ出していた。

船着場から泳ぎだすように舟が離れて、揺れにドキドキしながら、風切る舟が受ける風を肌を感じていた。

揺れないように重心を舟の真ん中に置いて、バランスを取ろうとへりに両手を置く。

目指す建物はずいぶん先だが、視界を遮るものは何もなく、幾重にも連なる大きな鳥居だけが見えていた。

建物の向こうは空と同じ煙のような淡いベージュ色で、この湖の大きさを測ることはできなかった。

鳥居はでかい、という表現で済ますにはかなりの規模だった。

建物までの距離は目測で悠に2、3キロはあるだろうか、鳥居と鳥居の間の距離を測るが、およそ200メートル程度に一つずつ建っている。

高さも破格で、東京タワーほどではないが、それに匹敵する高さであると見て取れた。

こんな巨大なものを建てる技術って、神様の世界ってもしかしてすごい技術進んでるのか、とかそんな埒のないことを考える。

懐を探った米一が笛を取り出して、俺に向かって掲げて見せると、それを口に当てて吹き始めた。

音の調べが小さく、ゆっくりと流れ始め、湖にこだましていく。水上を舟が通り過ぎ、櫂を漕ぐ大男、笛を吹く小人、赤い髪の少女を乗せて、水面を揺らしながら流れていくようだった。

ミズハシは一言も言葉を発さずに、ただ船を漕ぐことに集中しているようだった。

揺れはほとんど感じられない。

うまいものだ。

俺もボートなら漕いだことがあるけれど、こんな風に漕ぐのは無理だな、と船頭の動きをじっと見入っていた。

いつだったか公園で彼女をボートに誘ったことがある。

結果は散々で、しばらくはボート漕ぎの練習をした。

あれから一度も彼女を誘うことはなかったのだが……

「もう到着しますぞ」

考え事をしていたせいか、笛の音がいつの間にか止んでいたことに気がつかなかった。

声をかけた米一に意識を引き戻され、いつの間にか目的地にかなり近くまで来ていたことに気がつく。

建物の荘厳さは遠くで見た姿と同じであったが、近くで見るとまったく違った。

まず円柱の太さは大人五人が腕を回したほど太く、顔が映るほど磨かれており、ミズゴケの浸食さえ許していなかった。

その支柱群の数は数百から千に至ると思われて、建物の底、天井まで一〇メートルはあるだろうか、円柱に反射した外光が内部まで差し込んで、水面に反射してきらきらと輝いていた。

舟は支柱群を通り抜けながら、奥へと向かっていく。やがて現れたのは開けた場所で、上方の建物へ続く階段と、段差になった踊り場、そこから船着場へ下りる階段があった。

その船着場に向けてゆつくりと舟が水をかき分けていく。ガコン、と音を立てて、減速した舟がぴつたりと船着場に舟を止めていた。

開けた場所に出て俺は目を細める。

まぶやしやかなほどの周囲の建物の威容に圧倒されていた。

まるで昔の貴族が皇族の住まいのようであった。

その水上の離宮は何もかもが現実のものとは思えなかった。

「ミズハシ、ご苦労。これが礼だ」

と、米一がどこからともなく和紙に包まれたものを差し出すと、ミズハシの大きな手がそれを受け取って懐に突っ込んだ。

それをどこかで見たような気がしたが、記憶は曖昧ですぐに消えてしまった、

無言で頭を下げ、ミズハシが船着場に舟を固定する。

俺は立ち上がるうとして、足が痺れていることに気がついた。

ミズハシが見ているのを意識して、何とか立ち上がるうとする。

あ、ヤバイびりびり来る、と足の痺れを感じながらゆつくりと立ち上がる。

「うわ、おっと」

無理をして立ち上がるが、途端に船が揺れて、バランスを崩していた。

落ちる！

そう思った瞬間、長い腕が伸びて、着物の腕を掴んで、次の瞬間

には俺は大きな腕に抱きかかえられていた。

高い、浮いたその感覚に体を硬くする。

すぐ下は透明で青い水面が見える。

硬直したまま抱きかかえられ、ミズハシは抱えた赤毛の客人を船着場に下ろしていた。

「ありがとう……」

礼の言葉を述べると、ミズハシは目をぎよるぎよる動かした。

意思表示なのだろうか？

そのミズハシの頭を米一が飛び蹴りしていた。

「バカモノ！ 司様にあまり長く触れるでない！ やんごとなき神の一柱であらせられるのだぞ」

「えっと、いや……」

俺はお米粒を掴んでいた。

恩人にそれはねえだろ？

「ミズハシ、ありがとうな」

改めて正面から告げると、頭を下げ、身を低くしてミズハシは舟の近くに控えて座った。

手の中でお米粒が暴れる。

「お放しくだされ」

「おいお米粒」

「はい？」

手のひらを開いて米一を睨む。

「水に落ちそうなのを助けてくれたんだ。それをあんたがどうこう言うなよ」

「いや、しかしですな……。水妖ごときが触れて……。むぎゅっ……」

「ごときってなんだよ？」

手に少し力を込めて、手の中のお米粒を圧迫する。

「へ、へるぷ〜」

米一が弱弱しく叫び、俺は力を緩める。

こいつらの世界のこととはわからねえが、何となく、ミスハシが蔑ろにされる存在であるというのには理解できた。

「これこれ、いじめるのはそれくらいにしておけ」

上の方から老人の声が響いて、俺は顔を向ける。

いつ姿を現したのかはわからないが、階段の上には供の異形の従者を従えた束帯姿の老人、海鳴の神が立っていた。

六話『ヴィータ 神様見習いはじめます!』

やたら幅の広い板張りの渡り廊下を歩く神様と俺。

一歩歩くたびにキュッキュッキュッキュ、と鳴るのはまるで鶯の廊下のようなが、廊下全体がそうなのはどうかと思う。

人が沢山いたらうるさくて適わないのではないだろうか、というどうでもいい感想を抱いていた。

「不機嫌じゃのう」

「別に……」

ぶつちやけ、凄すぎて何もいえないというのが本音で、トンでもない建築物だった。

眼下には湖が見えて、ベージュ色の霞がかった空の向こうに湖畔があり、点のように小さな船着場が見えた。

今いるのは高さにビル五階分上からの風景だった。

木造建築としては破格に高く、その上水上に立っているのだ。

地盤は平気か？ とか、そんなことさえ考えるのも無意味な気がして気が萎える。

比較するのもなんだが、高校の修学旅行で訪れた清水の舞台を思い起こさせた。

海鳴様。

神様はここには沢山いるみたいなので、特定して海鳴様と呼ぶことにする。

おっさんでもいいのだが、おっさんにも体面はあるだろうから、人前（神様達？）では海鳴様と呼ぶことにした。

その海鳴様が欄干の前に寄って立ち止まったので、俺もすぐ後ろで止まる。

「その格好、なかなか似合っておる。馬子にも衣装かのう」

ニヤニヤと笑って、水干姿の俺を眺めていた。

何となくその視線が気持ち悪い。

そういう趣味なのか？

キモイおっさんの視線をジト目で睨み返す。

「説明しろ」

「うん？」

「だからよお、今の俺は何なんだ……」

「いわば、その姿はお前さんの分身体よ」

「分身？ どういう意味だ」

まあ、座れ、と海鳴様が通路に座り込む。

格好からするとかなりフリーダムな行動である。

位が高い人の装束なだけだな、とどうでもいいことを考えていた。

「簡単に言つとだな、その肉体は神気でできた天道司の魂の拠り所である。現世に姿形を持ちえたのは神性の現れよ。通常ならばそこらを漂う靈魂の一つになるが、お前さんを喰らおうとする輩があまりにも多いのでな。お前さんの魂をお前さん自身の神気に閉じ込めて召喚したのよ」

神気？ 神性？ 両方とも馴染みがないせいかしっくり来ない。

「神気ってなんだ？」

「気とかわかるかの？」

「まあ、何となく……」

「万物にはすべからず神気が宿っておる。お前さんにもわしにも、普通の人間にもだ。根本的な生命の力だと思えばよい。病気や怪我をすれば神気も損なわれる。神気がすべて失われれば生命は死に至る。今のお前さんの肉体、天道司は神気をどンドン失っている状態よ」

「……放っておけば死ぬってことだな？」

「うむ、それをのう、お前さんの神気でその肉体、ヴィータを造り上げた」

「造ったって……。ヴィータ？ 名前があるのか？ 何で？」

自分の小さく華奢な手を見ながら問いかける。

造ったとか……。人造人間？

頭の中で研究室で怪しいマッドサイエンティストに改造される姿を想像する。

ヴィータって何だ、日本語なのか？

「わしの蓄積した数多の記録から、お前さんの魂と相性のいいものを選び出し、肉体の寄り代として再構築した姿がヴィータよ。元が神気、そこに型としてヴィータの原型を与え、魂の統一化をしたものが今の天道司を構築するものになっておる。造った、と言ってもわしは特に手を加えてはおらん。肉体を構成するものは元がお前さん自身の神気、ヴィータとの相性のよさはお前さん自身の魂が選り出したもの。体を動かすのに何の不都合もなかったであろう？」

「まあ……。そうだけだよ……。つまり、この体にはこの体の元のデータがあると」

元々誰かの肉体であったのか？

疑問が湧き出てくる。

説明されて何となくわかったが、それとは別に嫌な想像をしてしまっ

なかなか理解しがたい概念だった。

「ククク、気持ちはわからなくてもない。幼子の女兒の姿であるからう。お前さんはその肉体の持ち主がいるとか考えたかの？」

「ああ……」

「心配せんでも、お前さんの元にはなっついていても、憑依したとかではないことは先に説明したとおりよ。すべてお前さん自身で構成されたもの。その姿がお前さんの神としての本当の姿と言ってもよい。わしら神もそうして己の分身を持っているから、こちらでは常識だと思え」

「常識ねえ……」

まだ理解したわけじゃないが、納得したことにする。

俺自身がよくわからない。

それにこだわるよりもっと切実な問題があった。

「俺が元の体に戻るにはどうすればいい？」

「穢れを祓うことでそれをお前さんの力に変えることは言ったの？ それを成すことができるのは神性の高い魂を持ち、力を得たものだけにしかできぬ。いわば神の力の領域となる」

「俺に神様になれって言ったのは……」

「うむ、冗談ではなく本気。神の力を身につけてもらわねばならん」「どうすればいい？」

「ほう、やる気になっておるのう」

「当たり前だつて……」

「まずこれよ」

海鳴様が懐から白い手帳らしきものを取り出して見せた。

和紙製のようで、独特の質感の手帳だった。

分厚さは大学ノート一冊分ほどである。

「何だそれ？」

「かみさま手帳じゃ。「ここに神様としてのその神の記録が蓄積される仕組みとなっておる」

「はいいい？」

かみさま手帳？

蓄積、記録って、普通の手帳じゃねえのかよ、という突込みを抑える。

「噛み砕くとなセーブデータよ。ゲームにあるじゃろ、あれも思ってもらって構わん。この手帳は神様見習いから与えられる」

と言つて、海鳴様は手帳を開いてパタパタと扇代わりに扇いでいた。

「かみさま手帳、ねえ……」

じつとそれを見て、疑問の聲が籠った声を上げる。

それがいつたい何の役に立つのかわからない。

それよりゲームとか……、神様ってよくわからねえ。

「個人データの塊だから見せられん。と言つても本人にしか読めん」

「へえ……」

「お前さんの手帳はこれじゃ」

海鳴様が懐から取り出したのは、本人が持つものと同じものだった。

「って、もうあるし」

「手際がよいのよ。前々から申請出しておいたからの。お役所仕事

で頭の固いのがおつての。発行に一〇〇年もかかりよる。ちなみにあっちの時間での換算じゃ」

「一〇〇年てあんた……。ここって時間流れないんじゃない？」

「現世の時間概念くらい神ならば身につけておるわ。そんならーい間を持たせるのが連中の嫌がらせよ」

「そ。そうすか……」

「手帳発行は後継者育成の目的で発行されることが多いのよ。上はあまり神の交代を認めたららん。わしは海鳴の神じゃからのう……。簡単に辞めさせてもらえんのよ。そいつが貴重なものだど理解したか？」

しみじみと海鳴様は言うが特に同情の気持ちは起こらない。

「こなすげーとこ住んでて文句を言うな！」

少なくとも平民感覚な俺は起こりそうもない。

もう麻痺しそうなんだが。

「へえ……」

それをしげしげと見ていると、海鳴様がこつちに手帳を放り投げたので、慌てて手を伸ばしてキャッチしていた。

今貴重だつて言っただばかりじゃねえか、言ってることと行動が合っつてねえ。

さつそく手帳を開くと、最初の頁に神様名とあつて、黒筆でヴィータと記されていた。

「おっさん、何だよこれは……。名前欄がヴィータになつてるぞ……」

「今のお前さんの姿に合わせた名になつておるだけだ。今の肉体と魂は限りなく素体のヴィータのものと同調しておる。これほどのシンクロとは、わしも驚いておる。ベルカの血かのう……」

何か言ったようだが、手帳を確認してて訊いていなかった。さらにめくると、基本性能とある。

スペック表か……、取扱説明書かよ。しかしだな。

「えーと……。アイゼンなんとかとか、バリアジャケットってなんだ？ 明らかに日本語じゃねえ……」

英語とドイツ語と日本語と、じつにバリエーション豊かだ。

八百万いる神様の中には外来の神が沢山いたりするのだろうかと思像する。

日本人は昔からどんな神様も受け入れるところがある。

クリスマスを宗教行事でもないのに派手に祝うくらいで、その後すぐに神前の神社に初詣をするのだから、日本人は世界一宗教に寛容な国であるといってもいい。

誕生日を祝うのはキリスト教を持ち込んだ外国の習慣だし、結婚式は神前で、人が死ねば葬式は仏教のお坊さんが、とカオス極まりなく、他所の国の宗教者からすればすべてが冒涇の限りではないのだろうか？

江戸時代以前の仏教とキリスト教の手痛い争いは両者が宗教だけではなく、武力を持ち、外国侵略を含むものだったから大きな軋轢が起こった。

宗教の戦いの歴史は弥生時代にはすでにあっただし、今では日本人の生活に馴染んだ神道と仏教も争った時代があった。

いまはそんなこともなく、キリスト教だけではない宗教が日本に流れ込んでいた。

世界一まれな何でも受け入れてしまう国、それが日本である。

まあ他所の神様も便乗して日本にいてもおかしくはない。

「その説明書はちゃんと読んでおけ。ヴィータの基本性能はそこに書いてある通りよ」

「かみさまポイントって何だよ？」

最初の頁の下にそう書かれた項目があったので訊いてみる。

○の隣に(壱)と書いてある。

「神として活動すると自然に加算されていく仕組みになっておる。今は○ポイントかの？」

「ああ」

「いわば経験値よ。ある一定溜まればレベルアップする」

「おいしい？ 神様ってレベル制度なのかよ！」

どこの誰だよ、こんなの作ったのは？

ゲーム風味の神様の世界とか、常識的にありえないんだが？

「まあおう。今のお前さん、ヴィータと固定するぞ。ヴィータのレベルは1じあの」

「レベル1とか……。ゲームやりすぎじゃね？」

つまり(壱)がレベルか。

まるでRPGじゃねえか。

「制度を作ったのはわしじゃないから文句言われても困る」
「ハハ……」

乾いた笑いが漏れる。

「で？ レベルが上がるとどうなる？ 強くなって見習いじゃなくなるのか」

「おおむねその通り。見習いから三級神、二級神、一級神となつておる。力の制限もあつての、限定、非限定、一種、二種と細分化もされておる」

「免許みてえだな……」

「うむ、級に関係なく力を制限される決まりでな。本当に力を持つ神様というのはこれらの制限からは解放されているのよ。ちなみに見習いは5までな」

海鳴様が指を五本広げて見せる。

「おっさ……、海鳴様はどうなのよ？」

「わしか？ わしは一級神、限定一種。ちなみにレベルは533じゃ」

自慢げにひげをしごいた海鳴様の顔が十倍くらいに膨らんでドアップになる。

「……そ、そう。ドヤ顔すんな」

引くわー。

「ふはは、何すぐ追いつく。それと、溜まったポイントは特殊技能の獲得にも役立つでな」

「技能ときたか、どういうこと？」

「例えば、こうじゃ」

神様が宙に手を掲げると、その手に盆が現れて、小皿に菓子類が載せられていた。

「丁寧に急須に湯飲みまでついている。

おいしい？ どこから出した？」

「な……」

種も仕掛けもなく取り出したそれは本物だった。
急須からわずかに湯気が立ち上る。

「取り寄せ、の力じゃよ。こういった特殊技能をポイントを貯めることで獲得することができる。経験値と引き換えだから、技能ばかり取るといつまでも成長できんがな」

「すげえ……」

マジすげいです。

魔法ってレベルじゃないか？

「取り寄せは結構簡単な能力よ。お前さんもすぐ覚えられるわ。これぐらいの特典がないと神様などやっておれんよ」

海鳴様はずーっと湯飲みに注いだ茶を啜ってみせる。

何だかよくわからねえが、俺もこれができるようになるってか？

「やる気が出てきたかのう？」

好々爺と笑うおっさん、手口がなんかいやらしい。

何を企んでいるのやらわからないが、こつちだって死にたくねえ。
神の力でも何でも使って自分の身は自分で守るしかねえ。

「やってやるよ神様見習い」

お茶をがぶりと飲んで俺は不敵に笑って見せた。

こうして俺は神様見習いになることになったのだ。

七話 『帰れない家 ヴィータ 雨に沈んで』

海鳴様についていくと、お社の奥に続く、通路の幅が悠に二〇メートルはある長い廊下を抜けて巨大な扉の前に立っていた。

先程までいた回廊よりさらにでかくヴィータは圧倒されていた。

これほどの広大な空間を何に使うのか、その意図がよくわからなかったからである。

扉に海鳴様が手をかざすと、扉に埋め込まれた石がぼつと赤い光を帯びて、わずか人が通れる分だけ開いた。

足を踏み込むと暗くやたら開けた部屋に出た。

全体的に静けさと言いやつのない清廉な空気は地下にあるこの空間に神秘性を持たせていた。

前方がぼつと光っていて、段になったその上は祭壇のように見えて、むき出しの岩場になっていた。

青白く光る石が均等に置かれていて円形を形作っていた。

明らかに今までとは雰囲気異なる空間だった。

お社様という単語を今更ながらに思い出す。

まさにお社様という言葉がこの場にはしっくりくるものだった。

「何だこれ？」

「これは転送装置よ」

「てんそーそうちー？」

俺は首を傾げる。

SF、いやファンタジーくさい言葉の響きだ。

もう何が出てきても驚かない自信があった。

そうして常識とは常に塗り替えられていくのだ。

「現世に通じておる。海鳴に縁のある社がある場所ならば通行証が

あれば飛べるようになっておる」

「それって、そんなのがあんなら最初からくれよ。ここまで来るの結構大変だったんだぜ」

バスを乗り継いだり、ここに来るまでに受けた視姦的なものとかどうしてくれるのだろうか？

恥ずかしかつたんだがぁ。

「ここに来ねば渡せぬじゃろうが。それに神しか通れぬようになっておる」

胡散臭いが神様のいうとおり、というやつだろうか？

「ふうん。寶銭箱と同じ？ 入り口も？」

「うむ、人は通れぬのは一緒だが」

「へいへい」

「司様！ これをお持ちください」

その声が響き渡り、お米粒達と共に白い猫が現れ、その白猫の背中に乗ったお米粒三人が五角形の木印を掲げて部屋に入ってくるのが見えた。

猫？

俺はその白い猫を見る。

真っ白い猫でしなやかなバネのある肉体の動きを見せる猫だった。無駄なところがまったくなく、その白い毛並みは美しく、思わず触ってみたくなるほどだ。

しないけど。

トタトタと白猫が俺達の前までやってくると立ち止まり、姿勢を正すとお米粒が振るい落とされ、白い猫は気にも留めずに毛繕いを

始めていた。

「えっと、お米粒……。何してんの？」

白猫は置いていて、俺は目の前で重なるお米粒に声をかける。

当然ながら名前はまだ覚えてない。

だってこいつらおんなじ格好だし丸いし、とどこかの商標キャラクターのデザインなのである。

つけるならお米ブラザー、とか今一なセンスの名前を思い浮かべていた。

「それがし米三、でござる」

「我輩は米二、である」

転がったままお米粒二人が答える。

神社であった連中と同じなのは間違いなさそうだ。

口調だけは特徴的だった。

「……やっぱ、どう見ても同じ顔だわ」

「我等は元々同じ存在。拙者達に名前をつけてくださったのが主様でございます」

最初に立ち上がったお米粒……。

米一？ が木印を掲げて、それを俺に差し出すので、それを手に取っていた。

木の質感と厚ぼったい幅のある五角形。

絵馬だな、うん、どう見てもそんな感じ、というかそのものよ
うな気がする。

「おめーは米一か？」

「正解じゃ」

そう答える神様。

訊いてないけどな。

「あと二人いたよな？」

「米四と米五は別の仕事じゃ。後でお前さんのところにやるわ。通行証の使い方はこやつ等に訊け」

「はい？」

お米粒を見やる。

改めて見るとちっこく、本当に手の平サイズである。

あれだあれ、コロボツクルみたいな感じだな。

あれも神様なのかねえ？

「司様、いえヴィータ様。どうか拙者達もお連れいただきたく」

お米粒三人が目の前に並んで座った。

それを当惑気味に迎えていた。

「いただくって、なあ……」

「何、こやつ等はこう見えても役に立つぞ。連れて行け」

海鳴様がひげを引っ張りニョローンと伸びたひげが元の位置に戻る。

どついうひげなのそれ？

「まあ、いいけどな」

「ありがとうございます」「……」「……」「……」である

「よく聞くと微妙に口調が違うのな」

「昔はみんな同じだったからの、区別するために変えさせた。今でもときおり変だがな」

「あつそ……」

「ああ、そうそう、向こうとこっちでは時間の流れが違うのだが、というより、こっちでは時間という概念が存在せんのだよ。いわば向こうからすると止まった世界、普遍に存在する世界となっておる」
「どういうことよ？」

「今のお前さんがこっちでどれだけ過ごそうと、ここでは時間は停止しておる。現世からすると時間の狭間にあると言っている。そこに紛れ込んだものは例外なく現世の時間から切り離される。神の世界は人間世界とは異なる理で動いておる。百年前も後も我等にとつては同一のものとなるのだよ。まだお前さんには早い話だな。お前さんはまだ向こうの理に生きておる。難しく考える必要はない」

「まったくわかんねえ……」

「通行証には記録帳があつてな。一度潜った門はそこに記録されるようになっている。今はここと一つ設定してあるだけよ。これがあればほぼ移動時間はゼロになる」

「すっげー便利だな、おい」

「すごいじゃろ？」

「あんたじゃなくて、これがな」

「ハハハっ」

乾いた笑いの海鳴様。

「これって海鳴神社に出るのか？」

「お前さんの家の近くに門を作っておいた。そこに飛ぶようにしてある。お前さんの向こうでの肉体はの、本当はこの外の神社に置きっぱなしよ。ここにいるお前さんはいわば魂のみと理解するがい

い

えーと、幽体離脱してこっちに来てるってわけか？
魂と幽霊の違いって何だろうか。

よくわかんねえ。

ピンチでこっち逃げてても意味がないわけか？

体の残してあるって、どういうこった。

俺の考えどこか違うのか？

「おかしくね？ 魂しか飛ばないわけじゃない？ 肉体も飛ぶの？」

「いいか、この通行証を使った移動では基点を結んだ地同士の賽銭箱に肉体は一瞬で移動する。その際、お前さんの魂はこちらの世界に飛ばされる、それをタイムラグと思え。今のお前さんのいる時間がそのラグタイムだ。実際の現実世界での時間経過はゼロだがな。

ここに在る限り時間は過ぎぬが、お前さん自身は現実時間の現世には影響を及ぼせぬ。そうするには現世の肉体に戻らねばならん」

「んつと……。俺がこっちに来て、肉体は海鳴の神社にあって、この通行証を使うと、うちの近くの神社に出るってことか？ ここに入った時間と同じ時間に転送されるつと……。今の俺は賽銭箱に飛び込んだラグタイムの中に在るってことか。肉体に戻って転送が終了れば時が動き出す」

「理解できたか？」

「何となく……」

「そういうことじゃ、問題なく飛ぶからさっさと行け。わしは忙しいのよ」

海鳴様は面倒そうに手を振ってみせる。

「時間過ぎないって言ったじゃねえの？」

「おうよ、それはお前さんにとっては大。人間世界で起こったこと

はリアルタイムで飛び込んでくる。時間に関係なく神に暇なしじゃ
「んじゃ行くぜ」
「お供いたしますぞ」

俺は転送装置の岩場の上に立つ。

お米粒達三人が俺の肩に飛び乗った。

絵馬の型が岩場に掘られていて、言われなくてもそれをはめれば
いいのだなと理解する。

どう見てもただの絵馬なんだけどなあ。

「通行証を使うと門は転送装置に直接繋がりまする」

「なるほど」

「手をそこにかざすでござる」

米三の言葉のままに通行証の上に手を置いた。

通行証に立体の絵が浮かび上がる。

二重に重なっていて、もう一度手をかざすとスライドして浮かび
上がった。

おいおい、神様の技術って日本の最先端超えてねえか？ と内心

一人突っ込んで、言葉でも突っ込んでいた。

「タッチパネルかよ！」

突っ込みながら、その絵がどこかで見たことがあると思ったら、
神社にある押し印だった。

神社巡りのスタンプラリーとか前に一度やったことがあるので覚
えていた。

海鳴市の各神社には神社が祭る象徴的な絵柄があつて、それをス
タンプにして押す置き場があるのだ。

浮かび上がった絵はその神名で押す絵柄のスタンプと寸分変わら

ず同じものだった。

スタンプラリーは観光客は勿論、学生から老人に至るまでやっているものだから、俺にも馴染み深いものになっていた。

「まさかあれが転送装置のキーだったのかよ……」

「選択式、である」

「各神社に印がありますゆえ、通行証に記録していくと飛べる範囲が増える仕組みですぞ」

「おっけおっけ」

タッチパネル？ を押すと、浮き出た絵が通行証に沈み込んで赤い光に包まれる。

光が全身を包んで、その光そのものに全身が溶け込んでいく。

現実

雨が降っていた。

手足は冷たく冷え切って、凍えるような寒さの中に身を沈めていた。

服は乾いているものの、体調不良は身体を重くし、強く咳き込んでいた。

転送装置を使い、姿を現したのは境内の一角、海が見晴らせる近所の神社だ。

あまり来るわけじゃないから馴染みじゃなかったが、よく知った風景だった。

転送装置で飛んできたのはアパートから歩いて二分の神社だった。神社の名前は覚えていない。

俺はひたすら重い肉体を賽銭箱の縁に手をかけて立ち上がった。

五角形の絵馬がカコンと音を立てて転がり落ちる。それを苦勞して拾い上げて、紐を手繰って首にかける。突然境内に現れた不審者を咎めるものはいない。

幸いなことに雨が降っているせい、人気は一切見られなかった。転送装置で飛ぶにしても、人が少ない時間を選んだりとか、気をつけないといけないことが多そうだった。

あまり知られてない神社を巡るか、と朦朧とする意識でそう考えていた。

石造りの階段を下り横道をそれて細い道を抜ける。

この辺は坂が多く、岩棚が積み重ねられた壁の水抜け穴から大量の水が落ちていた。

激しさを増した雨の中、俺はアパートの近くに立ち、自分の部屋を見上げていた。

明かりがついている。

誰がそこにいるのか見当はついていた。

帰れない

「ちよつと君」

声をかけられ振り向くと若いお姉さんが立っている。

手元には今まで差していただろう傘を携えていた。

水商売の女と一目でわかる。

このアパートの住民だった。

不審な少女をいぶかしくて声をかけたのだろうか？

手にはコンビニの袋を持っていたから、買い物帰りだったのだろうか。

アパートの入り口で部屋を見上げる少女の姿に目を留めて声をかけたのだらうと予測する。

「すいません」

そう声を発して背を向けて当てもなく歩き出す。

背中に視線を感じながら足早にアパートから立ち去っていた。

歩いていると開けた空き地が見えて、土木関係者の重機が雨に打たれていた。

こんもりと土の山が見え、その空き地から流れ出した泥に足を滑らせていた。

白い息を吐き出し、泥水の中に膝を突いてしまう。

そうしてしまうと立ち上がるのも困難で、フラフラする肉体を土塀に持たれかけていた。

空を見上げる。

どこまでも重く灰色だった。

雨が熱を体温を容赦なく奪っていく。

もう歩くことができそうにない。

打ち付ける雨の強さに、目を開けていることもできなくなって、俺は泥水の中に座り込んでいた。

あれ、おかしいな、動けよ、俺の体。

雨音が俺を打ちすべてを包み込んで、意識すら流されていく。

ヴィータ・フェードアウト

八話『ヴィータ 高町家で目覚めて』

シューシュー、と何かが噴出す音を聞いたような気がした。
覚醒する意識。

暖かい空気に包まれた室内にその蒸気が溶け込んでいくようだった。

目を覚ました俺の体は動かない、いや動けないと言うのが正しいだろうか。

ひたすら体は重く、指先一つさえ動かそうとすると、それは熱を帯びて痺れ、張って強張るような感覚に何度か指を握っては開くを繰り返す。

たぶん金縛りとかそういうのとは違う。

熱を帯びた額に上気した頬、気だるい身体。

おぼろげながら理解できるのは、寝ているのはおそらくベッドの上、柔らかい布団と毛布、シーツの感触とわずかに感じるお日様のおい。

頭の裏にはタオルで巻かれた氷枕、額には水で濡らした手絞りタオル。

それはすでに熱を吸って生暖かいものに変わっていた。

ふつつ、と熱い吐息を吐き出す。

部屋の暖かさより発熱する自分の身体が熱くて、できれば冷たい空気が欲しいと身体を横たえて、少し冷たい枕に頬と額を擦り付けていた。

俺の部屋ではない。

首を横に向けて見えるのは、整然と片づけられた室内で、おそらく女性の部屋であることが理解できた。

明かりは窓際のカーテンからこぼれる光だけだ。

だが部屋全体の雰囲気が出るせい、それほど暗いとは思わ
ない。

窓際のツタが這う緑のインテリアやテーブルの上の色とりどりの
小物のビンと陶磁器の人形が見えて、花の香りか何かだろうか、そ
んな匂いをあまり利かなくなった鼻でかいでいた。

部屋の隅にストーブがあつて、赤い火が軽く揺らめくを見てい
た。

その上にやかんが置いてあり、白い煙をゆらゆらと吐き出して
いる。

シュー、という音はそのやかんが立てた音だった。

乾いた冬の空気を蒸気が適度に湿り気を与えている。

ここはどこで誰の部屋なのだろうか？

疑問が沸きあがるが思考力の落ちた頭では理論的にものを考えら
れそうになかった。

だがこの匂いをどこかで知っているような気がした。

荒い息を吐き出して咳き込む。

咽喉に痰が溜まって枕元に置いてあつた洗面器に吐き出していた。

お米粒はどこだ？

視界の中で見える範囲内に珍妙で丸い、小さなお米の神様の姿は
ない。

どこにいるのだろうか、と考えるが、もやがかかったような頭で
は思考を続けられない。

不愉快な汗が額から流れ落ちる。

着せられているのは女物のパジャマのようだが、サイズ的にヴィ
ータの体に合っていた。

年頃の子どもがこの家にいるのだと推測させた。

トントン、と扉をノックする音がして、開く音を聴いたが、俺はもう目を開けているのも辛くて目を閉じていた。起きていることさえ苦痛だった。意識はあるものの、外界世界をほとんど知覚することができない。まるで夢遊しているかのような感覚に包まれていた。手足はまったく動かず、自分のものではないかのようなようだ。

開いた扉の向こうから、冷気が漂い、人の気配も同時に入ってきて、火照った頬を若干冷ましていた。

今度はその冷たさが頭痛となる。

不規則に荒い息を吐き出すと、額のタオルが取り除かれ、水を絞る音と氷が触れ合う音が響いた。

ささやきあう声が聞こえた。

一人ではない。

二人、いや三人か？

気配と声の質から三人とも女性のように思えた。

どこかで聞いたような気がするのはいのせいだろうか？

顔にタオルが押し当てられ、汗に濡れたこめかみや耳の裏を丁寧に拭かれ、毛布を剥がれパジャマを脱がせられていた。

共同で脱がせているせいか、あっさりとパジャマを脱がされてしまふ。

俺はまったく抵抗できないままされるがままに任せていた。背中を支える華奢な手がひやりと冷たく心地いい。

もう一人が手早く体を拭いていく。

そしてパジャマを新しく着せられていた。

汗をかいた体は拭かれ、清潔で乾いた布の質感に安堵する。寝かせられて毛布と布団をかけなおされていた。

誰、だろっ？

俺は朦朧としながら、何とか熱ほったい目を開いていた。

ベッドの近くに小さな女の子の頭が見えた。

ゆらりゆらりと結われた髪が揺れていた。

すぐ後ろで服を取り替えたと思わしき女性二人がいる気配がする。その少女はタオルを氷水につけて、ギューっと絞ったのを確認して、広げて丁寧に畳むと、俺の額にそれを乗せた。

目と目が合う。

小学生くらいの女の子だった。

頭の両端をリボンでもって結んでいる。

年頃は八、九才を思わせる少女で、目が合うと驚いた顔をして後ろの二人を見るが、すぐにこちらを見返していた。

「大丈夫だよ」

小さく囁くようにそう告げて、無理やり笑顔を作っているようだった。

それに答えようにも、声を出そうにもヒュウ、という言葉にもならない音が漏れて、俺は小さく咳き込んでいた。

わずかなそんな動作も容赦なく体力を奪っていく。

熱い目を開けると、泣きそうな顔をした女の子が心配そうに覗き込んでいた。

問題ない。

そんな言葉さえ伝えられない。

俺は微笑もうとして、感覚が麻痺した体ではどんな顔をしたのかはわからないが、安心させようと何とか表情らしきものを浮かべて見せた。

額が熱い、脳味噌まで茹っっているかのようだった。

再びもやがかかったようなヴェールに意識が飲み込まれて行く。

その最後の瞬間に少女に誰かが声をかける。

「風邪が移るといけないから、なのははもう出なさい」

「はあい……」

女の子の残念がるような声の響き。

なのは、それが名前だったのか、それを判断する気力もないまま俺は深い眠りに就いていた。

数日後

次に気がついたとき、部屋の空気はポカポカと、窓から差し込む光に包まれて、それだけでも暖かった。

ストーブは休眠したかのように火を落として部屋の隅に鎮座している。

静寂に包まれた室内、時刻は朝なのか昼なのかわからないが、閑静な住宅街のどこかであるような気はしていた。

身体は相変わらず言うことを聞かないが、腕だけは何とか動かせるようになっていた。

咽喉に溜まった痰を吐き出して、それを何とか処理するくらいはできるようになっていた。

この部屋の主が誰なのか、まだわからない。

あの少女がまた顔を現すのではないかと扉を眺めるが誰も来る気

配はない。

あれからどれだけの時間が過ぎたのか、俺の天道司の肉体はどうなったのか、もしかや死んでしまっているのではないかという焦燥感が身を包んでいた。

焦りとは別に、静かな空間の暖かな空気に意識は包まれて、また眠りに誘われる。

また目覚めて

ひたすらにお腹が空いていた。

お腹が空くということは体が快復に向かっているということだ。

バタバタ、と布団の上で、お米粒どもが相撲を取る音で目が覚めた。

最初に襲ってきたのは耐えようもない空腹感だった。

お前等食うか？

ジト目でそれを眺めていると、審判をしていた米一が振り返った。

「おお、ヴィータ殿！ 目覚めたようで何より。ほい、のこったのこった！」

「おい……」

すっかりしわがれた声で

自分でも声を出して驚いたが、声を出すのも一苦労だった。

ちょうど俺の胸の上で半裸になった白卵、ではない、ふんどし姿のお米粒二人が取っ組み合って、のこったのこった、と声を上げる審判に合わせて、左にフラフラ、右にフラフラしながらなかなか勝

負はつかない。

うぜえ……。

病人の前だというのにまったく自重しないお米粒ども。

ちよつと意地悪をしてやろうと俺は布団ごと寝返りを打ってみせる。

「あいや〜」

転がり落ちるお米粒達。

そのときちよつど部屋の扉が開いて、白い制服姿の少女が覗き込んでいた。

ぴよこんとツインテールに結った髪が特徴的な女の子だった。

確か、名前はなのは、といった。

「ひどいですじゃー」

布団の上に米一が飛び乗った瞬間、俺はお米粒を引っ掴んで、ベッド下のゴミ箱に放り込んだ。

見られたらどうするんだ。

米二と米三は自重してか姿は見えない。

そのまま隠れてるよ。

「あ……、起きてる？」

どう答えようか迷っていると、少女は鞆を床に置くとベッドの近くに寄って、小さな座布団の上に腰を下ろした。

くりくりとした大きな瞳が好奇心を込めて俺を見つめていた。

こんな小さな女の子に見つめられて少し恥ずかしかったが、今の

自分の姿形は目の前の少女と変わるものではない。

そんな気安さからだろうか、彼女は俺の額に手を伸ばして熱を測ると、今度は身を乗り出して額と額をくっつけていた。

少し恥ずかしい。

「まだ、ちょっと熱あるかな？　ずつつと寝てたんだよ。三日も寝てたんだから」

「三日……」

三本指を突き出す少女、俺はそれを復唱する。

そんなに長く寝ていたのか……。

両親はどうしただろうか？

それよりもここはどこで、彼女は何者なのか？

いや俺が何者なのか、それをこの家の人達にどう説明しなければならぬのか、それが気がかりだった。

馬鹿正直に話して信じられるようなお話ではないのだから。

そう考えていると、お腹が不意にグウッと音を立てていた。

「あ……」

「あは、お腹減ってるんだね。待ってて、何か持ってくるね。うちは喫茶店やってるの。ケーキ好き？」

くりくりとした瞳が俺を見つめている。

「えーと」

今なら何でもいいという気がした。

少女は気にする様子もなく言葉を続ける。

「ああ、そうだ。わたしは高町なのはだよ」

「ヴィータ……」

少女の名乗りヴィータの名前を告げる。

天道司、という名は今の俺の名前ではなかったからその名前を言うわけにはいかない。

「ここは、どこ？」

「海鳴市藤見の高町家でーす」

間延びしたなのはの声。

藤見……か、俺のアパートからはずいぶんと離れている。

何せ駅四つ分は離れてる距離だ。

どうしてそこに俺がいるのかまったくもって謎だった。

俺が黙ってしまうと、なのはは手を後ろで組んで言葉を搜したようだったが、にっこり微笑んで見せて、ごはん、ごはん、と繰り返して扉を開いて、扉の向こう側から顔だけ出して俺の方を見る。

「ちょっと待っててね。お店に行ってお母さんと、お姉ちゃんに、えっとヴィータちゃんが目が覚めたって教えてくるから」

お母さん、お姉ちゃん……。

その言葉に頷いてみせる。

いったいどういう経緯で俺がこの家にいるのか、それを訊けば、逆に俺が質問攻めにされる可能性が高い。

小学生くらいの少女の行き倒れなど、この日本で滅多にあるものではない。

身元は？ 両親は？ 住んでいるところは？ 学校は？ 他の身寄りは？

想定しうるそれらの質問に答えることは俺にはできない。
いつそのこと記憶喪失とか適当な嘘をつくか？
いや駄目だ。

そんなのは、世話をしてもらった人達についていい嘘ではない。
何よりそうでない俺自身が知っている。

嘘について、演技をしてまで人を騙すのは性分ではなかった。

だから俺は……。

まだふらつく体を引きずるように立ち上がらせて、俺は扉の向こう、階下に神経を集中させる。

人気は感じられない。

静かなものだった。

改めて部屋の中を見回した。

革ジャンはえもんかけにぶら下がっていて、それを羽織っていた。
もうすっかり乾いているようで、ポケットを探ると乾燥させて丁寧に紙袋に入れられた紙幣が見つかった。

身元を現すようなものは元から持っていなかった。

絵馬は小さなガラステーブルの上に乗っかっていてそれを手に取った。

「ヴィータ殿、どちらへ行かれる？」

俺の背後から声をかけた米一。

米一、米三と共に揃ってゴミ箱から顔を突き出している。

「二二二」

短くそう告げて、返事は待たずに俺は階段を降り始めた。

「待つてくだされえ」「でござるか?」「いくであるか」

お米粒達が慌てて追いかけてピョンと肩の上に飛び乗った
階段のすぐ下に玄関の採光窓が見えて、一歩ずつゆっくりと降り
ていく。

借りるだけだ、と自分に言い聞かせてサンダルを選んで履いた。
これなら今は冬だから困ることは一応ないだろうと判断する。
振り返り再度家の中を眺めてから、頭を下げて玄関の扉を開け放
つ。

お世話になりました。

この親切にも世話をしてくれた高町家の人達に黙っていなくなる
非礼を心の中で詫びながら、俺は玄関から石畳が続く入り口に向か
う。

結構広い家で、敷地にかなり余裕があった。

緑茂る向こうに棟続きに和風の建物が見えて、道場のようにも見
えた。

それなりに裕福な家に思えた。

アスファルトの道路に出ると、俺は当てもなく、空きつ腹を抱え
たまま路を歩き始めた。

高台から冷たい風がビュウツと吹いて背中が寒かった。

九話『ヴィータ さまよう 戦いのはじまり』

ベンチから見える公園の景色は殺風景な絵の中に灰色の絵の具を落として込んだようだった。

落ち葉と色褪せた木々、コンクリートの地面、白い遊び場。

日が翳り始め、先程まで柔らかかった空気は冷たい風に吹かれてどこかに行ってしまった。

温度差から白い息を吐き出して、ヴィータは革ジャンの襟を立ててベンチに深く座り込んでいた。

できるだけ体温を逃さないように、目を閉じて世界を自分から切り離す。

一、二、三……、と俺は頭の中で数字を数える。

目の前に丸い小石が転がって、小石をおはじきのようににはじいていていた。

「次はそれがし」

お米粒三人がおはじきをして遊んでいる。

石が飛んで、同時に別の石を飛ばした。

「二個でござる」

「おいしい、一個である……」

「ぐぎぎぎ、米三の勝ち……」

無邪気な連中だな……、と俺は暢気なお米粒どもを眺めながら、周囲を見回した。

公園には人影はほんの少しばかり。

砂場で遊んでいるのは子ども達、少し離れた場所に母親らしい数

人の主婦がベンチに座って話し込んでいる。

こんな天気でなければもっと人は多いのかもしれない。

お米粒に気がついたわけではないだろうが、ときおり、主婦等がこちらを見る視線には気がついていた。

目立つか……。

サイズの合わぬ革ジャンに、下に着ているのはパジャマ、そして裸足同然のサンダル姿の少女が目立たぬはずがない。

主婦等の視線を避けるために場所を変えようと立ち上がり、ベンチを降りてお米粒を回収すると、公園の入り口まで歩き出す。

堅い地面を踏みしめる。

素足よりみしたがサンダルも寒かった。

背中に向けられた視線を感じるが、振り払うようにそれを無視していた。

公園の入り口に町内の地図があったのでそれを見上げる。

公園、駅、神社。

それを眺めながら、目に付いた神社の位置を確認する。

海鳴神社……。

藤見台から駅、病院までの距離を考えれば意外なほどの近さだった。

神社に行くか？

行ってどうになるものでもないが、一夜の寝床くらいは確保できるかもしれない。

公園で今の時期を過ごすのは自殺行為に等しい。

曇り始めた空、冷たい風に身を震わせて、自然、足は神社に向かって歩き出していた。

数分後

赤毛の少女が去った公園に一人の青年と少女がたどり着いていた。聖祥小学校の白い制服姿のなのはと黒いスーツの若い青年だった。

「いないね、ヴィータちゃん……」

「なのはちゃん、君はいつたん家に帰るんだ」

「え、でも……」

「ヴィータちゃんだけ、彼女が戻っているかもしれないだろ？」

「うん……。戻ってるかな？」

首を少し傾げ、なのはが青年に問いかける。

「もし彼女が家に戻ってて誰もいなかったら寂しいだろ？」

「わかりました。わたし戻ります。仲井さん、後はお願ひします」

ぺこり、と頭を下げて、なのはは高町家のある方に向けて走り出していた。

それを見送った仲井と呼ばれた青年は踵を返して公園を見回す。

それほど大きくもない公園だった。

主婦と子ども達、そこに赤毛の女の子はいない。

どこに行ってしまったのだろうか。

彼は携帯を取り出してそれを眺めるがすぐに閉まった。

こんなものがなんの役に立つ？

彼女が携帯を持っていれば連絡のつけようもあるのに、と埒もないことを考える。

脳裏に赤毛の少女の顔が思い浮かぶ。

数日前の雨の日、仲井が雨に濡れ、泥水の中に倒れていた女の子を見つけたのは、後輩の天道司のアパートに彼の両親を送った帰りのことだった。

ともすれば視界がほとんどない土砂降りの中で、彼が少女を見つけることができたのは奇跡的だった。

その少女を見て驚いた。

病院にいた赤毛の少女だった。

何よりも捨て置けなかったのは、彼女が身に着けているものだった。

司の革ジャンに服、そして彼女が病院に残したスニーカーの片割れ。

無関係なはずがない。

冷たく濡れた少女を水の中から抱き起こして、車のシートが濡れるのも構わずに寝かせて車を走らせていた。

司、お前なにやってんだ。

何か厄介ごとにも巻き込まれたのか？

この女の子は誰だ？

家出少女でも拾ったのか？

バカヤロウ、何かあればすぐ相談しろって言っただろうが。

車を走らせながら、このまま自宅に連れ帰るのは問題があることに気がつき思案した。

少し考えてから、携帯を操作して、一番信頼が置ける取引先の一つである翠屋の高町士郎に電話をかけていた。

二つ返事で士郎は連れてきなさいと承諾し、仲井は少女を高町家

に預けたのだ。

高町家の人々に面倒を任せ、仲井は帰宅した。

それから数日、天道家の両親に不具合がないか、とか、仕事の卸先を周りながら忙殺されてなかなか見舞いに行く機会をもてなかったが、翠屋で回復に向かっているらしいと訊かされ、とりあえずは安堵していたのだ。

その矢先、彼女が突然いなくなった。

仲井がそれを訊いたのは、ちょうど翠屋に仕事で立ち寄ったときだった。

高町家の末っ子のなのはちゃんがヴィータちゃんがいなくなった、と母親の桃子さんに抱きついたので。

士郎さんや桃子さんは店から動けない。

だから、俺が探します、と引き受け、仕事を半ば放り出す形なのはちゃんと一緒に彼女を探しに出ていた。

くそ、司、あとで元取り戻すからな、目が覚めたら覚えておけ？

仲井は当てもなく走り出す。

まだ病み上がりで熱も下がっていないという。

こんな寒空に少女一人どこに行くというのだろう？

焦燥感が身を包む。

何の縁もないはずの女の子。

縁といえば司の服を身に着けていたことだけ。

仕事を放り出してまで一生懸命になる道理などない。

ないはずだが、と彼は自分のそんな性格に苦笑いしていた。

ヴィータ

「腹減った……」

ぐう……。

容赦なく鳴る腹の音について耐え切れなくなってヴィータは屈みこんでいた。

路の端の堀の川、流れ溜まりの淵に屈みこんで、水面に映る自分の顔を眺めていた。

背中まである長い赤髪に、日本人とは異なる造形の目鼻立ちは美少女といってもいいだろう。

後数年すればかなり目を引くことであろうが、まだ少女らしいあどけなさの方が強い。

どうにもなれない。

もしこのまま元の体に戻ることができなかつたら？

そんな考えに嫌な汗をかきながら眼を瞑る。

ひもじさに腹が鳴り、少しでも好意に甘えて食べ物を買っておくべきだったと後悔していた。

コンビニに入ろうにも、この格好で入るのは勇気があることだ。

それにこの近所にコンビニなど存在しなかった。

最後に食べたものと言えば、三日前の鯛焼きが最後である。

「お米粒……。食うか？」

「え！？」

「食つてござるか……」

「我輩、身がまいちであるがゆえ、米一のが食べがいがあるである」

「ヴィ、ヴィータ様。せ、拙者は不味いであります！」

と米一が叫んで、米二を後ろから押して差し出す米一。

その二人の肩を後ろからがっちり掴む米三。

三者三様三国志、誰が先に食べられるのか戦々恐々のありさまで

ある。

「裏切り者である！ お助け〜」

「食つか！ 食べがいねーし……。ふう」

額に手を当ててしゃがみこむ。

軽い眩暈に見舞われたのだ。

お米粒が心配そうに見上げていた。

「お体がすぐれんようですな……。神気を吸収できればよくなりま
すぞ」

「あん？」

「ヴィータ様のお体に流れる神気が不足しているのです」

「どういうこと？」

「現界すると、神気の補給が滞りますからな。現世に肉体を持つと
神気の補給は自動で行われなくなります。ゆえに神は穢れを祓うこ
とでそれを神気に変換して存在を保つのです」

「まじか、初耳だぜ……」

「あの家にいなければ危うい所でしたぞ。わずかですが神気が流れ
込んでおりましたからな」

「どういうことだ？」

俺は米一に説明を求めた。

直前に言ったことと矛盾するぞ。

「神は神気によって存在を保ち、神気満ち足りれば元気に、不足す
れば病気にもなります。ヴィータ様は現世に来てから神気を補給
しております。熱が出たのは神気の不足ゆえ」

「神気ってのはどうしたら補給できるんだ？ 祓うっての以外で」

いまいち被うという意味も理解できていない。

唯一、イメージできたのは神主さんが棒にひらひらの紙がついたのをプラプラ振ってるものだった。

あれもお被いって言わなかったっけ？

「清らかなる地や神に近い人の側にいると、神気をわずかずつです
が補給できます。あの家にて病気がよくなったのはミカミさまの
おかげ」

「ミカミさまーでござるよ」「ミカミさまのおかげである」

米一の後には米二人がミカミ様と繰り返して、祈りまで捧げている。

「ミカミさまってなんだよ……」

「ミカミさまはミカミさまです」

「わかんねーって……。あの家がミカミさまっての？」

俺の問いかけに三人とも首を振る。

よくわからねえが、あそこにはいた方がよかった、ということだろ
うか？

しかし戻ろうにも、空腹なせいで路をろくに覚えていなかった。

それに戻れない理由もある。

「まあ、手っ取り早いのがお被いで地を清めて神気を得ること。今
のグイータ様はあまり穢れの強くない地をお被いするのがよかろう
と」

「お被いって実際何するんだ？」

「いわば浄化の儀式ですな。大地のエネルギーを正常に戻す。地脈
に流れる気を竜脈と呼びましてな、竜脈には吹き溜まりが生じるも
ので、この海鳴の地は絶えずその吹き溜まりが生まれるのです」

「吹き溜まりには人の思いが作用するでござる」

「そこから悪い気を吸収して魔、穢れが生まれるのである。穢れを好むアヤカシが棲家にしてることもある」

「へえ……」

「これを」

米一が腕を振るうと、白い手帳が現れる。

「かみさま手帳！ お前が持ってたのか」

「お預かりしとりました。ただ使えるのはヴィータ様だけですからの。念じて「開け」とお伝えくだされ」

「ん？ 開け」

と俺は言われるがまま手帳にそう念じると、目の前に立体ホログラフになったコマンドが浮かび上がる。

ステータス、個人情報、兵装、能力、術式、スキル、ヘルプ、注意事項 e t c ……。

「おお……。立体映像？」

ステータス部分に触れると、【かみさまポイント：0 / レベル：

1】【生命力：158（158） / 神力：24（0）】 e t c ……。

あれゼロステータスがある。

「神力ゼロって書いてあるんだが……」

「数日前はマイナスに突入しとりました。マイナスが基本値よりマイナスになると肉体の維持ができなくなります」

「生命力つてのと違うのかよ？」

「生命力はゼロになっても死亡するわけではありませんな。一時的に現世での活動能力は失いますが、神力が尽きなければ再起できま

すぞ」

「重要なのは神気ってわけか……。それにしちゃ24が最大値って
少ないか？」

「ステータスはレベルが上がると上がっていきますからな。最大値
を上げれば神の格も上がり、ちょっとやさそつとでは病気になるてな
りませぬ」

「ようは俺は生まれたての神様ってわけか……」

「ですなあ、もっと強くなっただけか」

「緊急事態である！」

米二が突然叫んで、お米粒達の雰囲気が一瞬で変わる。

「吹き溜まりが近くに発生したである。エネルギー50…60…8
0…まだ上がるである」

「なんだ、どうなってんだ？」

「吹き溜まりが近くに出現したようござる。米二は穢れを感知す
る能力をもつでござる。奴の言う数値が100を越えると魔として
現界するでござる」

「方角西に740。エネルギー係数124、安定傾向である」

「グイータ様、兵装を選んでください。兵装」と念じて、選択し
た兵装の封印を解いてください」

「兵装……」

ホログラフが切り替わる。

俺の武器……。

浮かび上がるのはグラーファイゼン、槌矛、ハンマーの形状をし
た武器だった。

そしてバリアジャケット。

あらかじめ説明書を読んでいたから何となく使い方はわかってい

た。

「グラーフアイゼン！」

その名を叫ぶと、俺の目の前にそのハンマーが現れていた。

宙に浮かぶそれを掴むと、ずっしりと、しかし手によく馴染んだ重みが伝わってくる。

持って持って振ってみれば、それは質量感を伴いながらも体の一部のようにフィットしていた。

「ぐずぐずしておれませぬ」「急ぐでござる」「方角あっち、である……」

お米粒達が肩に飛び乗り、俺はお米粒が指し示す方角に向かって走り出す。

体が光に包まれ、着ていた服が溶けるように消えて、体はバリアジャケットに包まれていく。

体を縛る重力から解放されたような開放感、体が一気に軽くなる。

初めての实战。

胸は高鳴っていたが、だが不思議と怖くなかった。

踏み出した足元に力を込めると一気に空に飛び上がった。

一〇話『赤の十字路 ヴィータ はじめての戦い』

逢魔が時は移ろう影が存在する時間。

影は夕暮れの斜陽。

物影に、遊び去る子ども達の影にそれは潜む。

ゆえに人は気がつかない。

自らが影が支配する時間に迷い込んだことを

赤の十字路

ここはどこだ？

青年は何度目になるかわからない問いを自らに問いかけた。

いつの間にか迷い込んだ路地、歩いてても歩いても同じところをど
ういうわけか堂々巡りしていた。

ゴクリ、と唾を飲み込んでいた。

咽喉が異様に渴いている。

妙に暑苦しく感じて襟元のネクタイを緩めていた。

赤い郵便ポストのある十字路の怪、そしていなくなる人間、行方
不明者。

そんなわけがない、あれはただの都市伝説に過ぎない。
そう自分に言い聞かせて彼はその路地を曲がっていた。

この先を曲がれば

一歩踏み出して恐る恐る振り向けばそこには郵便ポストがあった。

「嘘だ」

愕然とする。

赤い胴体に刻まれた鎧の位置と傷まで把握しているよく知ったポストだった。

おかしい、そんなわけがない。

このポストはもう二度も目撃している。

こんなはずはない。

シャツは汗でぐっしより濡れて、その不快感を誤魔化すように青年はまた歩き出し、また同じ場所に出ていた。

見慣れた十字路、背後には郵便ポスト。

まるで世界が閉じてしまったかのような感覚。

それはよくある都市伝説だ。

夕方の路地と郵便ポスト。

堂々巡りの十字迷路、そこに立ち入って帰った者はいない。

そんな地方の町の怪談話。

帰った者はいないのに、何故そんな話が広がったのか？

彼は誰かが勝手に広めた根も葉もない怪談話だと決め付けていた。

妖怪とかそんな類のものがいるわけがない。

非現実な怪奇現象など、噂にはよく聞いてもこの歳になるまで体験したこともなかった。

この辺はよく知っているはずで、この先の道は途切れ、途中から山道になっていくことを知っていた。

あるのは古ぼけた、人の住んでいない洋館である。

なに出るのは同じ十字路と赤いポストである。

植え込まれた常識、当たり前前の日常、簡単に崩れ去る世界。

夕刻の十字路ポストにいと神隠しに遭う　そんな噂話程度の

話のはずだった。

人を探していたはずが、迷うはずのない場所で迷い、遭難しているなど常識外れもいいところだ。

携帯 取り出した携帯の受信アンテナはどれも立っていない。

圏外……。

空を見上げ、あることに青年は気がつき愕然とする。

空が晴れているはずがないのだ。

今日はさっきまで曇り空で空一面が灰色に包まれていたからだ。

その空が赤く夕暮れの日差しを見せている。

路面に影が伸び、のっぴになつた自らの影を見つめる。

「嘘だろ」

吐き出した言葉は認めたくない事実を認める形となつて青年の心を打ち砕いていた。

青年は知らない。

彼が迷い込んだのは空間のポケット、一つの結界だった。

世界が作り出した空間の歪み。

何が原因でそれが生み出されたのか、その謎を人間が解き明かすことは不可能。

何故ならば、それは

ゆらり揺らめき揺らめいて、夕日に翳つたそれは青年の足元から離れて、まるで意志があるかのように蠢いていた。

影が意志を持ち形を変えていく。

青年が振り向いて、信じられないものを目にしていた。

叫び声はその闇が包み込んで、黒い糸が大量に吐き出されて青年のすべての動きを封じる。

黒い繭に包まれたそれが、影の中に沈みこむように地面の中に飲

み込まれていく。

同時にその影の魔物も溶け込むように消えていく。

十字路に圏外のマークを点滅させた携帯だけが残った。

紅の弾丸の如く緋色の残像を残して、ヴィータは宙を駆け抜ける。踏み抜いた足場は圧縮された空気だ。

跳ぶように空を蹴ってぐんぐん通り過ぎる景色を後に気脈の吹き溜まりを視界に収めて、その手前の路地に降り立った。

時間にしてほんの一〇数秒程度とあっという間の飛行時間だった。

バリアジャケットの裾、軽い衣擦れの音を立てる緋袴、白と赤のコンストラスト。

肩先を露にし、二の腕を止めた細帯は赤く、そこからゆったりとした振袖が広がって艶やかに揺れていた。

背中に流した長い髪を留めるのは赤いリボンで、余裕を持たせて蝶結びにされている。

巫女服を思わせるデザインのバリアジャケットだった。

上を見上げると薄い透明な膜に包まれた、ドーム上の何かが街中の一部を覆っていた。

これは…何だ？

俺はグラーファイゼンを握り締める。

唯一の相棒。

己の武器だ。

これで何ができるのか、戦う以外の方法など思い浮かばない。

「あれは結界ですじゃ。吹き溜まりに重なるとはもう。いや、吹き溜まりのできやすい地に結界を作ったのか……。中に入るのは容易

いが、出ることは許さぬタイプの結界かと思われる」「
「思われるって…どうすればいい?」

俺は米一に訊き返す。

結界とか吹き溜まりとか専門用語を並べられてもいまいちわからねえ。

「構わず中に入るのがよろしかろう。結界を解いている暇はない」「
「ささつと参るでござる」

「ここつて迷いの十字路じゃねえか?」

「ヴィータ殿、ご存知であるか?」

「まあな……」

入れば決して出れぬ迷いの十字路。

郵便ポストは地獄の入り口、か……。

「出られなくなったらどうすんだ?」

「叩き潰すのみですな。ヴィータ様なら可能かと思われませんが?」

「他人任せかよ……」

「他力本願神頼み。最近はそんな輩が増えましたなあ」

「その言葉、そのままおめーにブーメランなんですけどお」

「はて?」

目をぱちくりさせるお米粒、まんまるお目目が俺を見上げている。
こいつは本当に神様なんだろうか?

それを言うなら俺も神様見習い、俺の方が格下なんだよな。

それなのに様付けで呼ぶのだから神様の世界はよくわからない。

「行くぜ」

そう言いながら俺は結界の中に足を踏み入れていた。
世界が断絶される感覚は神にしか感じ取れないものだった。
結界が見えるのもそうだ。

この身体になってから、どういうわけか現実の空間にある、そう
いったものの境界や存在を感じ取れるようになっていた。
今はごっちゃだが、その内区別がつくようになるかもしれない。

「郵便ポスト……」

あつた、噂どおりの赤いポスト。

夕暮れの日差しを受けて、より真っ赤に染まっている。
視界が黒いもので煙る。

それは次第に気配を強くして、足元に立ち込めていく。
不愉快な浸食されるかのような感覚に眉をしかめる。

触れた足先が黒く染まって、足袋がブスブスと音を立てていた。

何だこれは？

「穢れ、ですじゃ。我等にとってはこれ以上の毒はないですじゃ。
アイゼンを振るってみてください」

お米粒達は鼻先に手を当てて眼も瞑っている。

なるほどきつそうだ。

気持ち悪いなんてもんじゃない。

存在そのものを浸食され、食い尽くされるような恐怖感、神にと
つての天敵に違いない。

薄くてそれは弱いが、濃く濃度を増せば嫌悪感をもっと強くなる
のが理解できた。

「ごうか？」

片手のグラーファイゼンを両手に持ち直し、足元に立ち込めた黒煙に向けて振り払う。

すると黒煙はハンマーの先端に吸い寄せられてたちまちの内に消えていた。

そして先端に微量の光が散った。

神気への還元が行われたのだ。

ハンマーを振るった周囲は清浄な空気に変わるが、次から次へと黒煙は生み出されて、まるで生きているかのようにヴィータにまわりつこうと蠢いている。

それをまた振り払い光に換えていく。

こいつらにはまるで意志があるかのようだ。

「きりがねえ」

「ここに潜んで獲物を待ち構えているのである。あの建物から邪な気配を強く感じるである」

米二が指差したのは洋館だった。

今では誰も住んでないことを思わせる家であるが、造りがしつかりしている分、一見すると廃墟に見えなかったが、よく見れば古臭く蔦も這っている。

「隠れるなんて知恵があるのか？」

「魔物は人の意思より生まれます。執着の強い意思であればあるほど、それを撒き散らした人間に近い知恵を得ます。魔物によっては人の形を取るものもいる」

「人間の敵は結局は人間ってわけか。こいつらが人間を襲うとどうなる？」

「取り込んで餌にするか 魔物次第でござる」

「そうそう、彼奴等に人間の慈悲などないである。殺すか喰うか、

弄って餌にするか。人間の生命エネルギーが糧であるよ」

「ぐずぐずしてらんねえってことか」

「左様。気配が強くなってきた。もしや人間でも取り込んだのかも
しれませんぞ」

「エネルギー係数221突破である。完全物質化してあの屋敷も喰
らいそうである」

「行くぜ」

そのとき視界に光るものを見つけてそれを拾い上げる。

携帯？

その形はどこかで見たことがあって脳裏を不安が掠める。

これは…！？

まさか、何で、何でここにこれがある？

携帯のデザインと待ち受け画面はよく知ったものだった。

携帯に疎い先輩が俺に設定を押し付けて、操作してそれを設定し
たのだから間違いなく、履歴を辿れば疑念は確信に変わった。

「どうしたでござる、ヴィータ殿」

「何でも…ねえ」

唇を強く噛んだ。

俺はアイゼンを強く握りなおし、高い塀を軽々と飛び越えて敷地
に侵入する。

窓ガラスはとつくに割れていて、どこからでも入ることができる。
建物の室内の向こうの闇が侵入者を飲み込もうと黒煙を吐き出し
て窓から漏れ出していた。

躊躇っている暇はもうない。

やるか、やられるかだ。

屋敷の窓から踊りこみ、壊れかけた扉をアイゼンで粉碎して廊下

に飛び出す。

すでに外の光はわずかばかり、赤い残照を残すのみだ。

突如、高速で飛来した無数の黒き矢弾が前方の廊下から襲い掛かり、逃げ場がないと判断し咄嗟に床に身を投げ出してアイゼンを振るって数発の黒い矢弾を打ち落とすと、ヴィータは飛び込んだできた部屋に身を潜めていた。

一瞬の攻防と、黒い矢を打ち落とす感覚に冷や汗をかいていた。アイゼンを握る手が重く軽く痺れていた。

ハンマーの先の黒い跡が霧散する。

あの矢弾を受けた瞬間、エネルギーを吸い取られるような感覚に包まれた。

おそらく、神気を吸い取る攻撃に違いない、と俺は判断していた。

そう思考して馬鹿な、と思う。

戦いの経験など、天道司という人間は学んだことすらないのだ。肉体的にはよくスポーツはしていたから引き締まった体つきをしていたものの、激しい格闘技の経験はほとんどない。

せいぜいが護身術程度で、今の動きはこの体の性能であることは間違いないのだが、そんな一瞬での判断と敵の攻撃の性質を理解する能力を持っているはずがないのだ。

いや、そんなことを考えている場合ではない。

ぐずぐずしていれば誰かが、いや確実にあの人が犠牲になるかもしれない。

先程の米一という言葉が気になる。

人間でも取り込んだのかもしれないぞ。

させねえ、させてたまるか。

誰も犠牲はださねえ。

強く手の中のグラーファイゼンを握り締めて、廊下の様子を窺い、俺はさっき攻撃がきた方向とは反対の廊下に飛び出していた。

一一話『ギガント解放 ヴィータ 光の巫女神!』

質量を伴った黒矢が床に着弾し、爆風となってヴィータの背後で吹き荒れる。

吹き飛ばされて地に転がるヴィータ。

受身を取って起き上がると、間髪いれずに襲いかかってきた黒い蜘蛛の胴をアイゼンのハンマーがなぎ払っていた。

さらにその陰に潜んでいた蜘蛛が飛び出し、アイゼンを振り切つてゼロ距離に対応しきれないヴィータの上のしかかる体勢になっていた。

牙を剥き出して、不愉快な匂いと黒煙をヴィータの鼻先で撒き散らした。

浸透してくるような黒い霧は容赦なく体力を奪っていく。

「くそ、が」

アイゼンを目の前で蜘蛛の顎に噛ませて、両手で持って歯をぎりぎり噛み締める。

アイゼンを奪われまいと力を振り絞るが、マウントポジションを取られ、目の前に迫るあぎとを見れば絶望感が湧いてくる。

ちびっこいものになって力だ。

複数の脚で肉体を締め付けてくる。

一気にヴィータの頭ごと噛み砕こうと体重をかけて、獰猛な唸り声を発し、蜘蛛は鼻先に熱を帯びた黒煙を吐き出した。

周囲にざわざわと黒い蜘蛛が形を取り始める。

黒い霧が集まればいくらでも再生するのだ。

まさにきりがなく、顕在化すれば殺られてしまう。

「ヴィータ様! 目をつぶってください。不浄な獣め。オコメフラ

ツシュ！」

グイータの胸元に躍り出た米一の額から閃光が迸り、蜘蛛の眼をつぶしていた。

瞬間力が弱まり、全身の力を使って蜘蛛を蹴り飛ばすと、自由になった両手でアイゼンを握り締め蜘蛛の胴体に振り下ろしていた。

ズドン、と重い手ごたえのある感触が腕に伝わってくる。

壁に衝突しドス黒い色を撒き散らして蜘蛛が消滅する。

ついでに姿を現しかけた蜘蛛の影を撃ち霧散させる。

その黒い残滓がついたハンマーを振り払うと、強く荒い息を吐きだしていた。

普通の生物ではない、そのことがわかってからアイゼンを振るう力は容赦のないものとなっていたが、何度見ても気持ちがいいものではない。

グラーファイゼンのハンマーの先に穢れを浄化した光の粒子が弾け飛んでいた。

もう何度目になるかわからない襲撃。

きりがない。

激しい運動に空になった腹が場違いにも音を立てていた。

腹が減って死にそうだ。

すきつ腹を抱えて腹に力を込める。

少しでも空腹から気をそらしてないと倒れてしまいそうだった。

「ち…次から次へよく沸いてきやがる」

「こやつ等は分身のようなもの。本体を倒さねばいくらでも出てくるかと。しかし現界してそれほど経っていないですから。力をつけられてからでは厄介でしたぞ」

帯襟にしがみついているお米粒達。

米一の台詞に俺は苦い顔をする。

「こんなのが海鳴に普通に沸いて出るのかよ……」

周囲を見回して呟く。

数年間過ごしてきた町が実は魔界同然、不可思議な世界だとは誰も思いはしないだろう。

誰もが知らぬ、気がつかぬ世界。

日常の空間に潜む魔境。

「吹き溜まりから発生した穢れの対処はその手の専門家がおりませんから。人が気がつかぬうちに処理されます」

「専門家？ 退魔師とかいたりすんのか」

「そうでござる」

ほぼ漫画の知識で本物など見たこともないが、米三に思い切り肯定されて、俺は何だかなあと首を軽く捻る。

「ヴィータ様、まだ序の口、奴の本体を叩きますぞ」

「へい、へい……」

アイゼンを肩に担いで空返事を返す。

「穢れの濃度が濃くなってきたである。あの階段が怪しいである」

米二の妖怪アンテナ、ではなくセンサーが反応したのか、地下に下る階段を指差していた。

普通、地下室ってのはそんな深くはないはずだが認識は甘かった。

「この階段どこまであんだよー！」

「こりやまた長いすな」

見下ろす先は奈落の深淵、何故か底が見えねえ……
建築法違反なんてレベルじゃねえぞ。

異空間であることをようやく納得し、どういつ原理なのか考えることは放棄した。

「この洋館といい、路地の結界といい、裏に何者か潜んでいますな」
「何者つて？」

「この土地は以前から吹き溜まりが発生しやすいところですからの。
何せ龍脈が近い」

「龍脈ねえ……」

難しいことはうだうだ考えてもよくわからねえ。

にしても、わざわざ螺旋階段を用意してる律儀な敵に突っ込みを入れたくて仕方がねえな。

まあすぐぶっ飛ばしてやるがな。

俺はへの字に口を歪めて笑ってみせると階段を駆け下りていった。
大きな空洞、いつ掘ったのか不明な大穴の底に降り立つと、まるで削岩機で掘りぬけたような横穴がどこまでも続いている。

不思議なことにはほのかに明るく、壁がまるで胎動するように動いていた。

幾分かの気味悪さも目の前の怪物に比べれば些細なものだった。

待ち構えていたのは巨大な一二本脚の蜘蛛、赤い複眼を持った生物が容赦なく襲い掛かってくる。

普通の蜘蛛じゃねえし、どう見ても今までのとは桁が違う。

「でけえ！」

「土ぐもではないか。何故このようなところ？」

お米粒の一声、問いたただす隙もなく巨大な脚が振り下ろされる。見かけによらずスピードは俊速で、糸を吐き出してこちらの動きを封じようと、脚での攻撃の後に糸を吐き出していた。

初弾を交わすが、網のように広がった糸に追い詰められる。絡めとられると思った瞬間、身を仰け反らせてなんとかかわす。

「あいや〜」「お助けである」「むじご……」

帯ぎりぎりにかわしたはずだがお米粒三人がさらわれていた。

糸が頭上から吐き出され、地面をごろごろ転がって射程範囲から逃れる。

「お米！」

「構うでありませぬ！」

「あら、逃げたのね？ 上でうるちよろしてた人間？」

女の声が洞穴内に響く。

見上げると蜘蛛の頭上に女が一人いた。

黄色く長い乱れ髪に、素裸で全身に紋様のような刺青が浮かんでいた。

異様なのは下半身が蜘蛛と合体していることだ。

その手元にはお米粒を捕らえた糸が握られていた。

「な、女？」

「フン、ガキねえ……」

俺の呟きに毒を思わせる妖艶な女が笑った。

どこまでも邪悪さを内包した存在だ。

それを本能で感じ取りアイゼンを強く握り締めていた。

「こやつは女郎蜘蛛。アヤカシですぞ」

「お黙り」

「むぎゅぎゅ……」

「やめる！」

お米粒を絞り上げる女、こちらに目を向けて睨みつける。

「あたいの影の獣をよくもやってくれたね。おかげでこっちは力がすつからかんだよ。後でたっぷりその若い男の血肉で咽喉を潤してやるわあ」

若い男？

疑念を発する間もなく女が手を上げてそちらに注意を向ける。

「そういうわけだから邪魔をするんじゃないよ。死ね」

「くっ！！」

頭上に蜘蛛の影が伸びていた。

たたらを踏んで糸の攻撃をかわし、蜘蛛の背後を取ろうと走り出す。

どこだ、どこが弱点は？

足元に駆け込んで一撃叩き込むのが一番の有効打に思えたが、あの脚攻撃が厄介だった。

懐に入り込んだ瞬間、連続で攻撃されて糸でやられるのが目に見えていた。

あの女がなにをしてくるのかもわからない。

力を使い果たしたようなことを言っていたが真実だとは限らない。俺の行動を躊躇させているのは経験だった。

戦うという経験に対する圧倒的な不足がヴィータの動きを鈍らせ

る。

ふと、蜘蛛が張り巡らせたであろう、糸を重ね合わせた蜘蛛の巣に人が吊り下げられているのが見えた。

その光景に視線を奪われ、思わず足を止めてしまっていた。

何であんたがここにいるんだ。

否、信じたくなかった。

あの携帯…そして捕まっているという事実を。

仲井：先輩！

先程の女の言葉がよぎる。

餌。

その言葉にぞくりと背筋を震わせた。

こいつが人が消える原因の正体、人をさらって食う魔物。

今まで行方不明になった人々はこいつに食われていた？

「ヴィータ様！」 「ヴィータ殿！」

「やべ」

横からの鉤爪の斬戟、飛び散る鮮血、巨大な脚が振り下ろされ、ヴィータをその脚で踏みつけていた。

とてつもない衝撃に胴体を挟まれ、身動き一つ取れなくなっていた。

「ガハッ」

「ああん？ よそ見るんじゃないよ」

その衝撃に頭の中が弾けたように真っ白になる。
赤に染まった視界、圧迫された肺から空気が搾り出され、たちまち呼吸難に陥る。

ゼエハア、ヒィ…と音だけが咽喉から漏れ出る。
少し浮いたかと思うと、次の瞬間、万力の踏みつけに見舞われていた。

全身に酷いダメージを受けて、握っていたグラーファイゼンを手放していた。

畜生、ここまでか、ここで俺は終るのか？
何もできないまま？

赤い複眼の蜘蛛が俺を見下ろしていた。
牙の生えた口を開いては閉じて、唾液を落として顔を寄せてくる。
喰らおうというのだ。

動け、動け、動きやがれ！
わずかに動いた指先に目を見開く。
赤い血が視界を濁らせる。
まだ終っちゃいねえ！
アイゼン…まだ動けるよなあ？

小さな手が相棒を求めて掴んでいた。
グラーファイゼンの消え去りかけた光の灯火が再び力を取り戻したように輝いた。

相棒を手に機会を覗く。

ラテーケンフォーム

奴に行動を読まれないよう、ぎりぎりまで発動させずに動かない。

「うおおおおっ！ ラテーケンハンマー！！」

弾かれたようにヴィータが起き上がり、体を回転させ、至近距離に迫った蜘蛛の口の中にアイゼンを叩き込む。

変形し、射出される鉄槌の爆撃が蜘蛛の体内で爆ぜて突き抜けた。確かな手ごたえを感じていた。

「ギヤアアアアアアアアアアアア！！！」

獣とも女のものともつかない叫びが空間に木霊して、蜘蛛がその巨体を奮わせる。

脚を曲げて胴体を伏せる蜘蛛。

跳躍したヴィータが蜘蛛女の前に着地して、お米粒が絡まった綱のような硬さの網糸を奪い取っていた。

「き、貴様ー、何者だあ！？」

狂気に満ちた表情で蜘蛛女が叫んだ。

「ヴィータ」

短くそれだけ告げて女の顔を拳骨で思い切り殴り飛ばすと、轟音を立てて蜘蛛の巨体が土煙を立てて地面に沈み込んだ。

後は目もくれず先輩の元へ走る。

蜘蛛の巣を払い、釣り下がった糸をお米粒達が断ち切って、ヴィータは落ちた先輩の体を受け止めていた。

小さな体で先輩の体を抱きしめる。

大丈夫、息はある。

「先輩……」

見下ろした、膝の上に乗せたその顔は気絶していて、青白かった。わずかに上下する胸に安心して涙が出ていた。ぼつり、と一滴こぼれて先輩の頬に落ちた。

「まだだあ、まだあ、終っちゃいないよおおお
「なにー」

張り裂けるような声が響き、空気が張り詰めていく。女が立ち上がっていた。

蜘蛛の巨体は消え去っていた。

闇が女の周囲を取り巻いて嵐のように吹き荒れていた。

「殺してやるう。みんなまとめて皆殺しだあああ」

狂気を込めて叫び、見る見るうちにその肉体が膨らんでいく。人間の形をしたものが風船のように膨らんでいく様は滑稽でもあった。

「ゲ……ヤバそうだぞ」

「ヴィータ様、不味いですぞ。彼奴め、この空間に溜め込んだ瘴気を爆発させるつもりじゃあ」

「つまり？」

「ボン、でござる」

「往生際が悪い……逃げよう」

「逃がさぬわあああ」

天井を見上げて女が叫ぶと階段が消失していく。
そりゃねえぜ……。

「くそ、お前、死ぬつもりか」

「キャハハハ、殺してやる！ ミナゴロシイイイ」

マッドな蜘蛛女にもはや理性などなく、こちらの声も届いていない。

駄目でありや、どうにもならねえ。

そうしてる間にもぶくぶくと膨らんだ肉体は元の体積の一〇倍程に膨らんでいた。

もはや人間の形状を保っていないかった。

「お米粒！ どうにかならねえのかよ」

「どうにか、と言われましても…あれは穢れの塊ゆえ、浄化するしか手はありませんが、あれだけの瘴気、アイゼンで殴った程度では浄化しきれませぬ。が」

「が、ってなんだ、がって！？ もったいぶってんじゃねえ！」

「ヴィータ様、拙者の言うとおりにしてください。神降ろしをいたしまする」

「はい？」

米一が俺の耳に囁く、その言葉を。

「よし、わかったぜ……。できなかつたら死ぬぞこのやろう」

「ご武運を」「任せたでござる」「死んでもまたお米に転生するぞあるよ」

「お米え…気楽なのな」

気が抜けて、肩を落とす。

飛び散った閃光は空間を満たし、爆風となって標的を捕らえていた。

膨れきった闇が爆ぜた、そう思った瞬間、世界は光そのものへと包まれて、瘴気と蜘蛛女を塗り潰すように消し去っていた。

「やったのか……？」

ゴツ、っと鉄の音が響き、巨大なハンマー、打ち出の小槌を地につけ、ヴィータはその柄に全体重を預けていた。

手の中の変化した打ち出の小槌が神気を使い果たし、元の姿、グラーファイゼンの姿に戻っていく。

グラーファイゼンのギガントフォームでなければ放てない、ヴィータの神格が示す真の力の姿。

それが布津御霊の力を借りた、神器である打ち出の小槌の召喚だった。

閃光によってぼやけた目が治り、ようやく焦点を合わせると、倒れた先輩の元へ一歩踏み出そうとする。

あれ……。

体、動かねえ？

肉体にかかった負荷の影響か、もう歩けないほど消耗しきっていた。

立っているだけで体の節々がミシミシ悲鳴を上げている。

先輩の体はお米粒達が結界を張って守っていてくれた。

もう安心だ。

そう思った瞬間、気が抜けたように膝をついて、スローモーシヨンのように感じながら、地面に倒れ伏していた。

腹…減ったなあ……。

最後にそんなことを思っていた。

『一二話』終わり 『はじまる関係』

三章

水無みずなしほとりは大学二年生になる。

海鳴大学の学生でサークル活動はツーリング部に所属していた。大学内では比較的中堅のサークルなので、バイク好きな男子や女子が集う、アクティブリティ溢れる部活動となっている。

同性の所属メンバーは八名、男性メンバーは十数名といったところだ。

目当ての異性と親しくなるのが目的だったり、純粹に旅が好きだったり、バカ騒ぎするのが好きだったりと目的はそれぞれだが、ほとりも概ねは充実したサークル活動とキャンパスライフを送っていた。

当初ほとりはツーリング部にまったく関心がなかった。

それでも、と高校時代からの友人に誘われ仮入部、という形で参加させて貰っていた。

最初に参加した小旅行、山間のキャンプに川での魚釣り。

焚き火を囲んでの楽しいひと時、そこでの出会い

そして正式に入部を申し込み正規のメンバーとなった。

とはいっても、ほとりが持っているのは原付のスクーターで、ツーリングするにはかっこよさが足りないのが玉に瑕だった。

でもそんなことは関係なく、ほとりはツーリングという男のロマンの香りがするものが好きだった。

走る爽快感は風の中を突き抜けて、まるで自分自身がそうだったかのような開放感が男性的で魅力的だった。

バイトしてお金を貯めているのも原付ではないバイクを買うため

だった。

女の子らしいサークル活動も嫌いではないのだが、ほとりにはどうしてもツーリング部に固執する理由があった。

理由はたった一つ、好きな人ができたから

それが第一の利用ですべてだったと言ってもいい。

春は軽井沢で桜を見て。

夏の北海道摩周湖を周り。

秋は京都近辺の山の紅葉巡り。

冬は……。

ほとりの秘めた恋心はこの冬に明かされるはずだった。

告白して、付き合ってください。

女からこんなこと言うの恥ずかしいけれど、もう待てなかった。

先輩はもてるから、私が知ってるだけで五人はチエツクをつけている

焦る、焦る。

だから先輩からデートに誘ってくれたときはとても嬉しかった。

もしかしたら雰囲気で告白してしまうかもしれない。

いや待て私、もしかして、告白するのが先輩の方かも？

舞い上がっていたのは確かで、メールを貰ったその日はバイトも手がつかなくて桃子さんに叱られちゃった。

桃子さんというのは私がバイトしてる翠屋のパティシエールなんだけど、それがすごい達人で、外国の一流どころで修行した最高の職人で、まさに一流のお墨付きです。

桃子さんの旦那様の高町士郎さんは翠屋のマスターをしてて、桃子さんと翠屋を切り盛りをしています。

実のところ桃子さんは私の叔母に当たる人で、事故で肉親を亡くした後の私の面倒をよく見てくれていました。

大学に進んだとき、通いと女一人で住むのは物騒と、高町家の部屋を貸してくれたのです。

高町家は藤見ではそれなりの旧家で家も広く、部屋も余ってるということなので、最初は遠慮したんだけど、部屋代はいらないから翠屋でバイトしてほしいと言われて、双方納得の上での契約をさせてもらいました。

それに桃子さんのお菓子作りを見られるのも味わえるのもすごく魅力的でした。

その際、水無の実家は処分することを決意して、後は弁護士さんと桃子さんに任せて家を出ました。

本当に後ろ髪引かれる思いだったけど、亡くなった両親と兄さんとの思い出が詰まったこの家を離れて、本当はホッとしていたのかもしれない。

私には家だけが残り、みんなはいなくなってしまったのだから

そんな過去の傷を、日々の生活の中でようやく忘れた頃に

また事故が私から何もかもを奪い去ってしまった。
今でも耳に残るあの救急車の音を私は覚えている。

海鳴大学所属四年、天道司

お巡りさんが告げたその名前をあの現場で、信じられない思いで聴いていました。

嘘だ。

そんなはずがない。

先輩が引かれるなんてことがあるはずがない。

だって一昨日は一時間も電話でお話して、その後、メールで日曜日に一緒に出かけないかって……。

それで、それで……。

ほとりの記憶は遡る。

その日は高町家の兄妹達と仲良く朝ごはんを食べてから家を出た。日曜日の天気は午後は雨でしょう、とか言っていたので折りたたみ傘を持って出ることにした。

あれよね、相合傘とか、先輩と肩を寄せ合ったりして

化粧を落とさないように気をつけてたから食べるのに時間がかかって少し遅くなった。

ちよつと失敗。

お姉さんきれい、って高町家末っ子のなのはちゃんが褒めてくれて、美由紀ちゃんがお姉さん、私にお化粧教えてねって頼まれて、一番上の恭也君がそれをからかって、いつもの家族団らんの風景だった。

遅れることを先輩にメールしたのは駅に着いてからで、内心ドキドキが止まらなかった。

嫌われるかも、という、そんなことで先輩と私の間がどうにかなる関係ではないと知っているけれど、これはデートで、誘われたのは私で、今の私は完璧じゃないといけないんだって自分に言い訊かせていた。

窓際に映る自分の顔を眺めながらラヴリーに仕上がったチーク、睫毛は完璧と目を瞑ってみせる。

よしよし可愛いぞ、と息を吐き出し気合を入れる。

唇のグロースの入れは私にしては上出来でいい具合。

昨日大慌てて買った、今日のための上品過ぎず下品すぎない色合いは大人の雰囲気をかもしだしている。

桃子さんにブラシで整えてもらったヘアスタイルはいい感じである。

これなら先輩もよそ見する暇などないはず……。いやない、ないんだってば！ と自分を説得させる。

一駅進むたびにその自信はどこかに揺らいで消えてしまったのだけれど。

ドキドキと胸は高鳴る。

先輩はどんな顔をするだろうか？

今日の格好、先輩が何も言ってくれなかったらどうしようー。が、頑張れほとり、フレーフレーッ。

そして扉が開いて、ほとりは運命の一步を踏み出す。

残酷な現実には救急車のサイレンと赤いランプ、運び出されるタンカ、アスファルトに溜まった血溜まりを突きつけた。

そこから先はすべてが灰色に変わった。

何も見えない。

何も聞こえない。

何も理解できない。

当てもなく歩き出し、時間も忘れ、気がついたとき私は雨に濡れて歩道に立ち尽くしていた。

降り出した雨がアスファルトを黒く染めていた。

雨の匂いが鼻先から水滴となって伝わって落ちた。

すれ違う人々の視線など気にも留めなかった。

シヨウウィンドウにずぶ濡れになった女が映り、それが私だと気

がつく。

濡れそぼった髪、せつかく桃子さんが整えてくれたのに冷たい雨に打たれ、もう化粧なんて意味を持たなかった。

すべてが流れ落ちていく、そんな錯覚に捕らわれたような気がした。

どうやって高町家に帰宅したのかさえ記憶はあやふやだった。

濡れ鼠の私をなのはちゃんか玄関先で見つけて、美由紀ちゃんに無理矢理服を脱がされてお風呂に入れられた気がする。

ろくすっぽまともな返事ができないまま、されるがままにされていた。

何があったのか訊かれなかった。

訊かれても何も答えられなかつと思う。

そして暗い部屋に籠って、現実から目をそむけるように布団をかぶっていた。

携帯は怖くて電源を切っていた。

これ以上は傷つくのが怖くて何もかもから目を閉じていた。

高町家に仲井さんから私に連絡があり、先輩が命を取り留めたこと、目を覚まさないことを知った。

病院の場所を教えてもらったが、ショックで何も言えないまま電話を切ってしまった。

それから間を置かず、不思議な赤毛の少女がずぶ濡れになって高町家にやってきた。

忙しい桃子さんにその子の看病を頼まれ、私は事故のことを頭から追い出して必死に面倒を見た。

その間は翠屋のバイトも休んだ。

三日目にその子はいなくなってしまった。

何も告げずに……。

その子は先輩の服を着ていた。
サイズの合わない革ジャンは先輩のものだった。
それを何故、赤毛の女の子が着ていたのかわからない。
仲井さんに訊いても慌てたように借りたんだよ、と答えが返って
くる。

怪しい、けどそれ以上深くは追求しなかった。

私にはもう関係がない　いや関係の持ちようがない。
薄情な人間だ、私は……。

会うのが怖くて、現実を受け入れるのが怖くて、見舞いにすらい
けない臆病者なのだ。

ほとりは鏡の前でじっと自分を見つめていた。

虚ろなその瞳に留まるのは剃刀。

大事なものを何もかも失って、いつそのまま消え去ってしま
たかった。

まだ先輩は生きている　けれどももう二度と目を覚まさないかも
しれないと告げられた。

もうあの声を、あの手を感じられることはないのだ。

銀色の刃がほつりを映し、ただ鈍く光っていた。

ヴィータ

現実の朝は空腹と無縁ではいられない。

しんと冷え込む朝、布団の中の温もりは至上のもので、毛布に包
まってその柔らかな世界に浸りきる。

そんな至上さえも抵抗できないのが味噌汁の匂いとベーコンエッ
グを焼く匂いだった。

ヴィータの鋭敏なる嗅覚は一瞬でそれを捉え、目覚めという不快
感さえ通り抜けて、本能を満たす食欲のままに起き出していた。

「うあ、さぶ……」

寒気に両腕を摩って身を震わせた。
寝癖となったアホ毛がピヨコンと飛び出す。
着ているのはでかいだぶだぶの長袖のシャツだった。

下には何故か何も履いてなくてスースーする。
まず確認したのは室内だった。

見慣れたというかよく知っている部屋だ。
壁にかかっているリーバイスのジーンズにコート、そしてスーツ。
服がはみ出した衣装棚に黄色のカーテン。

クンクンと犬のように室内を嗅ぐと、漂う味噌汁の匂いにお腹グ
ーッとなって、空腹の欲求には勝てず素足のままりビングに出てい
た。

大きな背中が見える。

その人物の背中が俺がよく知る人物だった。
気配に気がついて彼が振り向いた。

「よ、起きたか。腹減ってるだろ？」

その問いかけにヴィータが頷いてみせると、彼は、仲井はよし、
と言ってベーコンエッグをテーブルの上の皿に盛り付けている。

仲井吾郎　それがこの青年の名前で、天道司の先輩に当たる人
物である。

何故ここに自分がいるのか？

疑問を口にしようにも仲井はすぐに振り返って、戸棚から皿やら
マグカップを取り出してテーブルに並べていく。

「えっと……」

「そっち座りな、腹減っただろ」

「はい……」

躊躇いながら、テーブルに近寄り仲井を見上げた。

「ん、どした？」

促されてテーブルの椅子を引いて座った。

等身の低さに普通の家具を扱うのにも勝手が違う。

「んじゃ、いただきます」

「……いただきます」

フォークと箸が並べてあって、ヴィータは箸を取ってベーコンエツグを口に入れていた。

胃がびっくりしないようにゆっくり噛んで、ご飯も頬張っていた。卵にベーコン、塩胡椒のシンプルな味付けはそれだけで胃を刺激していた。

最初の一口からすぐに次の一口となり、味噌汁を啜り、またご飯を頬張る。

美味い。

普通の朝食に過ぎない、そのはずが、涙が出るほど美味かった。この体になってから初めての食事だった。

「よっぽど腹減ってたんだな。ゆっくり噛めよ」

その言葉に頷きながらヴィータは味噌汁を飲み干していた。

少しペースが速かったが、一度食欲に火がつくと止められない。

「お代わりしろよ」

そう言った仲井の大きな手がヴィータの腕を取り上げて、鍋から味噌汁を注いで置いた。

ようやく腹も満たし落ち着いた頃、俺は自分が何故ここにいるのか、改めて疑問が沸いていた。

俺はあの後どうなったんだ？

化け物ぶっ倒したのは覚えてるがその後の記憶はない。

物思いに沈むヴィータの様子を伺いながら仲井が口を開く。

「えーとだな……。ちと訊きたいことがあるんだが」

「はい」

俺は身構えて返事を返す。

今の俺が何者なのか、天道司であることを話すことは難しい。

かといって身の証を立てられるものはない。

仲井は椅子を反転させて座り込む。

「ずばり君は家出少女だったりして、司に拾われて一緒に暮らしたりしたのかなって？」

「はい？」

「事情はあると思うが…君、病院にいただろ。訊いたよ、ずっと治療室の前から動かなかったって。それに司の服を着てた。あそこに居合わせ、当人の服を着た女の子。無関係ではないわな。うーんと、俺の推論間違ってるのかな？」

そういつて頭をポリポリとかいた先輩を俺はポカンと眺めていた。

家出少女。

拾った？

その言葉にドキリとした胸を撫で下ろす気分だった。

そついう認識をされていたのか……。

間違っている、間違っているが、真実よりはよほど真実に思える

内容だった。

しかし家出少女だと認めればどうなる。

間違いない警察の世話になる。

そして不法入国者という扱いになるだろう。

ただし、どの国にも所属が確認できない少女の行き場はどうなるのだろうか？

よくてどこかの施設に入れられることになるだろう。

それは駄目だ。

脱走すれば、自由な行動など不可能になる。

いくら神がどうだろうが、日本という国の現実には異分子の存在を許さないだろう。

思考に沈んで黙ってしまった少女をじっと仲井は見つめていた。

本人にとつて答え難いことだろう。

素性はわからない。

病院から逃げ出し、再び出会ったとき少女は雨の中、泥水に沈みこむように倒れていた。

おそらく、司のアパートに寄ったのだろうと推測する。

アパートには天道家の夫婦がいて立ち入ることはできなかったのだろう。

そして高町家からは意識が戻ってすぐに姿をくらました。

こんな小さな少女が人を避けて生きねばならない人生とはどのようなものなのだろうか？

平和な日常に生きる者からすれば壮絶の一言である。

見た目からおそらく年齢は八、九歳くらい。

高町家のなのはちゃんと同じくらいだろう。

この子は今までどんな道を歩んできたのだろうか。

司、お前はどんな思いでこの子を見ていたんだ。

仲井は天道司という男が戯れに少女を引き入れるような男ではないことを知っている。

バイクが好きで、仲井もバイクが好きだった。

大学時代は一緒に何度も旅をした。

夜空の下で語らい酒を飲み、将来の消えかけた夢を追ってみたり、たまにバカを試してみたり、恋とは何なのかを語ったりもした。

だからこそ言えることがある。

司がこの子の信頼を勝ち得たのは、たった一つのことから始めたからじゃないだろうか。

だから、俺もそこから始めてみようと思う

「俺の名前は仲井吾郎、君の名前を覚えてくれないか？」

俺と友達にならないか？

そしてその言葉は紡がれる。

そこから二人の新しい関係は始まった。

一三話 『退魔師 その男 危険につき!?!』

ヴィータが仲井先輩のところをやっかいになるに当たっていくつかの約束事をさせられた。

一つ、外出するときは必ず行き先を告げるかメモを残すこと。

二つ、知らない人には二人の関係はいとこであることを告げること。

三つ、携帯を持ち歩くこと。

まあ当然だが、居候させてもらうのだから行き先はちゃんと教えることには同意した。

神様のところに行くとかはさすがに書けないが、神社巡りをすることは言っておいた。

何故かと訊かれたので神社巡りが趣味なのだと答えたが、女の子の趣味にしては渋いと言われた。

俺もそう思う。

何故いとこなのか不明だったが、先輩の義理の姉がイタリアにいるらしく、俺は義姉の娘という立ち位置らしい。

姓はヴィヴィアーニというらしい。

そんなわけで、俺はヴィータ・ヴィヴィアーニと名乗ることになった。

綴りはV i t a ・V i v i a n iである。

VEIが三つも並んでいる。

なんかのジョークみたいだ。

そちらに連絡などされればアウトだが、身元引受人は先輩と高町士郎という人が引き受けてくれるらしい。

先輩にとっても少し危ない橋であるように思う。

何せまったく存在しない人間の名前を使うのだ。

逆に何故根掘り葉掘りこちらの素性を問いただしてこないのかが不思議だ。

こちらの意思を尊重しているとも言えるが、下手をすれば先輩が未成年略取などの罪に問われかねない。

それと今まで思い出さなかったのが不思議なくらいだが、先輩と高町家、その高町家が経営する喫茶店、翠屋との関係。

大学の後輩である水無ほとりが下宿しているのが同じ家名であり、そこでバイトしていることも思い出していた。

そして住所は藤見であるから、偶然の一致を不思議がるより気がつかない方がおかしいのだ。

高町家の話をたまに彼女がするのを訊いてはいたのだが、実際にはほとんど聞き流していたようで、高町家 翠屋が結びついていなかった。

何となく家族構成はぼんやりと覚えていた。

ではあのおとき看病してくれたのは彼女なのかもしれない。

聞き覚えがあると思ったあの声がそうなのだろう。

後、なのはという印象的な少女のことも思い出す。

何せ熱に浮かされていたときは他の家人の顔を見ることさえなかったのだ。

思わずため息をつく。

何から何まで天道司という男は人に迷惑を掛け捲るのが性らしい。体は変わってもそういうところだけは変わらない。

この不義理はどうやって返せるものか考えてもわからなかった。

立ち鏡に映る今の俺は赤毛の少女で、身長は小学二・三年生ほどだ。

長い髪はどう扱ったらいいものかわからなかったから、縛るため

のゴムを貰ってポニーテールにしていた。

着ている服は先輩が高町家から借り受けてきたもので、トレーナーとジーンズだった。

ヴィータの体には少し大きく、高町家の長男のお古らしく、名前は高町恭也と言って、来年から大学生だという。

どうも後輩になるようだが、あつて話をする機会が得られるかはまだわからない。

わからないというのは天道司としてだった。

パジャマはそのまま借り受けて、今は洗濯されて折りたたんで置いてある。

ただ居候もあれなので、家事は一切ではないがある程度を手伝うことを約束していた。

今は大量の洗濯物を取り込んで薄い日差しを浴びながら下着肌着を選別して畳んでいる。

全部男物なので取り扱いは慣れている。

何せ男の一人暮らしの基本は洗濯物を溜め込んで後で一気に洗うやり方が主流である。

司にも経験がある、というか、先輩より実は酷い。

洗濯に関してはかなりルーズであったので、今こつこつ洗濯物をきれいに畳んでいるのは何やらむず痒くなる。

さらにアイロンまで気合を入れて用意した。

せめてYシャツなど、お世話になる意味も込めてきちんとしたかったこともある。

何やらそんな作業をしている自分に、亭主の服を仕付ける妻のようだなと想像して、少し精神的なダメージを追っていた。

いや、ないし幼妻にもほどがありすぎるだろ常識的に。

鏡の中の俺は何となく眺めてても可愛らしい美少女だった。

ポニーテールに上げた髪から除く首のうなじは滑らかな質感を持ち滑滑である。

色気、とかではなく純粹に肉体が女という生き物の匂いを放ち始めていた。

自分でそう思ってしまったのは男の性なのだろうか？

決して自意識過剰でないことは男の目で観てそう思ったのだから間違いはない。

可愛い女の子の自分が男の服を妻のようにアイロン掛けをしているのだ。

まるで新妻の様にだ。

次の瞬間、ヴィータは洗濯物に身を投げて身悶えていた。

その感覚が決して嫌ではないのが身悶える原因だった。慣れてしまうのはやはりまだ抵抗がある。

やばい……。

早く、元の体に戻りたい。

『散歩しに行きます（神社巡りをかねて……）。七時くらいまでには帰ります』

テーブルの上に書き置きを残し、ヴィータはジャンパーを羽織った。

このジャンパーも高町家から借り受けたもので、革ジャンはでかすぎるので、ハンガーにかけてしまわれていた。

この時間くらいに先輩も戻るとは思ったが、実際にはもっと遅くなることも知っていた。

そのときは多分携帯で連絡すればいい。

先輩から渡された携帯は予備のもので、旧式のものだった。

買い換えると前々から言っていたが、まだ解約を済ませていなかったらしく、それが幸いヴィータに持てと渡してきたのだ。

高町家には後日、色々な意味を込めてのお礼を言い行くことになっていた。

彼女や高町家の人々にどんな顔をすればいいのかわからなかったが、けじめはつけなければならぬ。

次の土曜日にお邪魔することになっていた。

それよりも気になるのが俺の体のことだ。

病院に行きたかったが、行けば両親に鉢合わせする可能性が高いかといつて先輩に病院に行くとは言い出しにくかったものの、高町家に寄った後に事故に遭った後輩を見舞いに行くからな、と俺の頭を撫でて言うので、そのときまで我慢することにした。

今は神様としての仕事をしてしまおうと手始めに神社巡りをすることにしたのだ。

お米粒どもは家で留守番してると言うのと、じゃんけんで勝った米二がついてきた。

こいつの妖怪センサーは役立つのでちょうどよかったとも言える。

先輩が買って来てくれた新品のスニーカーに足を通して玄関から表に繰り出していた。

空はどこまでも青くて、ヴィータは街中の午後の空気をかいで、地図片手に散策を開始するのだった。

翠屋

「いらっしやませー」

翠屋はお菓子屋であり喫茶店でもある。

店内にほとりの凜とした声が響いて客を出迎える。

翠屋のウェイトレスのほとりがその客さんを見たのは初めてのこ

とだった。

翠屋はこの近所では隠れた名店として知られており、常に一定数以上のお客さんが入る。

常連も多いが、新規の客も訪れては思いもよらぬお菓子の味に満足してまた来店するのだ。

そんなりピーターの口伝えもあって翠屋は繁盛していた。

その多くが主婦層であったりするので、大概のお客さんの顔は覚えてしまうのだが、そのお客さんは今までの客層からはずいぶんと印象が異なりほとりの記憶に残った。

しばらく落ち込んでいたほとりだったが、店に出るときはそんなことも忘れて営業スマイル一本、笑顔で接客を務めていた。

そうしている方が気も紛れて何も考えないでいられたからだ。

「珈琲を頼む」

「かしこまりました」

深い声が注文し、慌ててほとりがオーダーを受ける。

外見的にまだ三〇代かと思ったが五〇代を思わせる渋い声だった。紳士帽に黒いコートと出で立ちに可笑しな点は見当たらなかったが、どこか異様な雰囲気を発散していた。

「マスター、珈琲一つです」

「はいよ、ほとりちゃん」

「はい？」

ほとりは士郎の方に振り向く。

「あのお客さんには私から持っていくから」

「あ、はい……。お知り合いなんですか？」

「いや、そうじゃないけど。ご挨拶しようと思ってね」
「はい」

ほとりは不思議に思いながらも頷く。
知人ではないが挨拶をするという。

異様とは感じてても偉い人という印象ではない。

どういうお客さんなんだろう？

マスターとの関係を図りかねてほとりは首を傾げる。

珈琲を淹れてそれを運ぶ土郎の背中を眺める。

席は端の方なので位置は遠い。

「すみません、お会計お願いします」
「はい」

客に呼ばれほとりがレジにつくと、カランコロンと音を立て、店内に大学生のグループが入ってきて、何人かの女学生がほとりに手を振った。

同じ大学の人達だった。

レジを打ちお釣りを渡して、次の注文を受けに動く。

忙しさに忙殺されていた。

そのせいか、あの不思議なお客さんのことはすっかり忘れ果てていたのだ。

店内で一杯の珈琲で粘る客は珍しくもないから、注意さえ払うこともなかった。

「ほとりちゃん、お疲れ様。今日はもう上がっていいわよ」
「はい」

奥からエプロン姿の桃子さんが現れてほとりに告げる。

桃子さんから甘い匂いがほのかに香り、バニラエッセンスのいい

匂いが漂う。

そのままバトンタッチして、ほとりはその日のバイトを上がった。
いた。

とある神社

とんとん、ぺた。

赤い朱印のインクを絵馬に押し付けて、しっかりと押せたかとヴィ
ータがそれを見る。

うん、まあ、これならOKか？

「よい、お見事である！」

米二が偉そうに胸を張ってみせた。

偉そうにするとこは海鳴様そっくりなんだよな。

神様ってみんなこうなの？

「これってどうすんだよ？ 押した上にまた押してくのか？」

「まあ、よく見るである。ペケならすぐに消え、合格なら沈み込む
である」

「あん？」

絵馬を見ると、インクがにじみ出てるのかと思ったが、押した上
に映像となって浮き出たかと思ったら、赤い光を帯びて絵馬の中に
沈みこんでいく。

「これで通行証にこの門が記憶されたのである」

「へえ……」

絵馬を裏返すとこの神社の名が記されていた。
これで三つ目で、空きはずいぶんとあった。

「全部でいくつあるんだ？」

「我輩の記憶によると三八箇所である」

「三八……。多いなあい」

「海鳴は由緒正しき神が集う地である。むしろ門として使える社がこの数は少ないと言えるである」

「そーなのか？」

グイータは絵馬をクルクル回しながら、スタンプ置き場の戸口に背中を預ける。

この位置は人があまり来ない。

人通りはあってもほぼスルーされる。

スタンプラリーも大きな神社なら頻繁に人が訪れるが、この神社はどちらかというとマイナーな方だ。

「なあ、あのさ」

「なんであるか？」

「もしかしてここってさあ、俺等みたいな沢山いる？ 神様とか、妖怪も普通に街中にいるのか？」

「カツカカ」

判を押す台座の上でお米粒が笑う。

「変に笑うなよ」

「元より日ノ本は八百万の神がおわす国である。神の地を離れるものもおりますしな。はぐれ神もたまーに来るである。人が多い地ほどアヤカシの類も増えるであるな」

「こないだの土ぐもだっけ、あんなのが都会には山ほどいるってことか？」

「大概は姿を隠し人の社会に紛れてるである。人を喰らって力を得たアヤカシは悪目立ちする分、その手のものを退治する輩に狙われやすいのである」

「それって退魔師？」

「である」

お米粒は首をすくめて見せる。

その様子から彼らと神様が別に仲がよいわけでもないのかと推測していた。

「退治されるのは悪いことをした、人間社会に害を与えるものって認識でいいのか？」

「おおむねその通り、であるが、所詮は人の技。彼奴等は見境なくアヤカシを滅ぼしてしまう。浄化するのではない、滅殺してしまうところが違うのである」

「どこが違う？」

「我等神の源は神気。アヤカシは穢れを好むである。正反対とはいえ、この二つは龍脈より生み出されし力。その力は循環して世界を保つエネルギーになるのである。その流れはある一定のバランスを保ちながら存在するのである」

「ふむふむ？」

「退魔の力は強い力を持つである。人が編み出した技は陰陽を操るである。それは神とアヤカシをも滅ぼす力ともなるのである。もっとも強き神、海鳴様ほどであれば人に容易く滅ぼされなどされぬである」

人間が神を滅ぼす？

退魔師ってのはドンだけ化け物なんだよ。

「それでも力の弱い神なら滅ぼせるってことか？」

「今の世界は人間の世界。昔は神が堂々と神と人が暮らしていた時代があつたのである。それが今のような世の中になつたのは龍脈の變化が作用してゐるである」

「どういうことだよ？ 昔と今が違うのが龍脈が関係あるとして、退魔師がそんな世界に変えたわけでもないだろう？」

「ごく一部の世間から秘匿されていゝであろう退魔師がいるからといって、世界が変わつた理由が退魔師にあると考えるのは不自然なことだ。」

例えその龍脈のバランスを崩す存在だとしてもだ。

「その通りである。個人でしかない退魔師がいくら群れてもたいしたことがないのである。しかし国が総力を持って巨悪のアヤカシを封じることが過去にあつたとすればどう考えるのであるか？」

「そんなとんでもない怪物が大昔にいたってことか？」

ヴィータは腕を組み、胡乱そうにお米粒を睨んだ。

頭の中には巨大なメカゴジラが火を噴いていた。

それはないだろうが、残念なことに俺の神話の知識は浅い。

古事記とかの有名な逸話しか知らない。

「そう、国がそやつので真つ二つ、いや瓦解寸前にまで追い込まれれば人も団結するものである」

「なんか有名な話っぽいな？ 神話の時代の話かなんかか……。どしたよ？」

目の前のお米粒が固まつていた。

米二の妖怪アンテナ、ならぬ髪が立つてクルクル周っている過剰

なほほどに。

警戒して周囲を見回すが、参拝に訪れている数人の客しか見当たらない。

「おい、米二……!？」

ぞくりと何かが背中を駆け抜けていく。

ヤバイ、何かヤバイという感覚に全身が緊張していた。

人の身であれば決して感じ取れぬ気の流れに冷や汗が吹いて出そうだった。

空気さえも凍りつくような鬼気が迫る。

階段下　そいつは上がってくる。

黒いコートに黒い帽子、痩せた体に鋭い眼光。

燃え立つように冷たい気を撒き散らす異形の鬼気をまとった男。

ヴィータは動けない。

その殺気は隠しても隠し切れない威圧感を放ちながら世界を冷たく浸食していた。

人間、なのか？

境内の石畳、男はヴィータの手前十歩の位置で立ち止まった。

鷹のように鋭い視線が向けられ、最初にお米粒、そしてヴィータへと向けられていた。

お米粒は凍りついたかのようにコロんと台座の上から滑り落ちる。

「これは珍しい　ずいぶんと可愛らしい神がいたものだ」

その言葉の後に男の口元が笑みを形作る。

そして刃のように鋭くヴィータの心臓を打ち抜いていた。

確かな衝撃を感じて、無意識に胸に手を当てていた。

心臓は動いている、いるが、そこは早鐘を打つようにドクンドクンと波打って心を乱す。

息をすることさえ苦しく、その圧迫感は男がまとう気そのものだった。

冷笑。

「お初にお目にかかる。私は退魔師、真霧灯依まきりとうえという。お見知りおきください」

帽子を脱いで、胸に手を当てて男が名乗っていた。

一四話『白猫 米寿の世界』

ヴィータは渴いた口の中に沸いた唾を飲み込む。

名乗られた、名乗り返さなくてはいけない？

この男は何者だ？

退魔師？

マキリトウエ、それが奴の名前か？

名を問われ、ヴィータ、とその名を呟いたのか、告げたのか、自分でもよくわからない。

本能が告げていた、この男は危険だと

緊迫し張り詰めた空気を打ち払うように、パァンっという音が境内に鳴り響いた。

弾かれたようにヴィータが顔を上げ、真霧がその方角に顔を向ける。

張り詰めた緊張は糸を解かれたように霧散していく。

こらあ、という声と共に、小学高学年くらいの少年達がこぞってこちらに向かって走ってくるのが見えた。

束の間の邂逅を邪魔した音は爆竹の音だった。

逃げる、逃げる、と叫びながら、黒衣の男と赤毛の少女の間をすり抜けて、足早に階段を駆け下りていく。

その背をヴィータが見送って振り向くと、真霧は帽子を深くかぶりなおして背中を向けていた。

先ほどの威圧感は嘘の様に感じられなかった。

「いずれまた会うこともあるう。さらばだ」

グイータに流し目を送ってそう告げると、黒衣の男は歩き出し、淡い午後の日差しと石畳みの向こう側に消えていく。

爆竹の音で飛び立った鳥達が地面に舞い戻って、嘴でせわしなく地面を突付き始める。

黒衣の背中が遠ざかってようやく、俺は安堵の息を吐き出す。

いつの間にか握り締めていた手は爪痕を手の平にくっきりと残り、手は血の巡りを失っていた。

全身が麻痺していたようで、遅れた現実感が感覚を正常に戻していく。

蛇に睨まれた蛙

あの瞬間、俺はまさに蛙そのものだった。

動けばやられる、そう思ったほどの殺気を肌で感じ取っていたのだ。

今も鳥肌が立っていた。

生まれて初めての本当の恐怖だった。

現代社会の日本に生きて、それらのものに接する機会など普通の若者にはまったくないとっていいだろう。

捕食される獣の立場に立たされること。

それもまた皆無だ。

だがあの男の目は、それを躊躇うことなく行うことができるのだ、と無意識に俺はそのことを理解してしまっていた。

「えらい目にあったわねえ」

「え?」

どこからか声が響いて周囲を見回す。

周りには、少なくとも近くには人の気配はない。

気のせいか？ と足元に視線を投げると、そこに一匹の白い猫が座ってこちらを見上げていた。

目と目が合う。

キラリとグリーンのエメラルドの双眸がヴィータの姿を映し出している。

「猫が喋った？」

「あらいやねえ、お米だつて話すご時世に猫一匹が話したつて驚くことないじゃない」

「へ？」

よほど今の俺は可笑しな顔をしていたのだろう。

白い猫は俺の顔を見ながらクスクス笑う。

どうしてわかるのかって？ そんな気がしたからだ。

優美に体をしならせて、彼女は落ちたお米粒の側まで歩くとペロリとその頬を舐めた。

固まったままくるりん、と回転してペタリと転がるお米粒。

そこで目を覚ましたのかピヨコンと立ち上がって見せた。

ブリキの玩具のようによるよるよるけた後ろから、前足を突き出した白猫に突かれてまた転がっていた。

俺はそれを呆けたように眺めていた。

何やってるんだ？

「しつかりおし、男が情けないねえ」

「あいや我輩、不覚を取ったである。なんのこれきし、少しばかり気に当てられただけである。あいたたた……」

落ちたとき腰でも打ったのか、米二がジーンと体を震わせて腰に手を当てて座り込む。

「あらやだ、お年よりよねえ。あんたもそう思わないかい、人間にビビッてるなんて神様の威厳もありゃしない」

白猫がヴィータに振り向いて話題を振るが、何とも返答に困って、ああ、とだけ返す。

「言うに事欠いて言いたい放題であるな。米寿殿、どうか仲間には内密に頼むである」

お米粒が白猫に両手を合わせて頭を下げる。

「ふうん？ 美味しいお魚で手を打つわあ」

「我輩、ミズハシとはマブダチゆえ、魚なら生きがいいのが手に入るである」

「楽しみだわあ」

片目を器用に瞑ってみせる白猫。

エメラルドアイが宝石のように輝く。

なるほど普通の猫ではない。

そういえば見覚えがあるといえばあった。

海鳴のお社で会った猫ではないかと思う。

「あんた、前に会った？」

「米寿、よ」

すくつと背中を伸ばして彼女、米寿が問いに答える。

気位の高さが仕草によく現れていた。
猫らしいと言えば猫らしそうな性格を思わせた。
何だか話難い……。

「米寿さん、えつと……」

「話をするならあつちに行きましょう。ここは目立つわあ。あたしの人払いの結界の中だけどね。表で正堂堂白昼は困るわあ」

話しこんでたのあんたらじゃ、と突っ込むのは我慢して、ヴィー
タは米寿の後についていく。

建物の裏に回ると、いつの間にか空間が反転して建物の中にいた。
目の前の座敷には、黄色地に色とりどりの花模様が散りばめられ
た、わざと着崩した和服をまとった一人の美少女が胡坐をかいて、
肩にお米粒を乗せて座っていた。

手元には簪を持ってくると器用に回していた。
小さな顔に肩まで揃えた黒い髪にエメラルドアイはそのままに、
一〇代半ばの少女を思わせるが、妖艶さもまとっていたから年の頃
は不明とってよかった。

「ようこそ、あたしのお社へ。客なんてずいぶん久しぶりだねえ」

「えーと、米寿さんだよね？」

「他に誰がいるってんだい？ 化ける術の一つや二つで驚くんじゃ
ないよ」

「その姿が本体？」

「んー、違うけど？ この方が話しやすいだろう。女同士だしさあ」
「はあ……」

米寿が無造作に手を叩くと俺の足元に座布団が現れる。
二十枚ほど。

「うああ」

「ありゃ、出しすぎた」

今度はパチン、と指を鳴らすと座布団は消えて、俺は何故か普通に座布団の上に座ってた。

目の前では米寿が簪はどこにやったのか、今はキセルを吹かしている。

「さてと、名前なんだっけ？」

「て……。ヴィータ」

「見習い神様だったねえ、そういうの見るのも久しぶりだよ。神様はあっちからは滅多に出てこないしねえ。あんたをここに連れてきたのは他の神のことを教えるためさ」

「米寿さんも神様なんだな」

「さんはいらぬいよお、格式ばったの嫌いなんだ。こいつらは頭固いから手遅れだけどさ」

肩の上のお米粒を指先で弾き飛ばして米寿が俺を見る。

「んじゃ米寿」

「ほいヴィータ、ここ見てどう思う？」

「ここ？」

「あたしのお社さ、海鳴様のところからしたらちっぽけだろう？」

「えーと……」

どう答えていいかわからずに俺は建物の中を見回す。

天井は六角形で建物も六角の形をしている。

伝統的な日本建築で造りはしっかりしているが、年代的にそれなりの代物だった。

続き部屋などは存在せず、この一室のみで玄関口は小さく、開け

放たれた縁側から見える庭は緑に覆われ、花などは好き勝手に咲き誇っていた。

小さく竹を組んだ仕切りが境界線を分けていて、その向こうは竹林であり、細道には砂利が敷かれて先は曲がり角になっていて、その向こう側がどうなのかを窺い知ることとはできない。

一人が住まうには十分な広さだが、少しばかり寂しい静寂に包まれている。

「アハハ、辛気臭いだろ？ お社つてのはね、その神の神格に合わせた世界そのものなんだよ。あたしみたいな三級神だとこれが相場つて所だね。飲むかい？」

トクトクトク、ととっくりから杯に酒をそそぐ米寿。

いったいどこから取り出したものやらだが、これも取り寄せの能力なのだろう。

家具がほとんどないのも道理で、大体がそうして取り出したり放り込んでいるのではないかと推測する。

「未成年なんで……」

中身は大学生だが、今は小学生相当である。

酒の匂いさせて戻ったら先輩に大目玉を食らうことだろう。

「なんでえ、つまらないねえ」

「我輩、米寿殿のお酌に付き合おうである」

「よしきた」

お米粒の前に小さな杯が現れる。

それでも十分大皿なのだが、米二は注がれた酒をグイグイと飲み干していく。

米が酒を飲んでいゝ、というのも何ともいえないシユールさだ。
日本酒であるだけに。

「プハア〜 美味しい！ おかわり」

「ふう……。一人じゃお酒なんて飲めやしないうつてもんだよ」

「この神社は米寿のなのか？」

質問を思い切つてすることにした。

酔つ払われてからでは困る。

「ここねえ、別にあたしの持ち物じゃない。仮住まいさせてもらつてるけどね。あたしと違つて本物の土地神は本尊があるからね」

「土地神？」

そこでまた杯を飲み干す米寿。

「あたしは元々はぐれ神でね。海鳴様に拾われてもらったのさ。行き所のないはぐれ神は疫病神になるんだよ。まあなんだ、アヤカシがいるだろう？ あれに近くなるんだ。元が神だからね、ああなつちまうと色々と大変なんだよねえ」

「浄化つてので元に戻らないのか？」

「お被いのことかい？ 被つちまうとね、さすがの神も退散するけどさ、祟りが怖いわねえ」

「祟りはあ、怖いである！」

もう酔つ払つたのか、米寿の足元でお米粒がフラフラ踊つてペタンと寝転んでいびきをかき始めた。

「寝てるし……」

「こいつはほうつておき。土地神くらい力のあるのがはぐれになる

とね、ちよつとした念が土地に影響を与えちゃうんだよ。下手に追い詰めると穢れを撒き散らして、それが祟りになる。ちつとやそつとじゃこれは被えないからね。くわばらつてもんだよ」

グイグイと杯をまた飲み干す米寿。

すでに結構な量を飲んでいる。

度数はどれほどなのだろうか？

急性アルコール中毒にならなければいいが、神がアル中になるのかというどうでもいい疑問が浮かび上がる。

少し甘い酒の匂いが鼻先を刺激して、口中に少し唾が沸いた。

美味しい酒は匂いでわかる。

死んだ爺さんがそんなことを言っていたのを思い出していた。

晩酌を付き合う以前にもう亡くなっていたが、酒が好きな爺さんだった。

婆ちゃんは爺ちゃんと違って酒はほとんど飲まなかったっけ。

「あんた、土ぐもやつつけたろ？」

「ああ」

「お被いがきつちりできてれば妖気でできたアヤカシは完全に消える。けど元神だったらそうはいかないんだわあ。消すことはできない、だから封印するしかない。そうやってはぐれになつちまって封印された神つてのは海鳴でも何人かいるんだよね。何年か前に大洪水あつたら？ あれも祟り神の仕業さ。最後には人柱が身を投げて鎮まつたらしいけど、後味の悪いことだねえ……」

「人柱？」

嫌な言葉の響きだ。

洪水、何年か前にこの近辺を襲った洪水はずいぶんな被害を出したらしいが、それが起こったのは司が海鳴に来る前のことである。

目の前の米寿は眠そつな顔をして欠伸を試みせた。

「そう……。神に関係ある人間が鎮魂に身を沈めたんだ。水神だったからねえ、詳しいことはあたしは知らないねえ……」

フワアア、大口開けて寝転んで、空になったとっくりが転がった。そのとっくりを拾って張ってあるラベル？ ならぬお札を見ると「安眠竹清酒」と書いてあった。

酒の名前なのか、効果のことなのかはわからないが、目の前の米寿はやたらと眠そうである。

お米粒などは大の字で寝そべっている有様だ。

「ちよ、寝るのかよ……」

「フニヤ、ムニヤ……」

グデンと身を横たえて、猫の如くござの上に寝そべって思い切り欠伸をしている。

やがて規則正しい米寿の寝息と、お米粒のいびきが交互に響いて唱和していた。

それを眺めながらどうしたものかと迷いながら、寝転がったお米粒を拾い上げてあばら家を出る。

米寿の世界というこの空間は軽くもやが垂れ込め、竹林の向こうまで視界を真っ白に染め上げていた。

道を真っ直ぐ行けば出られるかな、と砂利の感触を踏みしめ、竹林沿いに歩き始めた。

光が見える方に突き進むと、神社裏の竹林に出た。

すぐ近くにお稲荷様の小さな祠が見えた。

一五話『ヴィータ レベル2！（基本性能修正）』

海鳴のお社

本日の神社周りの成果は三件ほどで、それぞれ絵馬に朱印を押して門の開通を済ませていた。

門のある神社の特徴は朱印スタンプがあり、そこそこ立派な竈銭箱がある場所である。

見当をつけてるのは二〇箇所ほどで全体の半分ほどだった。

門の見分け方は竈銭箱の上に手をかざせばその向こう側が透けて見えることだった。

当然ながら神様関係者か手形を持っていない限り見ることはできないらしい。

しかしなかなか人気がなく、ひっそりと建っているような場所は少ない。

門として有効活用するには人がいないことが前提なのだが、神社を管理する人達もいるわけで、それらを無視することはできない。

事情を話してはいそひそひですかどうぞご利用ください、という形にできないところが悩みの種だ。

利用するなら早朝か深夜が望ましい。

竈銭箱に片足突っ込んで姿を消す姿はあまり見られたくもない。

不審者もいいところだ。

そういうわけで、そんな利用に都合のいい門はなく、ビジネス街の中の神社が比較的人が少なかったのでタイミングを見はかり、思い切って竈銭箱に飛び込んだのだ。

それはさておいて

「なんかさ、レベル上がってるんだけど」

お社の大広間の一室で胡坐をかいて、ヴィータはかみさま手帳を振ってみせる。

片手で宙に立体ステータスを展開する。

このかみさま手帳は他人が見ることはできないが、視覚化することとその中身を見ることができるようになるのだ。

寝転がるとそれに合わせて展開したりもするので便利だ。

「おおレベルアップですな」

と、床で戯れていたお米粒達が一斉に寄ってくる。

慣れてみると不思議なもので、お米粒にも表情があってそれぞれの個性があるのだ。

狐目に拙者喋りの米一。

まん丸目の我輩に語尾が、であるの米二。

げじ眉四角目のそれがし、ござるの米三。

後の二人とはしばらく顔を合わせてないが、神様の仕事の手伝いをしてるらしい。

「2になってる、2に！」

俺が指差したステータスのレベルは弐、神様ポイントは一七と記されていた。

「めでたや、めでたや」「おめでたでござる」「赤飯炊くである」

「炊かんでいいわ！　つか、神様見習いつてどうしたら見習いじゃなくなるんだよ？」

「見習い終了の基準には、レベルが5に達すれば三級神試験を受けることになりました」

「合格すればレベル6に成長できでござる。6になれば能力の解放もあるでござる」

「三級神の試験ねえ、何するんだ？」

「神それぞれですな。神の特性にあった試験内容が課されますな」「ふーん」

画面を見ながら、ネクスト経験値がねえな、と気がつく。

RPG思考である。

これ作った神様はどこか抜けてるのかもしいない。

「なあ、ポイントいくつでレベルが上がるんだ？」

「100を区切りに上がっていきますなあ。ただ上がるたびに神様ポイントは入り難くなりますな。見習いの内は5になるまで普通に入ります」

「一度上がるとポイントは消滅して、超過分が神様ポイントになるでござる」

「そのあまったポイントで特殊能力を獲得できるである」

「それって100になったら溜まったポイントが消えてレベルが上がるのか。不便だな」

「上がらないようストップをかけられますが、留めたところでそれ以上のポイントが入っても消えてしまいますぞ」

やだ、何それ？　ピンはねかよ。

「99ポイントで留めたら、それ以上は消えちまうのか、なるほど、今17ポイントあるんだが……。どうやって特殊能力っての貰えるんだ？」

「能力、術式、スキルと兵装、これらをかみさまポイントで獲得して強化していくのである」

「能力は神本来が持つ力とは別の異なる力を得ることができません。空を飛べない者が飛べるようになったり、土の中、水中でも不自由なく行動できるようになったり、もう様々ですな」

「術式はまさに一つの技を使いこなす能力である。雷、衝撃、音波、火炎などはごく一部、我輩の探知能力や、米寿殿の変化も術式に含まれるのである」

「二つの違いは能力は受動的でパッシヴ、本人の意思一つで自由自在に発動できるでござる。後天的なものは少し訓練が必要でござるな。術式は威力と精度の概念があるでござる。術式は能動的なアクティブに使うという意志が必要である。つぎ込んだポイント分、威力を増すか、精度を増すか選択できるでござる」

「あー、何となくわかるような、わからないような……。スキルは？」

「スキルは神が持ちえない技術を獲得する項目ですな。いわば人の技というのが正しいですな」

「へ？ 神様も専門スキルくらい持つてるんじゃないのか？」

「もちろんですと、自らの技を人間に伝えた神も沢山あります。それを人間流にアレンジして技術が生まれたわけです。今の世の中に伝わる技の多くは神が伝えましたが、そのほとんどは元になった神のものではなくなっているわけです。ようは時代遅れなんですなあ」

「ふっん」

「人間の編み出したスキルは面白いと積極的に学ぶ神もありますな」

しかし大概の場合、人間が学ぶ技術で得られる結果を神は人知を越えた力でそれを為してしまうことが多いので、スキルを獲得することあまり興味を示さないのですな」

「神様の世界にや試験もテストもないからな。学ぶ必要がないってか」

「そういえばかりでもないのごさる」

「神様の世界で常識であつて、人間世界では常識ではない。そういう概念がスキルを重要視しない風潮になっているのである」

「どういふことよ？」

「神の世界には時間の概念がない。それゆえ神の時間は無限、歳をとらず成長しない。成長することがない、ということは学んで技能を得ることができないのですな。できないというよりしようとしたというのが正確ですな。理解はできても神が新しいスキルを得るには人間の世界に出て行かねばならない。人間の捉える世界の概念、時間を知らねばならぬ。これは大変面倒なこと。人の世に出ても神本来のスタイルを貫く頑固者もおるからの。そういうのはたいてい成長することがない。精神的な面での影響も強い」

「とはいっても、神の一族の中には自らの結界であるお社に時間の概念を取り入れている者達もいるであるよ。ゆっくりと老化しながら、人間のように子を生して次世代に伝えていく一族もおるである。この世界では神も人間と同じように学ぶ機会を持てるのである。中には人間を住まわせているところあるである」

「神様の世界も色々なんだな」

神が創り出した世界のそれぞれのルール。

今のところヴィータが知っているのは海鳴と米寿のお社だけだ。

他の神のところに入り出る機会くらいはあるかもしれない。

「人の世界で寿命を得て、人と同じ成長を望んだ神もおりますがの。そういつた神のほとんどは寿命が尽きて、やがて人の中に混じって

しまつてござる。この一例はヴィータ殿自身に当てはまるでござる」
「いろんな神がいるってことか……。俺もそうなのか」

婆ちゃんの顔が思い浮かぶ。

小さい頃から俺を悪いものから守ってくれようとしてたんだな。

「この国は八百万の神が集う地ですからな」

「それって昔から言うけど、今と昔で定数とか変わるんじゃないか？」

「それは知りませぬな。人口調査はここかれこれ五百年はやってないはずですが」

「意味ねえのなあ……」

「まま、拙者どもらは海鳴に根ざした神ゆえ他所のことはあまり興味ないので」

「それがしは美味い米が採れば最高でござるよ」

「お酒も美味いであるよ」

口々に海鳴名物やらお菓子の話題に花を咲かせるお米粒達。

すでにこつちから関心が離れているようで、俺はごろりと座布団に転がる。

それに合わせて画面が展開する。

情報が多すぎてどう手をつければいいのかわからない。

残るは兵装のグラーフアイゼンとバリアジャケットの話だが、これはまあ後でいいだろうと思う。

威力は先日のアヤカシとの対決で保障済みだ。

まず整理するためにレベルアップで何が変わったのかをピックアップしていきつう。

お名前：ヴィータ タイプ：戦神 かみさまポイント：17 レベル：2

ステータス

生命力：158 > 203 神力：24 > 36

(成長率：B) 力：25 > 30

(成長率：B) 強靭さ：20 > 24

(成長率：C) 器用度：15 > 16

(成長率：C) 素早さ：14 > 15

(成長率：D) 知力：10

(成長率：D) 心力：12

(成長率：D) 幸運度：5

能力

【神様】

【靈感】 (靈的感知 神気消費：0)

【飛行】 (飛行 神気消費：0)

【フェアテ】 (高機動飛行 パワーレベル1 神気消費：0.5)

【フォルムチェンジ】 (ハンマー、ラテーケン、ギガント選択。1ターン消費)

【武装再生】 (神気消費：1)

術式

【アイゼンゲホイル】 (ハンマー 閃光 パワー1 / 精度C 神気消費：0.5)

【ノーマル式ハンマー】 (ハンマー パワー5 / 精度A 近接 (殴威力) 神気消費：0)

【テートリヒ・シュラーク】 (ハンマー パワー7 / 精度B 近接 神気消費：3.5)

【ラテーケンハンマー】（ラテーケン パワー10 / 精度B 射撃
特殊兵装：カートリッジシステム1 + 神気消費：5
カートリッジシステムなし パワー8 / 精度B 神気消費：4）
【轟天爆砕ギガントシュラク】（ギガント パワー20 / 精度C
近接 特殊兵装：カートリッジシステム2 + 神気消費：10）

【フランメ・シュラク】（*未解放）パワー8（炎属性） / 精度
B 近接 特殊兵装：カートリッジシステム1 + 神気消費：4）
【シュワルベ・フリーゲン】（*未解放）パワー6（連弾4） / 精
度B 追尾射撃 神気消費：12）

【パンツァーシルト】（*未解放）ダメージ軽減 / パワー5（使い
捨て防御） / 精度C 神気消費：2・5）

【パンツァー・ヒンダーニス】（*未解放）パワー8（使い捨て防
御） / 精度C 攻撃不可 神気消費：3）

【ゲフェングニス・デア・マギー】（*未解放）束縛範囲檻 パワ
ー5 / 精度C 神気消費：5）

スキル（ヴィータとしてのの）

ハンマー：B

飛行制御：C

基本兵装

グラーフアイゼン

（武器：ハンマー カートリッジシステム未載 エネルギー変換効
率：10%）

神楽巫女式バリアジャケット

（強度：10）

打ち出の小槌

（特殊兵装 ギガント形態 + 妖気吸収MAX + 詔で出現 エネルギー
変換効率：200% 威力：計測不能）

「……」

まだわかんねえ単語がいくつかあって首を捻る。

カートリッジってなんだ？

未解放ってのも気になるな。

パワーが上がると神気の消費が増えていくというのは何となくわかった。

今の自分のレベルだとそうはいはいと術式を使っただけりもいられないようだ。

それに神力を使いすぎると病気になるったりするわけで、敵が出てこないうちはあまり使うわけにもいかない。

穢れ＝妖気として、その手のと戦ってれば神気の補填はどうにかなるはずだ。

問題はそれ以外だが、人間と戦うことにはならない、とは一概に言えなかった。

真霧　黒衣の退魔師は味方と言えるのだろうか？

寝転がりながら操作していた画面を閉じる。

今は奴のことを考えるのはやめよう。

成長率を見るとどうにも戦闘タイプというのがじっくり来るようで、タイプも戦神なので、ぶん殴って戦うのが主流だ。

どこの神様なのかまったく不明なんだが……。

今度図書館でじっくり調べてみようと思う。

レベルアップで生命力と神力が増えたのは正直嬉しい。

能力の底上げで戦いの幅が広がるからだ。

飛行制御をするのはかなり難しい。

飛行しての高速戦闘になった場合、位置把握に戸惑ったり、酔ってしまふ可能性も考えれば、どうにか対応できるようにしたい。

うん、これは課題一にしよう。

武器再生があるのは嬉しい。

一番気をつけるべきなのは相棒を無くしてしまうことだ。

アイゼンを手帳から閉まったり出したりはできるが、落としたり、紛失したら取り寄せとかの能力を持てばどうにかなりそうな気がしないでもない。

詳しくは後で訊いてみることにする。

次、バリアジャケット……。

巫女服なのはまあいい、が！ 何故、脇が見えているデザインなんだ？

意味不明だろ！

機能性エ……。

可愛くない、ことはない……。

可愛いのだが……。

俺の中でまだ答えが出せそうにない。

ちなみに強度10というのはどれほどの耐久力かというのと、たぶんで悪いが金属バットで殴った程度ではダメージすら受けられない程度の防御力だ。

どこまで強化できるのかわからないが、命を預ける防護服なのだから思い切ってバリアジャケット強化につき込んでもいい。

デザイン、変えられるのかな？

戦闘用の術式は結構豊富だ。

中でも防御用とか束縛系の技が使えるのなら解放しておきたいと

ころだ。

パンツァーシルトの未解放部分を選択すると【解放ポイント：30】と出た。

足りねえ……。

フランメ・シュラーク【解放ポイント：40】

シュワルベ・フリーゲン【解放ポイント：120】

ゲフェングニス・デア・マギー【解放ポイント：50】

パンツァー・ヒンダーニス【解放ポイント：40】

全部で2レベル分過多じゃねえか、と頭を抱える。

120って見習いじゃ覚えられないってことじゃねえか。

射撃で追尾する特性を考えればそのポイントの高さは納得できなくもない。

ある程度レベルを上げて、基本能力を底上げしてから解放していくのがよさそうだ。

今あっても神力が足りなさ過ぎて宝の持ち腐れだ。

起き上がったため息をつく。

どうにもあまり遊んでいる余裕が無いように思える。

能力にこだわれば足元をすくわれる。

レベルにこだわれば戦うだけのでくの坊になる。

便利系と兵装、術式の強化が無難に思えるが、能力や術式にかかるコストはピンきりで一つレベルを上げるのに5〜10ポイントは吹っ飛ぶようだ。

しかもレベル10以降のものはポイントが倍、15から三倍、20から四倍と手が出ない。

予め術式にこれだけのストックがあるヴィータの性能は高いといっつていい。

何せ戦いの素人がアヤカシをやったのだから。

あれか、カートリッジってのがあれば関係なくパワーアップできそうなんだが……。

「何やら迷っておるようじゃのお〜」

暢気な海鳴様の声が大広間に響いて、大きな扉の向こうからその姿を現した。

両肩にはお米粒二人が乗っていて、何故か踊っていた。

ピカリ、と派手に後光のフラッシュを炊いた後、トーンと海鳴様が飛んでヴィータの前に舞い降りる。

おっさんを俺はジト目で見上げる。

正直あまり邪魔されたくない気分だ。

「何だよおっさん、相手してる暇はねえぞ」

「これ、ヴィータ。お前さんに取って置きのパレゼントを用意してやったのに。その態度ではくれてやるのは惜しいのう……」

「いや、くれなんて言っておえし、お帰りになっても結構なんですけど?」

我ながらちよつと酷い、が、このおっさんにはこれくらいが丁度いい距離感なのである。

不遜とかさしておいて。

「そうか、仕方ない。せつかくのカートリッジ内臓なのに」

しみじみ呟いて背を向けるおっさん…もとい海鳴様。

「ちよ、おっさん、今なんて!?!」

「え、きこえない？ 謝罪の言葉が聴こえないのう……。わしも爺
じゃし、これはばらして魚の餌にするかの……」

「ぐ……ごべんなさい。あやまりますうう。それ捨てないでえええ」

飛び上がった海鳴様の肩をガツシリ掴むが引きずられるヴィータ
であった。

立ち止まり、振り返る海鳴様と目と目が合う。

そしてニコリと悪い笑みを浮かべた。

「ふ、やっぱり捨てよう」

「お願いします。海鳴様、どうか捨てないで！ プレゼント、あり
がたく頂戴します」

もうなりふり構ってられない。

五体投地、神のごとき速さで土下座する俺だった。

「ほっほっほー、そんなに言うならくれてやるうではないかー」

勝ち誇ったようにおっさんが高笑いしている。

なんとという上から目線、俺の中でおっさんへの殺意が50ポイン
トくらいアップした。

一六話 『実装 スズカカートリッジ!』

カートリッジをグラーファイゼンに装着すると鋼鉄のハンマーヘッドが機械的な動作と音を立てて元の位置に戻る。

手の平に軽い振動音が伝わる。

カートリッジ装着後のハンマーは平時と変わりなく大きな変化は見られなかった。

それを握り締めるヴィータ。

身にまとうのは肩がむき出しの巫女服、赤と白が空に映える。

「用意はいいか、アイゼン？」

Ja .

アイゼンからの返答を受けてヴィータは前方に視線を投げる。

今いるのはお社から少し離れた上空だ。

ベージュ色の空はどこまでも続いていて、対岸の向こう岸の草花の生えた境界線付近で淡く溶け込んでいたる。

眼下には巨大な建造物であるお社の赤い屋根屋根が見えていた。

少し離れた同高度の位置には海鳴様がいて、ヴィータの周囲にはお米粒達が浮かんでいる。

ヴィータに向かって海鳴様がくいくいと指で合図すると、俺は気合を入れてアイゼンを構えた。

全力でやれと事前に話している。

「カートリッジリロード」

Ja wo hl .

アイゼンの先端で違和感のある金属音が鳴って、中に装填された

カートリッジが起動するのが伝わってくる。
正常に起動しているようだ。

「グラーフアイゼン、ラテーケンフォーム！」
Be we g u n n g .
きとう

ラテーケン 黒鉄の鎚嘴に変化するアイゼン。
ヴィータの兵装の中でも強襲用の噴射機能を持った飛び道具であり、その破壊能力はカートリッジなしでも扱うことができるが、カートリッジを使用したラテーケンハンマーハンマーこそが真の姿であった。

「といっても使うのはこれで二回目、カートリッジ仕様は初めての経験になる。」

「ラテーケンハンマーあああー！」

振動の手ごたえが指から腕に伝わり、ラテーケンハンマーの強力なエネルギーとなって全身に伝わってくる。

ヴィータは体ごとラテーケンハンマーを振り回すように勢いをつけて打ち出す。

踏み出した空気の足場に振動波が走り、ヴィータを中心に空間を揺らして波紋のように広がった。

瞬間、ハンマーヘッドから打ち出された鋼鉄の弾頭が真直線に海鳴様に向かって伸びていく。

かわすのか、打ち払うのか

否、老人は動くことなく片手を差し出し、その破壊力のある一撃を受け止めていた。

あろうことか手の平でだ。

そしてその手に触れることなくわずか数センチの余裕を持って、不可視の力で鋼鉄の暴力を受け流していた。

回転しながら空気を燃やして高熱を放つ鉄球、差し出した手、その指先を結んで爪弾く動作をすると、勢いを殺さないままハンマーを弾いて見せていた。

そのままヴィータに向かってラテーケンハンマーが打ち返されてくる。

「ゲっ、うわあああ!!」

宙を蹴り、慌てて機動回避するが、正確に戻ってきたハンマーを鼻先ぎりぎりでかわしたものの飛行制御に失敗して落下していた。

湖面に落ちる前に体勢を立て直し、上空の海鳴様を睨みつける。

水面上に小さな波紋を広げながら体勢を立て直す。

でたらめにもほどがある。

ラテーケンハンマーの威力もだが、それを指先一本で弾き返す神もとんでもない。

あんなものを喰らえば二度と人目に見せられぬ顔になるところで、背筋を冷たいものが伝わる。

改めて自分が手にした力の強さを実感していた。

それにしてもあれを片手一本、いや指先一つで返しやがった。

しかもカートリッジを使ってパワーアップしたラテーケンハンマーをである。

威力の程はよくわからないが、カートリッジなしで土ぐもにかなりのダメージを与えた攻撃だ。

使った感触からいって速度もパワーもあれとは比べ物にならない一撃であったはずだ。

湖面から浮かび上がって一気に元の位置まで飛び上がっていた。

「ほっほー、どうした。肩慣らしにもならぬぞ?」

「おっさんの肩慣らしに付き合ってるわけじゃねー」

小声で文句を言う。

先程のラテーケン返してバラバラになっていたお米粒が集まってくる。

今は五人一緒だ。

「あれは反射の能力ですな」「カウンター技でござる」「久々の妙技、カツコいいであるな」

「ちゃんと起動したマロな」「わらわ達が苦労した甲斐があるもの」

お米粒達が耳元で好き勝手に喋り始める。

五人揃えばかしましく、ヴィータは手を振って追い払った。

文句を言ってるようだが聴こえない振りをする。

反射の能力？

打ち出した術を跳ね返したわけか。

カートリッジに残った弾数は2だ。

カートリッジに3つ、まだ開発段階らしく、拡張の余地はあるらしいが、パワーアップしたはずのアイゼンの攻撃を難なく防がれたことがちよつとショックだった。

神様の世界ってのはこんなのがごろごろしてるわけか。

まあ、この人が別格なのはわかる。

わかるが…普段の姿を見ればまったく強そうになど見えないのだ。

「じゃあ、次はこつちから行くぞ」

「ちよ、訊いてねえっ!!」

来る! どんな攻撃が!?

とっさに身構えるが、海鳴様を取り出したものを見てこけそうに

なる。

瞬速に打ち出されたのは弾丸、狙いは正確、しかしその程度なら余裕を持って対処することができる。

小さく早いのでアイゼンの先端を打ちつけるように弾き飛ばしていた。

金属音がこだましてハンマーを構えなおす。

「お防いだの」

「おいおっさん、何だよそれは？」

「はっはー、茶目っ気じゃよ」

「茶目っ気って……」

呆れるヴィータにカッカカと笑って、海鳴様は手に持った銃を掲げて見せた。

「わしのコレクションじゃ、かつくいいであろう？」

その手に握られているのはS & W M 29、44マグナム リボルバー式の拳銃であった。

一目でわかったのは昔モデルガンに凝ってた時期があったからだ。44マグナムといえばダーティハリー・シリーズで、クリント・イーストウッドは親父も好きだったんだよな。

にしても神様が拳銃かよ……。

海鳴様ってかなり人間界好きみたいだな。

「この程度なら弾かんでもバリアジャケットで大概は防げるくらいかのお」

「マジか……」

「打ち所でちつと痛いかもしれんがのう。この程度では死なん」

海鳴様の言葉に少し驚いた。

金属バット訂正、拳銃程度なら防げる防御力を持っているということか、と俺はヒラヒラ風を受けて舞う巫女服を眺める。

薄いが寒さなどは感じない。

バリアジャケットには温度調節の機能もついているようだ。

ハハ、どう見てもただのコスプレ衣装です。

「威力はパワーレベル3に相当すると言っておこうかの」

今のが3つてことはこの程度の攻撃はこっちの世界じゃ普通以下のレベルってことか……。

実際弾くのは簡単だった。

簡単といってもヴィータの異常な動体視力と肉体能力に依存したものだっただが。

俺がアイゼンで普通に殴った場合の威力はパワー5相当と書いてあるから、どんだけパワーゲームなんだと突っ込みたくなる。

マグナムは拳銃の中ではかなり威力があるほうだと記憶している。体力とがガタイがないと反動で体が吹っ飛ぶほどだ。

拳銃など撃ったことないが、映画で一般人が44マグナムを打つシーンで仰け反って倒れる場面があったから、相当の負担が腕にかかるのだろうということは知っていた。

人間が喰らえば致命傷間違いなし、下手すると一発で死んでしまうのだが、こっちじゃ豆鉄砲扱い。

「次行くぞ」

「次って……」

海鳴様の手には散弾銃が握られていた。

……おい、全然洒落にならないぞ。

44マグナムが可愛く見えるレベルである。

しかし容赦なく発射される弾丸、生命の危機を感じて、俺はアイゼンを振るう。

散弾の不規則な軌道は不意を撃たれば回避するのは難しい。撃ち落すのも同じだが、今は正面からなので力任せに迎え撃っていた。

ハンマーに神気が流し込まれ、銃弾を叩き潰す。

全弾撃ちつくすまでもはや作業となったその動作を繰り返していた。

エネルギーの余波を繰り返して、ハンマーヘッドの先端が湯気を立ててシューシュー音を立てる。

かなり熱くなっている。

海鳴様が銃に弾丸を再装填する動作が見えて、ヴィータは蒼白になつて、フェアアーテで距離を取る。

銃弾は速い、速いが目で追えないこともない。

だが至近距離は心臓に悪い。

今度は銃弾は撃ち落すまでもなく外れた。

追撃はない。

ヴィータはゼエゼエ、ハアハア、と肩で息を吐き出していた。

ぐつと疲れたのは神気を放出したせいもあるのだろう。

これ以上は体調不良になりかねない。

現代火器を相手にするのは金輪際にしてほしい。

「バカー、そんなん喰らつたらスプラッターだろ！」

「えー、平気じゃろ？」

んなわけねーよ！

カッパする頭、銃を何の躊躇いもなくぶつ放した神経に俺の常識が焼き切れそうだ。

「まあ、今のがうちの門番が振るった棍棒くらいの一撃に相当するかのう。パワー6というところかの」
「門番……」

海鳴のお社に詰めている鬼の門番が持つてる棍棒を思い浮かべる。
あんなのまともには喰らったらマジでミンチでスプラッターである。

「大体わかったろうが、お前さんの性能はそこらの神よりよほど高いものがある」

「へ？ 俺見習いじゃね？」

「神もピンきりでな。見た目など当てにならぬものよ」
「確かに……」

このおっさん、俺の攻撃受けたのに何のダメージも受けていない。
パワープレイにも程がある。
指先一本だぞ、信じられるか？

「で、話を変えるがカートリッジはどうだ？ 不具合は」

「一回使っただけだからわからねえ、動作はするみたいだけど……」
「ハハー、よかよか」

「よかよかじゃねえよ、お米粒使ってアレ作ってたってことか？」
「うむ、カートリッジシステム、名付けてスズカカートリッジじゃあー！」

やだおっさん、キラキラした顔でドヤ顔しないでください、うっとうしいから。

「すずかかーとりっじい？」

俺は首を傾げて復唱する。

鈴鹿サーキット、とか海鳴と関係ない場所を思い浮かべる。その名前に何か意味があるのか考えてもよくわからない。考えても無駄だなと思いを軽くシフトする。

「作ったのはわしの孫娘じゃ」

「孫……。いたのか。やっぱり神様なのか」

「いや」

「おい？」

神様の孫なら神様じゃねえのかよ？

そんな疑問もどこ吹く風、眼の前の海鳴様は自慢げに孫の開発能力を褒めちぎっている。

めんどくさい帰ろうかな。

「はあ……。分身？ 人間界にもう一人海鳴様がいると？」

「正確にはわしの意味を離れとるがな。ずいぶん昔に分離したが、今でもたまにあっちに入ることはあるのう」

「この体と似たようなもんか」

俺の 天道司の本当の肉体があるのは海鳴にある病院だ。

植物状態で神様として修行して、その見返りに元に戻してもらうのが目的である。

そういう約束、もとい、契約をしているはずだ、とクレバーになった頭で思考する。

今はまだ見習いで、本物の神様を目指している。

「ちつと違うが、まあ似たようなものだな」
「何だよそれ？」

問いかけるが海鳴様は好々爺顔に戻って受け流す。
食えないおっさんだ。
何を考えているのだろうか？

表情から読み取るのを諦めて、俺は素直にカートリッジのお礼を述べて帰ることにした。

ついでに取り寄せの能力といくつかの能力について質問をする。
そしてお社の転送装置のある部屋に向かった。

海鳴様の前を辞して、ヴィータとお米粒が長く広い板張りの回廊を歩いていた。

米四と米五はあちらに残り、引き続き仕事をするのだという。

この廊下の天井は高く、ビル数階の高さがあり、適度の距離を保って白いふわふわ揺れる明かりが漂っているのが見える。

「まったく、相変わらずだっ広い建物だな……」

「どのような客人が来るかわかりませんが、山のようないだら法師が来ると通路も埋まりますぞ？」

「だ、だいだら？ 巨人なのか……」

どんな神様だっけだいだら法師って……。

とにかくでかい大男が脳裏に思い浮かぶ。

神様の世界は閉鎖的なようにも見えるがこのお社には一定量の神様がやってくるようだ。

この地域一体の土地神も挨拶に来るといふから、一級神ってのは偉いんだな、と漠然ながらも感じていた。

ため口の自分はかなり常識外れのはずだが、海鳴様も誰も咎めないで、他の神に会ったときは少し注意して話しかけようと決めて

いた。

それならお前、海鳴様に敬意払えよ、と自分自身に突っ込むのだが、初めての出会いが最悪なので、なかなか素直にそういう気持ちになれないのである。

おそらく、自分のような存在を許す海鳴様がすごく寛容なのである、と天道司としての常識で考えていた。

転送装置から先輩の家に近い神社を選択して転移する。

ヴィータの肉体に戻った途端に冷たい空気が頬を叩いて、周囲は真っ暗の境内に姿を現していた。

恐る恐る周りを見回して、特に誰もこちらに注意を払っていないのを確認する。

パープウとラッパを鳴らす音がして、豆腐売りの車が石段の下に停まっているのが見えた。

ジャンパーに手を突っ込んで、軽く身を振るわせる。

道路に出て歩き出し、親子連れとすれ違って思わず足を止めていた。

少年が銀色のボウルを抱えて母親の後に続く。

年の頃は幼稚園児より上くらいだろうか、立ち止まって眺めていたヴィータと一瞬だけ目を合わせて通り過ぎていった。

その親子の背中を見送って、ヴィータは自らの背中を丸めて歩き出していた。

『司、お豆腐だよ』

『うん、お母さん』

『お豆腐は冷や冷やつるつる、別嬪さんだけど、司が選んだ豆腐は

特別に美味しいわあ』

記憶の中でそう言って笑った母の顔が今でもこうして思い浮かぶ。
あの笑顔はもう二度と見られないのだろうか？

今では皺が増えて、笑うとくつきりと浮かぶようになった皺の群れも、俺の記憶の中ではいつまでも若々しい母さんの顔のままだ。
心が吹いた風と共に寒くなる。

早く暖かい家に、誰かが待っている部屋に帰りたかった。

一七話 『高町家 家族の情景』

高町家

「ご迷惑をおかけしました」

玄関で一礼、用意していた言葉を告げてヴィータは顔を上げる。
お昼前に高町家を訪れた仲井吾郎とヴィータを出迎えたのは高町家の女性達だった。

「ヴィータちゃん、もう体の具合は大丈夫？」

「はい」

高町桃子の問いかけに答えると、眼鏡をかけた少女とサイドテールの少女が進み出て、ヴィータの手を取っていた。

「こんにちはあ」「こんにちはわ、ヴィータちゃん」

「こ、こんにちはわ」

交互に挨拶したのは高町美由希と高町なのはの姉妹だった。

あまり似ていないが家庭の事情があるかもしれないので黙っておく。

美由希と母親である桃子に容姿的な共通点はあまり見られない。

顕著に引き継いでいるのは末妹のなのはだ。

桃子と並べば人目で親子とわかる。

「えっと……」

ヴィータは口ごもるが、桃子が仲井に顔を向けて、お母さんは仲

井さんとお話があるから、あなた達は奥に行つてなさい、と笑顔を崩さずに向けると、二人ははいと返事をしてヴィータの袖を引っ張った。

「こつち、こつち」

「ねえ、なんかゲームしましょうよ」

「ああ、うん……」

振り返ると桃子の背中と照れ笑いする仲井が見えるが、引っ張られて居間に入ると話し声も聴こえなくなった。

「ねえねえ、ヴィータちゃんってイタリア人なの？」

なのはの問いかけは予想通りのものだった。

「えと、まあね……」

ヴィータ・ヴィヴィアーニ、それが今の俺の名前だ。偽造ではなく借り物だが、ここではそれ以外に身元を示すものはない。

「名前からしてイタリア人だよねえ。ヴィータ、VITAはイタリア語で生命、人生って意味があるもの」

「へー、すっごーい」

何がすごいのか不明だが、なのはが感心する。

すいません、俺も初めて知りました。

美由希ちゃんか、高校生は甘く見れないし頭もよさそうだ。

適当なごまかしをすればたちまち見抜かれそうだった。

「でもさ、ヴィヴィアーニって姓でヴィータでしょ。V I V I V I
って狙って名前付けたのかな？」

「V I V I V I！」

美由希がそれを指摘するとなのはが指をVの字にしてちよきちよ
きと鉄のように動かした。

「えーと、そ、そうかも」

「面白い。うん、ビビビチャンって呼んでいい？」

「それはちよつと……」

断固断る！ そのネーミング。

あれかあれなのか？ ビビビのヴィータとか、どこのネズミ小僧
だよ！

幸い、名前にはそれ以上突っ込まれることはなかった。

「その服、恭也お兄ちゃんの服だよねー」

「あ、それなつかしー、もう五年くらい着てなかったやつだよ。中
学生になって急に背が伸びて、それで着なくなったんだよね。まだ
あつたんだ」

なのはがヴィータの服に気がついて、美由希がジャンパーをしげ
しげと眺めて言った。

その恭也の姿は高町家にはいなかった。

外出しているようだ。

「その、冬服が足りなくて借りたんだよ」

「んー、それでここ来た時革ジャン着てたの？ あれ仲井さんのだ
よね？ おっきいから何でかなって思ったんだ」

美由希がヴィータの頭のとっぺんから爪先までじろじろ見る。
サイズを測っているようだった。
それ以上は勘弁してください美由希さん。

「えーと……、そういうこと」

嘘をつくことになるが仕方がない。

存在そのものが現実を裏切っているのだ。

毒を喰らわば皿まで、身から出た嘘はすべて飲み込むしかない。

「ねえねえ、カードゲームがいい？ それともボードゲーム？ イタリアの子は何で遊ぶの？」
「サッカーとか？」

美由希の問いにすぐに思いつかず、イタリアならサッカーだろう、
という思い込みでそう答えていた。

「女の子もサッカーするんだあ」
「さすがセリエAだねえ」

美由希となのはが顔を見合わせる。

いやセリエは関係ねえ、と俺はごまかしながら頬をかく。

あまりイタリアの話さされるのも困るな、別の話題で気をそらす
う。

「ま、まあね。ゲーム、ゲームしようよ」

「ジューズとっってくる。なのはは準備して、ヴィータちゃんは適当
にくつろいでてね」

「はい」

「うん、何がいいかなあ？」

「なのはちゃんに任せた」

数分後、居間のソファに座って少女三人がUNOを始めていた。ガラステーブルにはオレンジジュースのコップが三つ、汗をかいでコースターを濡らしていた。

「うわー負けたー」

美由希の声が居間に響いて、思い切りソファに仰け反った。

あれから三〇分あまり、集中していたせいか時間が経つのを忘れていた。

桃子さんと先輩が戻る気配はない。

何を話しているのだろうか？

「じゃあ、次はねえ……」

そうして次のゲームが始まる。

なのはが選んだのは人生ゲームだった。

しばらくして

「お腹減ったなあ。ねえヴィータちゃん、お昼ご飯食べてくよね？」

「え？ わからない……」

高町家に来訪前に、お昼をどうするとは言っていなかった。

外食するとも言わなかったなので、高町家で食事する可能性があると思っただが、改めて言われるとかなりお腹が減っていた。

「確か病院に行く用事があるんだって言ってたよねえ？」

なのはが確認するように問う。

「うん」

病院に行くのは俺と先輩の二人でだ。

今日は高町家に寄った後に俺の体がある病院に向かうはずだったのだが、当の先輩はどうしているのか姿を現さない。

重要な話かもしれない。

身元不明の少女が実はいところです、というのがそのまま通じるわけもなく、高町夫妻はヴィータの素性がまったくわからないことを知っているのではないだろうか？

先輩はそのことを口には出さないが、高町家の娘達がヴィータを仲井のいところであると認識しているということは、高町夫妻との間で話し合いは済んでいるのだろう。

「お母さん達遅いね。先に食べちゃおうかなあ」

「駄目だよお姉ちゃん、今日はみんなでご飯食べるんだから」

「はいはい、お腹減ったなあ……」

お腹をさする美由希。

それに刺激されたのかヴィータのお腹もギュウツと鳴っていた。

「お腹鳴ったあ〜」

「アハハハハ」

美由希がヴィータを指差して笑い出す。

恥ずかしさに顔面に血が集まるのを感じる。

「ヴィータちゃん赤くなつた。かわいい〜」

背中から美由希に抱きつかれ、お姉ちゃんずるい、と言つたのはまで抱きついてきて、三人で押し競饅頭状態である。

ちよ、む、胸当たつてる……。

高校生、発展途上とはいえ高校生だ。

すでに十分に育成された美由希の身体からは女のおいというものが漂ってくる。

それを感じ取つたのはヴィータの嗅覚なのか、天道司としての男の本能なのかわからないが、未だ天道司は女の経験がない。

過剰に密着され、肌に伝わってくる美由希の体温を熱く感じていた。

気恥ずかしさは簡単に沸点を越えて、ますます頭に血が上つていた。

アレ？

プシュウ、とあっさり限界を超えてヴィータは伸びてしまった。

「ヴィータちゃん、しっかりして！」

「大変、おかあさん！」

気がつけば、ソファの上に寝かされていた。

すぐ側にはなののがいて、横に顔を向けると目が合つて、にっこり笑つて見せるので俺も笑みに見えるよう笑つた。

情けなさ過ぎるだる常識的に。

「ビックリしちゃつた。やっぱり風邪が治ってないんだね。無理しちゃ駄目だよ」

思い切り勘違いしてるようだが真相は黙っておくことにした。

俺にはほとりがいるのに、美由希のオツパイに惑わされてしまった。

激しく自己嫌悪だ。

そういえばほとりはどこにいるのだろうか？

そう考えながら、漂ってきた匂いに俺の腹がまた鳴った。

「うあ……」

「フフ、もうすぐお昼ご飯できるよ。待っててね」

「うん」

台所から談笑する男の声が響いてくる。

高町士郎と仲井先輩の二人だろう。

シューシュー音を立てる鍋、キッチンに桃子と美由希の背中が見える。

ソファから身を起こし、ボーっとしながらそれを眺めていた。

「ほとりお姉ちゃんとはまだ会ってないよね？」

「え？」

「ヴィータちゃんをみてくれたお姉さんだよ。うちに下宿してるんだ。あとお兄ちゃんもいるけど、今お友達の家に行ってるんだ」

「そうなんだ。お兄さんにお姉さんがいていいね」

「うん！ ヴィータちゃんは？」

「お……。あたしは一人っ子だよ」

俺と言いそうになり言い直す。

厄介になる手前、喋り方一つで目立つのも不味いと、一人称を俺からあたしに変えていた。

なかなか地は直らないが、女の姿である以上、歳相応の女の子らしい言葉使いを意識していた。

「ふうん、そうなんだ」

なのはが言葉を続けようとすると美由希がキッチンから居間に姿を現して声をかける。

「なのはー、ご飯できたよ。ヴィータちゃん大丈夫？」

申し訳なさそうな顔で、エプロン姿の美由希がソファに座るヴィータに顔を向けていた。

「えと、平気です……。立ちくらみしただけ」

「そっか、無理しないでね。食べれそう？」

「うん、その、ペコペコかな……」

「アハ、いっぱい食べてっつてね」

「わたし、ほとりさん呼んでくるねー」

なのはが居間から廊下へ、階段を上がっていく音が聞こえた。

「さ、座って座って、ゲストさんご招待ー」

美由希に肩を押されて高町家の食卓へ。

士郎と桃子、仲井が正面に、美由希が左に座り、ヴィータは真ん中の席に座らせられていた。

「ど、どうも」

軽く頭を下げると士郎が口を開いた。

「今日は来てくれてありがとう。ご馳走ってほどじゃないけど、沢山食べてってくれると嬉しいな」

「ヴィータちゃん、嫌いのものある？」

横から桃子さん。

「ないです。特に嫌いなものは……」

と、食卓の上の皿の上の料理を見やる。

「ご馳走です十分に……」

大皿の上には切り分けたミートローフと飾り付けの青い野菜が目映えて楽しませ、コンソメのスープが入った鍋からは湯気が漂い鼻孔からお腹を刺激して、無意識の内に唾が口の中に溜まる。

久しぶりの家庭料理は食欲を沸き立たせていた。

先輩の作る料理も悪くはないのだが、男の料理でどこか繊細さに欠けるところがあった。

生活の中の潤いを感じさせてくれる家庭料理は、いわば憧れの領域にまでなっていた。

手造りの肉じゃがが好きで、作れる人を尊敬してやまない司であったから、目の前にあるのは夢にまで見そうな食卓であった。

そこにほつりを連れたなのはが姿を現した。

彼女だ。

ガタリ、と手に持ったフォークをテーブルに落として、慌てて苦笑いに変える。

落ち着くんだ、俺。

「あ、こんにちわ……。ヴィータちゃんだっけ？ 体はもういいの？」

「はい……」

ほとりの問いかけ、彼女は赤いセーターにジーンズという格好で

右の角の席に座っている。

「この間は突然いなくなったから心配したんだよ？」

「ごめんなさい……」

背を丸めてうつむいて答える。

どんな顔をすればいいのだろうか？

「あ、えつと、ちゃんと顔を見せてくれたから安心しました。自己紹介、私まだだよ。水無ひとりです。大学二年生です」

知ってます、とは言えない。

彼女と俺はこれが初対面なのだ。

泣きたい気分だ。

俺は彼女を知ってるのに、彼女は俺を俺として認識してくれないのだ。

「ヴィータ…です」

「えへへ、よろしくね」

口元に微笑を浮かべてほとりがコップの水を一口、口に含んだ。

なのは俺の右隣で、さっそく皿にローストビーフを取り分けてみんなに配分していく。

配膳も完了し、家長である土郎がいただきます、と告げると、みんながいただきます、と一斉に食事を開始する。

一度食べ始めると終始無言で、目の前の料理を順番に腹に詰め込んでいく。

すでに胃袋は待たされて、ハリーハリー！ 状態だったので、ノンストップだ。

桃子さんと目が合って、おかわりいっぱいあるからね、と言われ

て急ぐこともないと、ゆつくりと味わうように食べることにした。

こんな機会はそうもないだろう。

仲井先輩は土郎さんと釣りの話を始めて、去年取り逃した大物の話を始めていた。

その魚、俺が一度釣り上げて逃げたのを先輩が釣ったんじゃないかたっけ、と突っ込みたいのを押さえ、なのはが学校の友達の話をするので、それに耳を傾ける振りをする。

どうやらなのはの友達は技術肌の天才少女に超お金持ちの女の子らしく、アリサちゃんがねえずかちゃんと…と続けるなのはの言葉は頭に入らず聞き流していた。

この席で喋らないでいるのは俺とほとりだけだった。

彼女は自分から話題を振るタイプなので、どうしたのかと観察していた。

どこことなく元気がない気がした。

ゴクリ、と咀嚼したものを飲み下す。

「ほとりさん食欲ないの？」

美由希が尋ねて、ほとりは首を振ってみせる。

「あの、ごめんなさい。ちょっと考え事してたものだから。今はあまり入らないみたい。後でいただきます」

申し訳なさそうに頭を下げて席を立つてしまう。

その背中を見つめながら、何もできない自分が齒痒かった。

なのはがお姉さん、大学の課題が残ってるんだって、とフオロ―すると、美由希もそうそうと頷いた。

どうした、悩み事か？

本来の天道司ならばそう声をかける。
だが今の俺は天道司ではない。
彼女との間に積み重ねたものなどなく、ほんのわずかの間の一方的な関係でしかなかった。

食事を終えて、高町家の玄関に立つヴィータと仲井。
二人を見送って、高町家の長男を除く家族が並んでいた。

家族の情景　目の前にあるもの。

今の俺が望んでも得られないもの。
階段を見上げるがほとりの姿はなかった。
諦めてため息をつく。

「ご馳走様でした。それじゃ、これで」

と頭を下げる先輩に合わせて俺も頭を下げ、手を振ったのはと美由希に片手を上げて小さく振り返す。

後ろ髪を引かれる思いで高町家を辞すと、暖かい家の中と違って、外の凍りつくような空気に体を震わせていた。

見上げた空は重く灰色に曇っていた。
乗り込んだ車が走り出し、高町家はあっという間に遠ざかっていった。

一八話『羅刹変生』

前話・同刻

尖塔　　そう見えたのは電波塔の先端であつた。

一つの影が塔に重なるように立ち、眼下の白く染まり始めた大地を見下ろしていた。

それは人間　　否、漆黒の魔人だつた。

無個性な存在を表す黒い帽子に黒いコート、そしてブーツまでが黒であつた。

空からは白い雪が舞い降りて大地を白く染め上げていく。吹雪くような雪に煙る視界に男は細い目を見開く。

男が吐き出すは鬼気の塊。

冬の冷たい風を受けても微動だにせず、雪が風になびくコートに触れる前に蒸発していく。

見つめる一点は凍りつく一歩手前の貯水池の一角だつた。

その時異常が起こる。

水面がユラリユラリと歪んで、その空間の乱れと吹き出した力の奔流によって水は熱を帯び、紫色の熱い蒸気を吹き出すと、その中心点は厚い蒸気の雲に覆われていた。

現世では滅多に見られないレベルの濃度の高い妖気が蒸気となつて、男が立つ場所にまで届いていた。

龍脈より吹き出した穢れ、吹き溜まりが本格的に活動を開始したのだ。

人であれば、その濃度で意識を保つことすら難しいはずの妖気も、男からすればそよ風に等しかった。

妖気と鬼気、禍々しさはどちらが上か。

それらはぶつかり、弾けあい、男を飲み込もうとする妖気はついには左右に分かれて割れた。

男の視線はただ一点、貯水池に向けられたままだ。

爆素となれ霧よ

男の口から力ある言葉が紡がれ、その全身より流れ出し、物質化した霧が池の周辺を取り巻いていく。

それは漂いながら拡散し池の周囲を覆い尽くす。

霧は触手のように触れたものすべて、具現化しようとするもの達の姿を捕らえていた。

それは小さく、大きく、大小さまざまな角の生えた存在だった。

皮膚の色は毒々しく、色を映さない黒い眼を持ち、びちよりびちより、とぬめるような音をさせながら池の中から次々に現れていた。

鬼

毒々しい色合いの光沢を放ち、腐臭を発する皮膚を持つ存在であった。

その数、およそ目測だけで一〇〇を越えていた。

穢れより生み出されるアヤカシもこれほどの規模は稀だ。

百鬼夜行　それらの群れはじきに獲物を求めて進軍を始めることだろう。

即ち人間を食料を求めて獣の群れは動き出す。

生まれたばかりのそれは新鮮な肉を求める。

通り過ぎた後には草木一つ残らぬ餓鬼の群れ。

未だ存在を確定せず、人を食らうことで存在を確定させるアヤカシの胎児達だった。

生み出したのは人の思念、人が人を食らう魔物を生み出すのである。

皮肉と矛盾に満ちた世界の落とし子は醜悪で不潔だった。

その乱杭歯は人の赤子くらい頭ごと飲み込んでしまふことだろう。

尖塔に立つ魔人が不意に腕を突き出し、眼下の鬼を睨みすえる。

来来来っ！！ オン！

五星を中心に描かれた紙が男の手に握られている。

複雑な術式の文字が絵のように描かれたそれは式を打つ術札であった。

術者がアレンジし、異なる術式を組み込んだそれは式譜と呼ばれる。

式譜を両手に複数持ち、男がそれを眼下の池に向かって投げつけた。

すると式譜は紙形からカラスのような生き物に変じ、具現化した小鬼達の四方を取り囲んで一斉に踊る炎へと姿を変え、目標めがけて投下していく。

爆っ！！

男より生み出されし霧が爆素であるならば、放たれし式譜は火素そのものであった。

引火と共に爆炎が舞い上がり、池を含めた広範囲を赤そのものに染め上げた。

瞬時に焼き尽くされる小鬼の群れ。

だが炎はそのすべてを飲み込み焼き尽くしたわけではなかった。

その爆発と炎の直撃を受けなかった個体、生命力の強いその肉体は炭化した端から再生を始め、にごった水が患部から吹き出して緑色の粘膜で覆った。

異常なほどの再生力は並のアヤカシでは持ちえぬ、尋常ならぬ能

力であった。

累々と小鬼の屍骸が積み重なる中、穢れた匂いを発する仲間達の遺骸を我先に襲っては食いちぎり、その突き出た腹に収めていく。中には生きているもの同士で食らい合いを始めていた。

悪鬼どもの飽きぬ食欲は留まるところを知らない。人には理解しがたい生々しく凄惨な惨状が繰り広げられる。

鬼の首が跳んだ。

その首に食らいつく餓鬼の胸がさらに両断される。

そこを中心に突如現れた男。

仲間を喰らいながら、鬼達は新たに現れた獲物に襲い掛かかっていった。

「はっ」

黒衣の男が酷薄な顔に笑みを貼り付ける。

邪悪といつてもよいほどの歓喜に満ちた笑みに変えると、ヒュッと口先で叫んでいた。

異常すぎる周囲の光景。

それを上回る鬼気を撒き散らす異様な男がそこに立っていた。襲ってくる鬼に対し、何の構えさえ取らぬ不敵さ。

否、恐怖のあまり動けないのか

動くことを禁ずっ！！

男の唇が動き一言、呪を帯びた言霊が解き放たれた。それは禁術なれば、人が扱うことを禁じられた術法 言霊の法であった。

男の周囲で襲いかかろうとした鬼達が一斉に動きを止める。

いかなる原理か、そこだけ、まるで時が止まったかのような錯覚を思わせた。

その刹那に魔霧が形を得て、見えない霧の刃が二〇を数える鬼の胴体を断ち割り、バラバラに切り刻んでいた。

暴風の如くそれは吹き荒れて、千切れた四肢と胴体だったものの血の雨が大量に大地に振りそそいだ。

男は血一つ浴びていない。

おぞましい臭気の中で狂気に満ちた笑みと鬼気を振りまきながら地を駆け抜けていた。

その先には生き残った鬼が互いを喰らい合い、さらに大きく成長を遂げていた。

「蟲毒か……」

その異常な成長性と回復力に黒衣の男が独白する。

蟲毒 それは中国を起源とする一つの呪いの大系である。

成長した鬼はぶくぶくと肥え太り、次から次へと屠った仲間の死体を貪るさまは醜く、見ることさえ憚られるような有様だ。

まともな神経の持ち主が見れば深くトラウマを刻み付けられることだろう。

否、この光景を見れば正気を保つことさえも難しいかもしれない。が、黒衣の男は意にも介さず、冷笑をはりつけたまま巨体になった鬼の心臓を見えない刃で穿ち、穴を開け、さしもの化け物の再生力でさえ追いつかぬ速さでその肉体を破壊していく。

胴に心臓に頭に腕に穴を穿たれ、垂れ流す血は臭気を撒き散らし、大地を毒で染めた。

その穴に魔霧を侵入させると、男は一声発してその肉体を爆散させていた。

飛び散った肉小片目掛けて鬼の群れが殺到する。

おびき寄せる餌は鬼自身の肉だ。

焼き焦げ飛び散った肉を奪い合う、動きの鈍い鬼の巨体同士がぶつかり合い、お互いに殺し合いを始めていた。
わずかでも負けた方が喰らわれ、その肉体を失っていく。
喰らった方が肥え、その体をさらに太らせる。

それは悪鬼夜行の蟲毒の呪法だ。

何者かが龍脈の乱れに乗じて放った毒は形となってそこにいた。
自然現象により生じる怪に恐ろしい毒を混ぜたのだ。

それは喰らえば喰らうほど毒を増し、強力な力を得る。

強力なアヤカシを生み出すために編み出された窮極の呪法であった。

この地はまさに毒壺であった。

成長しきる前に滅ぼす

いかな魔人として無限の再生を可能とする毒壺の中では分が悪い。

来たれ

魔霧が終結し男に収まっていく。

吐き出した息は黄色く、毒を含んでいた。

肉体に取り込んだ毒壺の毒を吐き出すと、目は爛々と赤く輝き、
顔面が高質化していく。

空気さえも変質し、周囲の臭気と飛び散った焼き焦げた肉片さえも消滅する。

鼓動が一つ動くたびに筋肉が盛り上がり、素肌は漆黒へと変生し
その様はまさに悪鬼羅刹

蒸気が舞い上がり、濃い密度の鬼気に触れた、毒を含んだ空気が
滅されて燃え上がった。

黒き魔人が咆哮を上げ、鬼に襲い掛かり、触れた先より爆ぜ、碎

け散る肉と骨。

叩き潰し、捻り上げて四肢を裂き、黒炎をまとった霧がそれを焼き尽くす。

削られ痛みにも声を上げながら無限に再生する肉体を振り下ろす悪鬼ども。

だがその再生能力をも凌駕する速さで黒鬼が破壊の限りを尽くして滅していく。

一体を屠り、立ち向かうはさらに仲間を喰らった鬼である。だが黒鬼は止まらぬ。

すべてを破壊し滅ぼすまで動き続ける死神が獣の如く巨大な鬼に襲い掛かるのだった。

貯水池

「まさに鬼だな……」

「……」

戦場となった貯水池を前に人影が二つ立っていた。

青年に付き従うように背後に立った巫女服の女は息を潜めたように答えなかった。

「これが五大破家真霧の力か。中央も怖い男を寄越したな。どう見た、彼の力を？」

「境界を張り直します。撒かれた毒を中和するのに時間がかかりますから」

青年に対し女が答える。

あえて青年の問いには答えなかった。

女は真霧、という名に触れるのを恐れその名を口には出さなかった。

青年は気にした様子もなく戦場跡を踏みしめる。

あれだけの臭気を放った戦場も今はただの風景の一部と化していた。

滅され消え去るのはアヤカシの肉体である。

肉一片たりとも残さず、それらは魔霧によって焼き尽くされた。

「しかし打ち漏れか。あれだけの鬼を殲滅に近い形で滅したのに熱心なことだ」

「あれは蟲毒より生み出されしもの。放れば災いとなります」

青年が話題に上げ男、真霧灯依はすでにこの地を駆け去っていた。後詰に待機していた退魔師のペアに後処理は任せ、疾風の如くアヤカシが残した痕跡を追いかけて消えたのだ。

仲間からの増援を待つつもりでいたのだが、凄腕の退魔師が一人でアヤカシの脅威を退けていた。

二人に残されたのはこの地を封鎖し、地に残された毒を浄化することだけだった。

放っておけばまた新たなアヤカシが生まれかねない土壌を生み出してしまふ。

「後処理が一番面倒なんだがな。では結界を張る。一仕事になるな」

「はい、後始末は嫌いではありませんから」

青年の言葉にようやく感情の籠った声で女が返答を返した。

苦笑いを返し、青年は平穏を取り戻した貯水池に視線を投げかけた。

駆ける駆ける。

大地があつという間に過ぎ去り、視界の端から、歪んだ絵の具のように周囲の景色は溶けるように消えさつて行く。

瞬動を駆使した闊歩の技は瞬間的に秒速百歩近くを跳ぶことを可能にしていた。

すでにその技術は人の技と呼ぶには人外の域にまで達している。

黒鬼に変じた肉体はすでに元の身体に戻りつつあった。

いかな魔人であれ長時間をあの姿でいることは難しい。

気を探るが目標は巧妙に姿を隠しながら市街地へと向かっていた。力を取り戻すため潜伏し、人を喰らうつもりだろう。

そうはさせぬ

その前に、いや喰らうっててもかまわん、滅ぼすのであれば形はどうあろうとも構わない。

すでに市街地に入り雑多な気に紛れ、わずかな気配を手繰るのも容易ではない。

霧よ

魔霧が生じ、位置を掴むために標的が向かった方角に向けて放つ。霧によるセンサー。

妖気を検知するセンサーの中継微粒子へと変じたそれが空中を漂い、街中に拡散していく。

ビルの真上に降り立ち、コンクリートの床に膝を突くと真霧は精神を集中させる。

地下へ、人の歩く場所より下へ霧は浸透していく。

地下鉄、下水道、地下街

アヤカシは負のエネルギーが溜まりやすい地下を好む。

その習性を辿って真霧は霧を展開させていた。

そうして後はただ待てばよかった。

張り巡らせたセンサーに引っかかるのをその目を閉じてじっと待った。

一九話『病院 二人の少女』

不意に悪寒を感じて少女は身体を震わせていた。

心胆から突き抜けるような、おぞましさを帯びた冷気はほんの一瞬で背筋を駆け抜けると、不愉快な気配を残して消え去っていた。

少女は息を吐き出して、気のせいかと車道の外を眺める。

冷や汗が滲み出るように背中に吹き出していた。

少女は不安な色を帯びた視線を空に向けて、寒い、と小さく呟いて、今度は物理的な寒さに身体を縮めていた。

虚空を統べる色はグレーの色彩に支配され、白い雪の結晶を街路に降らせている。

降りしきるその白は地面に降り立つと黒い染みになって消えていく。

次第に雪は強くなり、アスファルトをあつという間に濡らしていた。

この寒さである、直に凍りつくことが予想された。

「ん。寒いなあ。手がかじかんでくるな」

運転席で仲井が赤毛の少女、ヴィータの呟きを聞き取ったのかそう答えた。

仲井が気を使って暖房の温度を上げるのだが、吹き出す生暖かい風は音を立てるものの車内は一向に暖かくならない。

ラジオからは道路交通情報のアナウンスが声を響かせている。

目を瞑って言葉少なくじっと座るヴィータに対し、隣で運転する仲井は口を閉じなかった。

「地面やばいな。帰りは凍るかもな、チェーンを用意しとかなかったのは失敗かなあ」

「うん」

「あー、駄目だ混んでるな……。事故でも遭ったのかねえ」

仲井がハンドルに両手を乗せて愚痴る。

道路交通情報の声に耳を傾けると玉突き事故が発生と聞こえてくる。

そのせいだろうと停滞する道は車で混雑していた。

目の前の車のボンネットと屋根には白い雪が溶けずに降り積もり始めていた。

この時期にはまだ早い雪だったが、降り始めてしまえば温かくなるというのは楽観的な考えである。

あちこちで車のクラクションが鳴らされている。

チカチカ、と赤と黄色、ネオンサインが目の前で点滅している。

その色がグレーの空に場違いな色彩の点を振りまいていた。

すでに市内の中心だが、この混雑では病院に着くまでしばらく時間がかかりそうだった。

しばらくして車が動き出していた。

病院

「降り始めたね、雪」

病院の窓際で空を眺めていた一人の少女が呟いた。

藍色の髪を留める黄色いカチューシャが印象的で、話しかけられた少女はそのカチューシャの少女の方を眺めていた。

「うん、雪かぁ。積もるんかな？」

「どうかなあ？ 寒いし積もるかもねえ」

藍色の少女は眼下の駐車場を眺めたまま振り返らない。

吐き出された白い息が窓ガラスを白く染め上げて、それを指先でかき回しては消すという動作を繰り返していた。

窓ガラスにはベッドの少女と、ウサギのぬいぐるみが映っている。

「そや、積もつたら一緒に雪達磨作らん？ かまくらでもええけどな」

「えー？ うん、いいよ。はやてちゃんに雪ウサギ作ってあげる」

雪ウサギはほんわり小さな雪のウサギ。

赤い実の目をした真つ白なウサギさん。

はやてはその姿をイメージして歌い出す。

「ウサウサ、ウサコンウサコンコン。ウサコン、ウサコン、ウサコンコン」

はやてと呼ばれた少女はベッドの上で呪いウサギのぬいぐるみを手で歩かせる。

何の歌かとすずかが振り向いた。

はやては妙な歌と音頭でそれを踊らせていた。

「あんなあ、ウサミー。すずかちゃんがウサギさんこさえてくれるってー」

呪いウサギに話しかけるはやて。

このぬいぐるみはマスコットキャラである。

名前は呪いウサギのウサミー。

テレビのアニメーションで児童向けの放送番組で登場するキャラクターであった。

すずかは呪いウサギは知っているものの、あまりその手の番組は見たことがなかった。

興味があるのはもつと科学的で工学的価値を持つ機械だったりするのだが、女の子同士でそんな話で盛り上がるはずもなく、さすがは苦笑いを返すのみだった。

ウサギのぬいぐるみと戯れるのは八神はやて。
藍色の髪のカチューシャの少女は月村すずか。

この二人には本来共通点は存在しない。
住んでいる場所も通う学校も異なる。

はやての場合、学校には通っていないのだが、それは本人が抱える足の障害も関係していた。

二人が出会ったのは市立の図書館である。

すずかも大人びているとはいえ、年相応に児童向きの本も読む。

はやてに本を取って欲しいと頼まれ、手に取った本のタイトルが読んだことがあるものだったので、それはお勧めだと紹介したのだ。
二人の縁はそれがきっかけだった。

身寄りの少ない八神はやての境遇に同情したこともあった。

足の治療をするための再度の再検査入院に、一人では寂しかろうと暇を見ては病院に顔を出していた。

レントゲン撮らなあかん、と言うはやての車椅子を押しての帰り道。

病棟の個室の前をすずかが通りかかる。

戸がわずかに開いているのを見つけて、人が見ていないのを確かめて、好奇心に負けてすずかは覗き込んだ。

無論すぐに閉めるつもりだったのだ。

何、どうしたん？ というはやての声を後に見たものはいくつものチューブに繋がれている青年の姿だった。

電子音が室内にこだまする。

生命維持装置。

人目でずずかには理解する。

この病室の主はかなりの重態であること。そして看護疲れをしたのだろうか、母親らしき人がベッドにうつ伏せていた。

規則正しく肩が上下するのを見て一安心するが、ずずかの胸の内は後悔に包まれていた。そつと扉を閉める。

***号室『天道司』

患者名のプレートを見上げるずずか。

「こないだえらい轢き逃げ事故に巻き込まれてたお兄ちゃんや。引いた犯人、まだ捕まってるらしいで？」

「そうなの……」

はやての車椅子を引いてから押し出す。

「大学生だったかなあ？ 交代でご両親が看病してるんよ。意識…全然戻らんらしい。植物状態やて……」

ぬいぐるみを抱くはやての手に力が籠る。

はやての部屋に到着して車椅子を乗り入れる。

待ち構えていたのは看護婦さんだった。

「はい、はやてちゃんお帰りなさい。次は血液検査よ」

「げ、げえー」

「女の子がそんな声上げるんじゃないありません」

「ずずかー助けてー」

はやてのすがる視線。

だが、すずかは一歩下がって首を振ってニッコリ笑う。

「無理、助けられないからね？」

「殺生やー」

「大人しくしてればほんのちよつと痛いだけで済むから」

「いややー、やっぱり痛いんじゃないかーっ!!」

はやての叫びが部屋をつき抜け雪の空にこだました。

駐車場

車を降りて病院を見上げるヴィータは眼を細めて雪を眺めていた。目に雪が入って目を瞑ると、雪は溶けて水に変わり顔を濡らした。あれから雪は深くなり大粒に変わっていた。

渋滞は一五分ほどで抜けて、ようやく到着したのだ。

何せこの天気だ。

渋滞の原因である玉突き事故の処理に手間取っているのだろうと予測はできた。

運転席から仲井が降りてヴィータの隣に並んだ。

肩に手が回されて、行こうか、と促されて二人は病院の自動扉をくぐっていた。

地下

そこは暗く冷たく安寧の闇の中。

蠢くおぞましき肉の塊がずると何かを引きずり、ピシャン、と音を立てて何かが下水道に落ちた。

黒い水の中、浮かび上がるのは何万もの糸状に濡れたもの。それはくるりと回ってその正体を露にしていた。

闇の中、ハイヒールを履いた片足が零れ落ち、食べこぼしたそれを手らしき鉤爪が掴んだ。

水の上に浮かぶのは若い女の顔。

絶望の果てに生きて首をねじ切られた無残な生首が水の上を流れ、そして沈んでいく。

虚空にこだまするは肉の咀嚼音。

肉を裂き、骨を砕く。

そしてそれは一人ではない。

数人の男女の遺骸を組み敷いてそれはただ貪るように食事をしていた。

女の肉と柔らかい子どもものを喰らい、それは低く唸り声を上げる。

休日の家族連れの子をさらい、餌としたのだ。

河川敷近くの端を通りかかった車を襲い、人間だけをさらって排水溝を伝って走ったのだ。

その際、車が玉突き事故を起こし炎上したのだが、そのようなことなど一切関知しない。

排水溝を抜ける際、せつかくの肉も押し潰してしまっただが、構うことなく喰らい続けていた。

足りぬ、まだ足りぬ。

意思、獣のごときものであったがそれは意思を持って思考する。

「彼奴」がいる！！

追ってきている。

非常な意志を持つ退魔師が追ってきていることを本能で嗅ぎ取っていた。

それを感じ取りながら力を得るためにその嗅覚を巡らせる。

ああ、喰らいたい。

もっと殺したい。

喰らい尽しそれは毒を吐き出す。

ああ、見つけた。

喰らおう、喰って喰ってまた殺そう。

それは下水道を伝い、上を目指して這いずり出した。

新たな獲物を見つけたのだ。

一九話 『病院 二人の少女』 (後書き)

問い 1 .

餌になるのは誰？

- 1 . すずか
- 2 . はやて
- 3 . ヴィータ
- 4 . 天道司
- 5 . 仲井
- 6 . 看護婦さん

新年初になります。

またあとで書き直すかもしれない。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3668y/>

俺が事故って起きたら紅の鉄槌少女（ヴィータ）になっていた【ネタ】

2012年1月6日05時55分発行